

## 中 の 山 遺 跡



1982

亀田町教育委員会

# 序

本書は昭和56年度に亀田町教育委員会が実施した、亀田町城所2および元町5丁目地内の「中の山遺跡」緊急発掘調査記録であります。

この調査は亀田町農業協同組合が宅地造成を行うことに依り緊急発掘調査を必要とし関係機関と連絡をとり行つたものであります。

本遺跡の調査によって土器類多数および堅穴式住居址や工房址など町の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

この調査に依り先人の生活をうかがい知ることができ、今後の調査研究に期待がもたれるものであります。

この調査には、亀田町農業協同組合による物心両面の協力と本調査の指導と執筆にあたられた 日本考古学协会会员・川上貞雄氏を始め関係各位のご協力に対し心から感謝申しあげます。

昭和58年3月

亀田町教育長 告川忠雄

# 1. 例 言

- 本書は昭和56年度に、新潟県中蒲原郡龜田町地内において耕地の宅地造成事業によって破壊埋滅されることになった跡跡の緊急発掘調査報告書である。
- 本調査は龜田町農業協同組合と龜田町教育委員会との契約に基づくもので、昭和56年6月16日から8月26日迄の現地調査、同年8月31日から9月12日及び9月28日から12月25日迄の整備作業によって終了した。
- 調査費用の内、現地調査費は龜田町農業協同組合と龜田町教育委員会がそれぞれ分担し、整理費用及び出版費用は龜田町教育委員会が負担した。
- 出土遺物の総数6,657点及び調査記録は全て龜田町教育委員会が保管する。
- 本書は検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおいた。本文の執筆はⅠ-1を吉田宗、Ⅱ-2を真島信二が分担し、他は川上が行った。
- 遺物実測図の内Noに記したH、S、Tの記号はH=土師器、S=須恵器、T=中世陶器を示すものである。
- 調査参加者は次の通りである。

調査担当者 川上貞雄（日本考古学协会会员）

調査員 酒井和男（県文化財保護指導員） 杉本恵子（考古学研究家）

遠藤孝司（立正大学学生）

調査補助員 真島信二（地元有志） 佐々木恵（新潟大学学生） 大羽賀浩（足利工業大学学生）  
松田トシイ（地元有志） 村木ヨリ（地元有志） 佐々木アサ子（地元有志）

作業員 見田勇二 高橋シチイ 馬場ハルノ 小池栄子 佐藤貞子 杉本マツエ  
石沢イッ子 馬場チズ子 中村ミツエ 高橋和子 鈴木俊子 勝山隆子  
青木道子 大野睦 高野裕之 立川和由 武藤和行 村木信雄 長谷部豊  
林秀樹

調査協力者 金子拓男 山本源吾 龍山建設 清水正一 立川重衛 斎藤政雄 羽下貴美  
水原博物館 他

事務局 山田正治 山崎栄四郎 山本重次郎 南場進 高橋秀隆（専従）  
(以上農業協同組合)

宮腰清（町長） 告川忠雄（教育長） 鈴木十三夫 吉田宗（専従） 武田昭和  
渡辺誠一 横並秋廣 芳賀龍彦 告川房子  
(教育委員会)

## 目 次

1. 序 章.....	1
1) 発掘調査に至るまでの経過 .....	1
2) 遺跡の地理的環境.....	3
2. 遺 跡.....	4
1) 遺跡と調査範囲.....	4
2) 調査日誌.....	7
3. 遺構と遺物.....	16
1) 遺構と遺構内出土の遺物.....	16
2) 遺構外出土の遺物.....	75
4. まとめと課題.....	93
1) 遺構遺物の特徴と年代.....	93
2) 遺跡の性格について.....	95

## 插 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置及び 周辺の遺跡分布図	2	第 29 図	第 1 号井戸出土遺物	39
第 2 図	遺跡全測図	5	第 30 図	第 2 号井戸	41
第 3 図	発掘地区区分図	6	第 31 図	第 2 号井戸構成遺物	42
第 4 図	遺構全測図(1)	11・12	第 32 図	第 2 号井戸出土遺物	42
第 5 図	〃 (2)	13・14	第 33 図	第 3 号井戸	43
第 6 図	〃 (3)	15	第 34 図	第 3 号井戸址構成遺物	44
第 7 図	住 店 址	17	第 35 図	第 4 号土坑	45
第 8 図	住居址出土遺物(1)	18	第 36 図	第 5 号土坑	46
第 9 図	〃 (2)	19	第 37 図	第 6 号土坑	47
第 10 図	第 1 号小形建物址	20	第 38 図	第 7 号土坑	47
第 11 図	第 2 号小形建物址	20	第 39 図	第 8 号土坑	48
第 12 図	第 2 号小形建物址出土遺物	21	第 40 図	第 9 号土坑	48
第 13 図	第 3 号小形建物址	22	第 41 図	第 10 号土坑	49
第 14 図	第 4 号小形建物址	23	第 42 図	第 11 号土坑	50
第 15 図	第 5 号小形建物址	24	第 43 図	第 12 号土坑	51
第 16 図	第 6 号小形建物址	25	第 44 図	第 13 号土坑	52
第 17 図	第 1 号火床址	26	第 45 図	第 14 号、第 15 号土坑	52
第 18 図	第 1 号火床址出土遺物	27	第 46 図	第 16 号井戸	53
第 19 図	第 2 号火床址	28	第 47 図	第 16 号井戸構成遺物	54
第 20 図	第 2 号火床址出土遺物	29	第 48 図	第 17 号井戸(1)	54
第 21 図	第 1 号溝址	30	第 49 図	第 17 号井戸(2)	55
第 22 図	第 1 号溝址及び A・T、B・T出土遺物	32	第 50 図	第 17 号井戸構成遺物	56
第 23 図	第 2 号、第 3 号溝址	33	第 51 図	第 17 号井戸出土遺物(土器)	57
第 24 図	第 2 号、第 3 号溝址出土遺物	34	第 52 図	第 17 号井戸出土遺物(木器 1)	58
第 25 図	第 5 号溝址	35	第 53 図	第 17 号井戸出土遺物(木器 2)	59
第 26 図	二重周溝造構址	36	第 54 図	第 18 号土坑	60
第 27 図	第 1 号井戸	38	第 55 図	第 19 号土坑	61
第 28 図	第 1 号井戸構成遺物	39	第 56 図	第 20 号、21 号土坑	62
			第 57 図	第 22 号土坑	63
			第 58 図	第 23 号土坑	63

第 59 図	第24号土坑.....	64	第 75 図	遺構外出土遺物(土師器 2).....	76
第 60 図	第25号井戸址.....	65	第 76 図	遺構外出土遺物(土師器 3).....	77
第 61 図	第25号井戸構成遺物.....	66	第 77 図	遺構外出土遺物(土師器 4).....	78
第 62 図	第25号井戸出土遺物.....	66	第 78 図	遺構外出土遺物(土師器 5).....	79
第 63 図	第26号土坑.....	67	第 79 図	遺構外出土遺物(土師器 6).....	80
第 64 図	第27号土坑.....	68	第 80 図	遺構外出土遺物(土師器 7).....	81
第 65 図	第28号土坑.....	69	第 81 図	遺構外出土遺物(土師器 8).....	82
第 66 図	第29号土坑.....	70	第 82 図	遺構外出土遺物(須恵器 1).....	83
第 67 図	第30号土坑.....	71	第 83 図	遺構外出土遺物(須恵器 2).....	84
第 68 図	第31号、32号、33号土坑.....	71	第 84 図	遺構外出土遺物(須恵器 3).....	85
第 69 図	第34号土坑.....	72	第 85 図	遺構外出土遺物(須恵器 4).....	86
第 70 図	第35号土坑.....	72	第 86 図	遺構外出土遺物(須恵器 5).....	87
第 71 図	第 4 号、5 号、27号 土坑出土遺物.....	72	第 87 図	遺構外出土遺物(中世陶器 1).....	88
第 72 図	第15号、18号、20号、 28号土塗出土遺物.....	73	第 88 図	遺構外出土遺物(中世陶器 2).....	89
第 73 図	第15号、16号、31号土塗 出土遺物(木製品 他).....	74	第 89 図	遺構外出土遺物(中世陶器 3).....	90
第 74 図	遺構外出土遺物(土師器 1).....	75	表	井戸計測表.....	92

## 図 版 目 次

1. 遺跡全景(発掘調査前) .....	1
2. 発掘風景 .....	2
3. 1. 第 2 区全景、2. 第 1 南区ピット群 .....	3
4. 1. 第 1 南区の遺構群 2. 1 号溝東南端 .....	4
5. 1. 第 1 区南側全景 2. 第 1 区北側全景 .....	5
6. 1. 第 4 層遺物出土状況 2. ピット内遺物出土状況 .....	6
7. 1. 住居址発掘風景 2. 住居址 .....	7
8. 1. 1 号小形建物址、2. 3 号小形建物址 .....	8
9. 1. 2 号小形建物址、2. 2 号小形建物址内の遺物出土状況 .....	9
10. 1. 5 号小形建物址 2. 2 号火床 .....	10
11. 1. 1 号火床遺物出土状況 2. 1 号火床 .....	11

12. 1. 2. 1号溝(部分) .....	12
13. 1. 2号(左) 3号溝 2. 二重周溝遺物 .....	13
14. 1. 1号井戸 2. 2号井戸 .....	14
15. 1. 3号井戸 2. 3号井戸柱穴 .....	15
16. 1. 4号井戸 2. 23号土坑 .....	16
17. 1. 15号、14号(右) 土坑 2. 15号土坑 .....	17
18. 1. 17号井戸中層 2. 17号井戸 .....	18
19. 1. 17号井戸納組 2. 17号井戸上層 3. 25号井戸 .....	19
20. 1. 16号井戸 2. 16号井戸部分 3. 4. 16号井戸構造材 .....	20
21. 1. 24号井戸 2. 19号土坑 .....	21
22. 1. 2. 土師式土器1類 3. 土師式土器1、2類 .....	22
23. 1. 土師式土器1類 2. 土師式土器2類 3. 土師式土器底部 .....	23
24. 1. 土師式土器丹塗 2. 黒色土器 3. 土師式土器底部1、2類 .....	24
25. 1. 2. 3. 土師式土器3類 .....	25
26. 1. 2. 須恵器(広口壺) 3. 須恵器(短頸壺、長頸壺) .....	26
27. 1. 須恵器壺蓋 2.~4. 須恵器壺 .....	27
28. 1.~3 須恵器碗 .....	28
29. 1. 須恵器有耳壺 2. 須恵器壺蓋 3. 須恵器刻印 .....	29
30. 1. 須恵器系中世陶器壺 2. 須恵器系中世陶器壺 .....	30
31. 1. 2. 須恵器系中世陶器壺体 3. 須恵器系中世陶器壺片の施紋 .....	31
32. 1. 中世瀬戸系陶器 2. 青磁碗 .....	32
33. 1. 染付 2. 近世陶器 3. 紹聖元宝 .....	33
34. 1. 土鍤 2. 石鍤 3. 羽口 4. 5. 鉄製品 6. ドロメンコ .....	34
35. 1. 2. 17号井戸出土盆、木環 3. 楪 4. 漆腹剥離片 .....	35
36. 1.~8 木器片(檜、折敷 他) .....	36
37. 1. 2. 箸、 3~5. 木器片 .....	37
38. 1. 2. 種子類 3. 杭(1号溝) .....	38
39. 1. 1号井戸隅柱 2. 1号井戸横棧 3. 2号井戸底部横棧 4. 3号井戸底部横棧 .....	39
40. 1. 17号井戸隅柱 2. 17号井戸横棧 3. 17号井戸曲物まなこ片 4. 17号井戸側板 .....	40
41. 1. 2. 25号井戸側の曲物 3. 3号井戸曲物まなこ片 .....	41

# 1. 序 章

## 1) 発掘調査に至るまでの経過

亀田郷は、かつて地図にない湖とまで言わされたように低温地帯として有名であったが、東南にかけて新潟砂丘と呼ばれる砂丘があり、そこからは縄文時代の遺跡が見られるよう古くから人が住んでいたことがうかがい知れる。亀田町には周知の埋蔵遺跡として32ヶ所登録されているが、新潟市に隣接しており宅地開発が頻繁に行れており遺跡の保護に苦慮をしているところである。

昭和54年10月亀田町域所地内にある果樹地帯を住宅地にしようとの計画が亀田町農業協同組合に起り、急速その取扱いについて亀田町農協と話し合いをもったが、地権者との合意ができず開発計画は延期されていたが、昭和56年度中に造成工事を完了させるとの届出が出され、直ちに県文化行政課に出向きその取扱について指導を受けた。昭和56年4月23日県文化行政課より金子埋蔵文化財係長、藤巻学芸員が来町し、つぶさに現地を見、確認調査を行った。その結果早急に発掘調査を行う必要があることとなり、その調査担当に日本考古学協会員川上貞雄氏を紹介される。同月28日亀田町農業協同組合専務以下役員数名と県文化行政課へ出向き埋蔵遺跡の取扱いについて具体的な指導を受ける。同5月9日北蒲原郡笛上村出湯に川上貞雄氏を尋ね調査について依頼をし、同氏の承諾を得る。

5月29日、亀田町農業協同組合で川上氏を交えて打合せを行う。

6月9日、川上氏を五泉市教育委員会に尋ね実施計画についての指示を得る。

6月16日、遺跡周辺の測量を川上氏と助手の杉本さんで行う。

6月17日、伐採した梨の木の焼却を地権者が行う。

6月18日～20日、バックホーを入れて表土の除去を行う。

6月23日、作業員18名で発掘調査に入る。

(吉田 宗)



- △印・縄文時代、弥生時代の遺跡 ○印・秦良時代、平安時代および中世の遺跡 ◎印・遺跡
- |           |          |         |          |         |         |         |
|-----------|----------|---------|----------|---------|---------|---------|
| 1. 鶴ノ子    | 2. 下西    | 3. 泥湯   | 4. 早通前   | 5. 西前郷  | 6. 養海山  | 7. 八幡前  |
| 8. 手代山排水路 | 9. 武左衛門裏 | 10. 日水  | 11. 宗徳寺裏 | 12. 牛道  | 13. 城山  |         |
| 14. 斉助山   | 15. 三王山  | 16. 荒木山 | 17. 具塚   | 18. 手代山 | 19. 萩曾根 | 20. 狐山  |
| 21. 市助裏   | 22. 川西   | 23. 茨島  | 24. 岡田   | 25. 上沼  | 26. 砂岡  | 27. 上ノ山 |
| 28. 三絆岡   | 29. 塚ノ山  | 30. 向山  | 31. 前山   | 32. 彦七山 | 33. 金塚山 | 34. 浦ノ山 |
| 35. 砂崩    | 36. 迎山   | 37. 前郷  | 38. 山ノ家  | 39. 団浦輝 |         |         |

第1図 遺跡と周辺の遺跡分布図

## 2) 遺跡の地理的環境

亀田町から新潟市大江山地区に向って新潟砂丘と呼ばれる2条の古い砂丘が走る。地質学的には古砂丘と呼ばれるものだそうだが、地元では山通りと呼んでいる。その内の1条は現在の阿賀野川辺りより細山、直山、松山、西山、茗荷谷、丸山、北山の集落が並びおそらく稻葉、萩曾根へと続くであろう。内陸側のものは同じく藤岡、笛山、平山、藤山、駒込、砂崩、砂岡、袋津、所島、城所、茅野山の地名を持ち文字通りの山通りである。亀田街はこの2条の砂丘に跨がって営まれたものである。越後平野の2大河、信濃川と阿賀野川にはさまれ、小阿賀野川に接する。古くから交通の要所と云われ、内陸、そして日本海への中継地点でもあった。

遺跡は街の南西側の微高地、亀田排水路に面した2条の砂丘間に位置する。この地域は古い街屋統きの熊野神社、城所公園、火葬場等を含んだ広い地域で現況は宅地、水田、果樹園である。遺跡地域を含め周辺は特産の二十世紀梨と葡萄の大生産地帯である。遺跡の標高は2mであり遺跡地内の水田は数十cm下る。前述の2条の砂丘の標高は現在人工的な要素もあらうが最高地点5.5m、最低は1.5m、大方は2~3mである。砂丘の南側に当る内陸面の水田地帯は1.4m、2条の砂丘間の水田面は1~1.3m、砂丘北面一帯は農道上で0~0.3m、水田面はさらに数十cm低い。現在では越後平野で名高い水田地帯であるが、かつてはドジョウを輸出したと云う程の大水郷地帯であった。戦後の土地改良による栗ノ木川排水機の完成による乾田化は驚異とまで云われた。

第1図は遺跡の位置と周辺の遺跡及び散布地の分布図である。これを観るかぎり市街地内はさておき砂丘上、特に内陸側のそれに多数の遺跡が集中し、さらに当遺跡の南北に特に集中していることが解る。これらの中30の向山遺跡は石器のみの出土であり、15の三王山は中世陶器以降の出土品が主体である。その他は一部縄文式土器、弥生式土器を含む複合遺跡ではあるが總てが土師式土器、須恵器の出土が報告されており単純に見て奈良~平安時代の遺跡と考えられる。加えて当遺跡の様に中世陶器の出土を見るものは4の早通前、11の榮徳寺裏であり当遺跡以南に限られている。今この狭い地域に土師式土器、須恵器を出土する地点が接近しすぎておりむしろ不自然さえある。この地域では想像されない巨大な規模の1遺跡にまとまったとしたらそれこそ大変なことであるが、その可能性は大きい。遺跡はそれらの遺跡の程中心部に位置する。

### 註

1. 酒井和男「三王山遺跡」(亀田町教育委員会 1980年)

## 2. 遺跡

### 1) 遺跡と調査範囲

すでに前章に記述したことではあるが、本遺跡は亀田町の市街地西側に添って流れる大規模な亀田排水路が大きく西側に湾曲した地点、即ち微高地の先端に位置する。正確な地籍は亀田町元町小字中の山、同荒木前、同城所、同荒木浦等の旧市街地区の裏側に於けるもので、その現況は宅地、果樹園、水田、火葬場を含む墓地等にまたがる広範囲の遺跡であり、新潟県遺跡地図掲載の「貝塚遺跡」とは同一遺跡と做される可能性がありそれらの合計は推定面積で約1,200,000m<sup>2</sup>をを計る。

本遺跡の「中の山」を含めて「荒木前」「貝塚」共これまでに採集された出土遺物はいずれも土師器、須恵器及び中世陶器に限定されており、遺跡の名称としても旧地名表示に使用されていたところの「貝塚」遺跡は一般に知名度が高い様だ。尚この周辺には「石の唐戸」が埋蔵されているとの伝承があり、かって、それに関する古文書が存在したことである。石の唐戸とは中世前葉の石櫃かあるいは古代の石棺が埋蔵されていたものであろうが、おそらく昔時、それらが検出されたことがあろうし、そう云うことからしても地域にとっては知名度の高い遺跡でもあった様だ。今当面した遺跡の範囲は第2図に示したところは、全域で90,000m<sup>2</sup>と推定され、この度宅造によって削平される面積は約47,000m<sup>2</sup>である。発掘調査に先行して行われた確認調査は、同図T・1からT・13までの12ヶ所を試掘した。この結果は総べての位置より遺物が検出され、一部では何らかの遺構も確認した。

本調査は、予算的及び時間的な制約のためごく限られた範囲に止まざるを得なかった。その位置は最も保存状態が良かろうと推定される2ヶ所と、遺跡内の運河状遺構とそれに連なる水路の確認に終りし、同第2図に示したところであり、その面積は約4,100m<sup>2</sup>にすぎなかった。

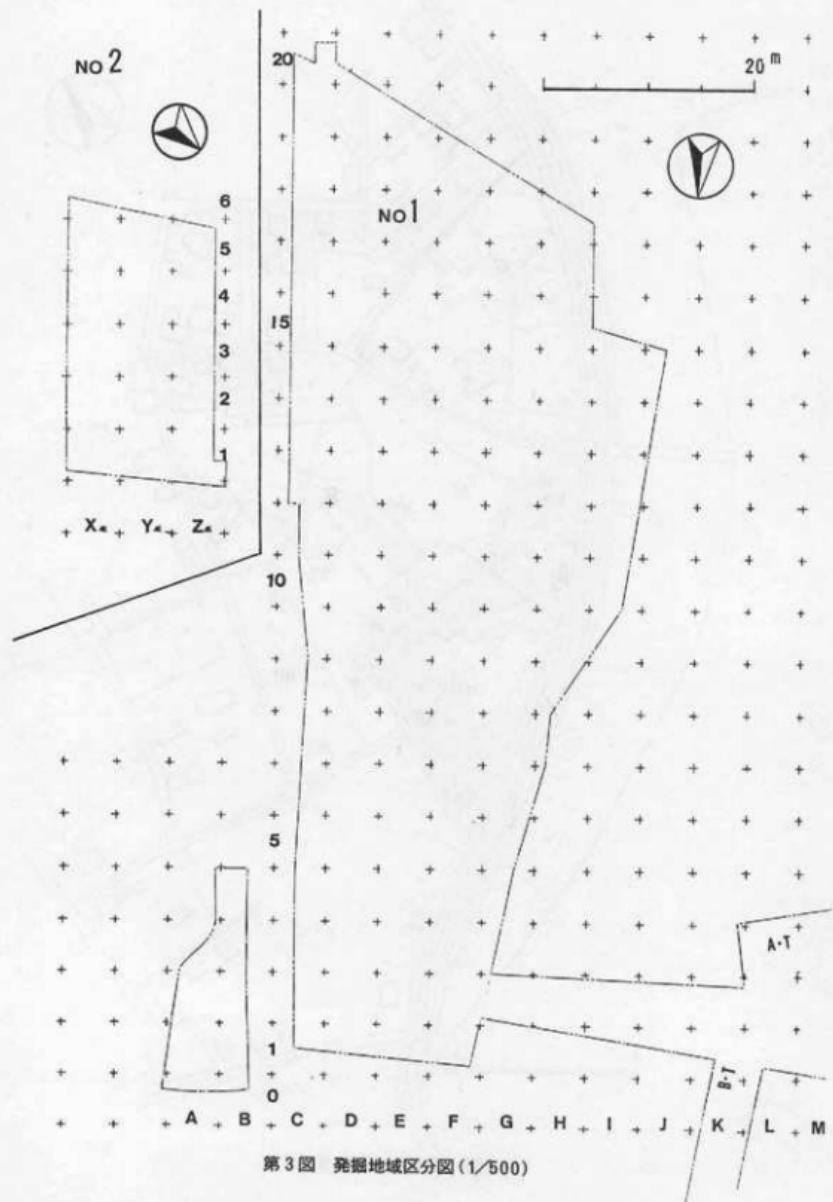
調査区域は第4、5図に示した第1地区としたものと第6図に示した第2地区であり、それぞれ5m×5mグリッドを組んだ。

遺跡の地層序列は1層の黒色土層、2層は茶褐色混土層（一部遺物包含層）、3層及び4層共に黄褐色粘質土層で遺構形成層であり、部分的には混土層でもある。5層は黄色砂質土層であり6層は砂層である。以上の内3層、4層が遺物包含層であり、又遺構形成の始まりとなる。今第3層に於ける遺物は須恵器、土師器（第1類、第2類）、中世陶器であり、4層は土師器に限られている。然ながらこの3、4層の区別がはなはだ困難を極めた。おそらく度重なる冠水の所以と考えられる。

次項に検出した遺構について記述するが、第4～6図の遺構全剖面図中の記号の内Hは住居、Cは小形堅穴遺構、Fは火床遺構、Dは溝遺構、Aは井戸遺構である。



第2図 遺跡全測図(1/3,000)



第3図 発掘地区区分図(1/500)

## 2) 発掘調査日誌

- 6.16 晴 遺跡全体測量を開始、3名
- 6.17 晴 前日に同じ、3名、範囲を  $500 \times 300\text{m}$  と推定した。この日開発地区内において果樹の焼却作業が地元関係者によって行われた。4名。テント張り本部設営す。
- 6.18 雨後晴 バックホー、ブルトーザー各1台による果樹抜根作業と表土除去作業に入る。4名。
- 6.19 曇 重機による表土除去作業。表土除去終了地区からグリットを設定する。グリットは  $5 \times 5\text{m}$ とした。4名。
- 6.20 晴時々曇 前日と同じ。4名、午前中事務局、担当者、調査員、調査補助員等調査内容等の説明及び打合せを現地にて行う。
- 6.21 晴 日曜日休み。
- 6.22 雨 重機による表土除去作業及びグリット設定作業。4名。
- 6.23 雨 本日より作業員による作業開始す。2層土の排除C例  $5\text{m} \times 8\text{区} = 40\text{m}^2$ 。雨愈々激しく午後の作業を中止。20名。
- 6.24 晴 冠水を免かれた2区(X-Z例)の2層土の除去作業を行う。X例3区、Y例4区、Z例5区の合計  $60\text{m}^2$  を終了、遺物(土師器)細片なれども多数検出、H = 137cmで一括土器検出。17名。
- 作業員休息場所設営。
- 6.25 曇時々小雨 第2区の残区2層土除去作業及び遺構掘り(X-Z-4~5区)、19名。
- 6.26 晴 2区遺構掘り(Y、Z-3~5区、Z-1~2区)。18名。  
一輪車不足の為購りの火葬場より借用す。“火葬場1号、2号、の一輪車には若手近寄らず”。
- 6.27 雨 雨の為中止、冠水。
- 6.28 雨 曜日
- 6.29 雨 排水溝の掘削作業を行う。
- 6.30 曇後晴 冠水の為中止。
7. 1 晴 排水作業で困難する。2区遺構掘り、大形土坑(井戸)の検出、実測作業の開始。15名。
7. 2 小雨後曇 2区内遺構掘りほぼ完了、内部施設を残す井戸3基検出す。  
午後より一部の作業員1区の2層土排除作業に移る。17名。
7. 3 曇後晴 全員で2区の表面清掃、自在延長梯子による高所より全景撮影を行う。午前後半より2班に分れ、1班5名は2区において昨日の井戸跡らしき遺構を更に掘削(2~3号井戸)。  
2班は1区C~E例の6~8区( $5\text{m} \times 3 \times 3$ )の  $45\text{m}^2$  の2層土の除去作業を行う。14名。
7. 4 曇 1区2層土及び1部3層土の排除作業。層序複雑なり。16名。  
作業終了後記念撮影及び反省会を兼ねて慰労会を行う。(各自物出しによる)。

- 杉本 本日で終了。
7. 5 晴曇雨 日曜日。
7. 6 曇晴 1区2層除去作業。A～G例8通りまでは終了。2区2、3号井戸及び1号井戸等掘削及び実測に5名。17名。  
一輪車等不足資材搬入。
7. 7 雨曇 雨の為作業員休み、2区井戸造構の実測作業。1名。
7. 8 晴 1区造構掘り（6基の大形土坑）。16名。
7. 9 晴 1区北側造構掘り、一部実測、撮影作業に入る。15名。
7. 10 晴曇 前日に同じ。17名。  
遺物についての講議が行われた。
7. 11 曇晴 前日に同じ。13名。
7. 12 晴 日曜日。
7. 13 晴 前日に同じ。本日大型土坑2基検出し、作日より都合10基を掘削す。15名。
7. 14 雨後曇 雨の為休み。
7. 15 晴 1区北半冠水の為南半の2層土排除作業（C、D-17～19）。12名。  
欠勤者多い為増員の要請をする。
7. 16 晴 （梅雨明け宣言）1区南半2層土排除。18名。  
一輪車、箕等用具補充する。
7. 17 晴 1区2層土除去作業。1区北半造構内排水作業。（作業員高橋（和）氏よりポンプ借用せり）。16名。
7. 18 晴 主として1号溝掘削、一部実測。本日も造構内の排水作業。18名。
7. 19 晴 日曜日。
7. 20 晴 晴天続きだが滲透する雨水の為本日も造構内排水作業を行う。1区南半2層土排去作業、1号溝掘削。16名。  
県文化行政課係長金子拓男氏視察、御指導を賜わる。
7. 21 晴 1区北半、排水作業と造構掘り、南半2層土除去作業。1号溝に続く排水路及び本流等 A・T、B・Tと称してバックホーによる追跡調査を行う。上層土の除去。18名。
7. 22 曇雨一時晴 1区拡張部A、B-1他造構掘り。1区南半2層土除去作業。一部造構の実測。16名。  
11時頃より豪雨となり、午後の作業を中止する予定のところ晴れたので作業再開、連絡不能の者休み（3名）
7. 23 晴 造構内排水作業、実測。南半2層土除去。D-12区遺物集中出土す。19名。
7. 24 曇晴 1区南半2層土除去作業、北半排水作業、A・T、B・T水路掘り。17名。

本日より遠藤調査員勤務。

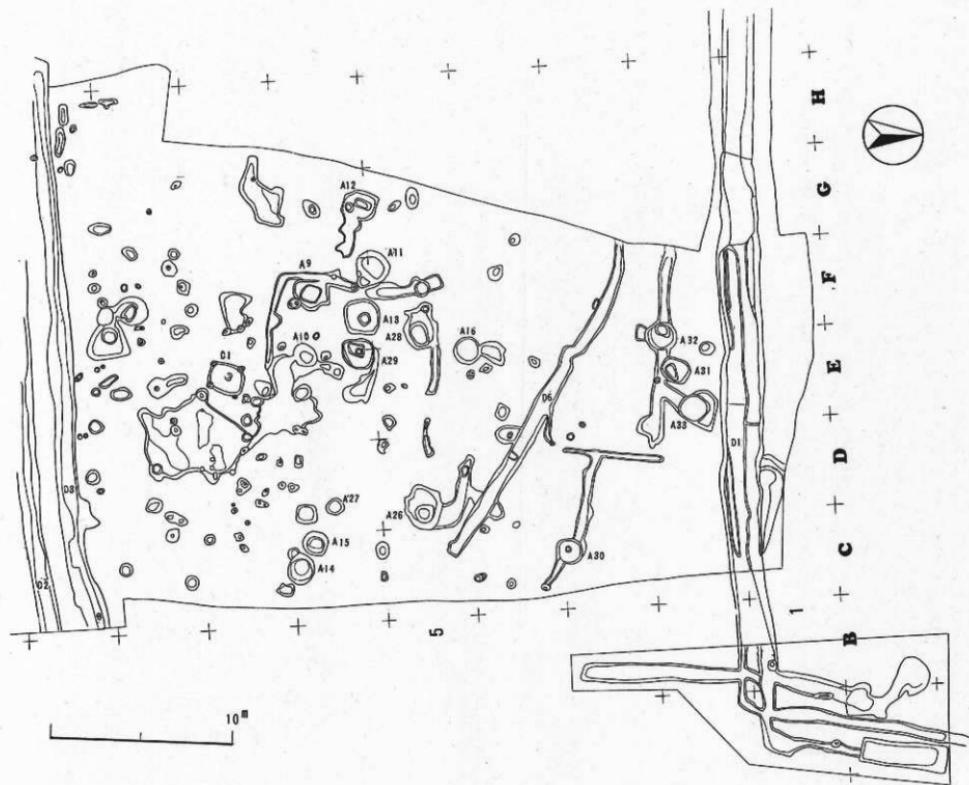
- 7.25 晴 1区北半地域の清掃作業。この作業によって16号井戸遺構新たに検出。1区拡張部掘削。A・T、B・Tの実測を行う。17名。
- 7.26 晴 日曜日。
- 7.27 晴 A・Tの一部掘直しを行う。拡張部清掃、昨日検出の16号井戸内部遺構の完掘作業及び実測。南半地区2層除去。18名。
- 7.28 晴 1区北半の全体撮影。自在延長梯子による高所より撮影。同区一部遺構実測。16井戸内部施設材取揚及び同遺物の実測、保存処理作業等が行われた。南半区の2層土除去作業続く。19名。
- 7.29 晴 F-8区内一部掘直しが行われた。1区北半全体実測。同南半2層土除去及び一部遺構掘り開始(C-E-9~11区)。22名。
- 7.30 晴 1区北半平板測量続行。南半は昨日同様なり。22名。
- 7.31 晴 1区南半2層土除去大体終了し、全員遺構掘りに移る。20名。  
連日の極暑、乾燥はげしく、大排水路より揚水し、撒水作業が必要となる。
8. 1 晴 遺構掘り。特に17号井戸検出。極暑、乾燥はげしく撒水3回となる。19名。
8. 2 晴 日曜日。
8. 3 晴 乾燥はげし撒水作業後遺構掘り、遺構実測と写真撮影。16名。
8. 4 晴 後曇 撒水、遺構掘り。2号、3号溝及び2号小型竪穴等掘上げ清掃作業。17号井戸上部遺物等記録す。16名。
8. 5 曇風後晴(低温) 各例10~12、17~19通りの調査。17号井戸益々深度を下げ、遺物検出。19名。
8. 6 晴 前日の继续作業。17号井戸完掘。1号竪穴住居実測作業。21名。
8. 7 曇時々晴 遺構掘りは昨日の继续。17号井戸遺物取揚げ、井戸側外周掘り。1号住居址及び二重周構造構清掃、撮影。C-19にて土師器の集中遺物検出。21名。
8. 8 曇時々雨 主にピット群掘り、関連ピットを検出出来ず。17号井戸遺物揚げ、C-19区内の遺物記録、取揚げ。19名。
8. 9 晴 日曜日。
8. 10 晴 ピット群掘り、一部遺構の清掃、実測作業。19名。  
午後3時半より開発関係の地鎮祭が1区北半地内で行われた。(町長、助役、農協専務、課長他、調査団よりは教委課長、係長、担当者出席)
8. 11 曇時々小雨 遺構掘り及び清掃、完掘遺構の実測等相変らず。18名。  
龜田町教育委員の視察あり。
8. 12 晴時々曇(強風) 前日に同じ。特に周辺の片付け、清掃。16名。

- お盆休みに入る為、遺物取扱整理、器具の整理を行う。13日より17日まで休みとす。
- 8.18 晴 1区南半遺構掘り続行。北半、南半境の作業道路帯8、9通りの1、2層土除去作業開始。18名。
- 8.19 雨後曇晴（前夜半より大雨）雨の為午前中休み、遺構内排水作業。8、9通りの1層、2層土除去作業。16名／2
- 8.20 晴 遺構掘り及び全体測量開始。排水作業続く。13名。
- 8.21 曇晴 主に9通り遺構掘り。遺構実測及び全体実測。13名。
- 8.22 曇雨 9通りの遺構はゞ完掘及び実測。全遺構のレベリング。21名。
- 8.23 晴 日曜日。
- 8.24 晴一時雨（前夜半より豪雨、台風によってテント倒壊する）テント等回収及び設営、用具備品集め洗滌、整理。遺構内の排水作業及びレベリング。21名／2  
午後より作業打切り、自前により慰労会。来賓、町助役、農協専務他を紹く。
- 8.25 晴 遺構内の排水作業及びレベリング。1区南半全面の清掃及び写真撮影。18名。  
本日を以って全体作業終了。
- 8.26 晴 撤収作業を兼て、D-12区内集中出土遺物の確認調査を行う。その結果同区下層より第25号井戸を検出し、発掘、実測す。その他遺構の再点検、補足調査をなし全作業を終了す。7名。  
農協設営設備撤収す。教委遺物備品等引上げ完了。

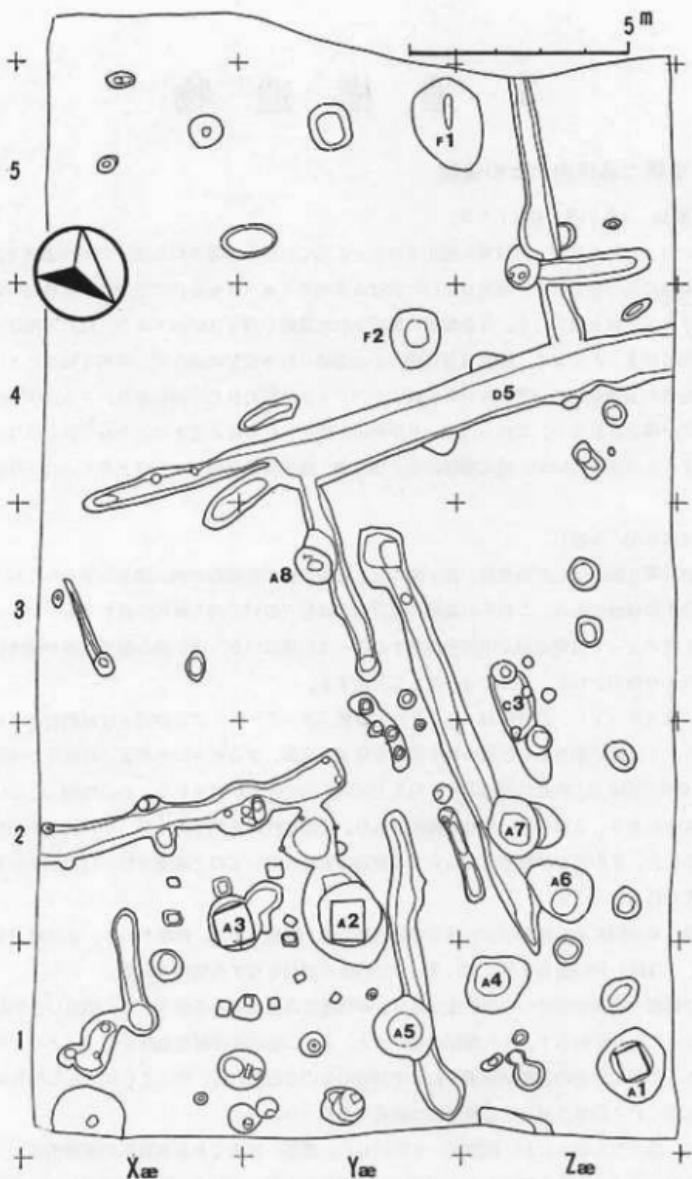
（真島 信二）



第4図 遺構全測図 (1)



第5図 遺構全測図 (2)



第6図 遺構全測図(3)

### 3. 遺構遺物

#### 1) 遺構と遺構内出土の遺物

##### A) 住居址 (第7図、図版7-2)

H-14、H-15にまたがった位置に検出されたところの住居と推定される唯一の竪穴遺構である。形体は程南北に長い長方形で、法量は上口に於ける平均で4m×3mを計り壁面がかなりの傾斜であるために3m×2mと狭くなる。今基礎層に形成された遺構の深さは60cmである。柱穴と推定されるものは床面にはまったくなく、竪穴外周に幾つかが認められる程度に過ぎず、柱列を知ることは得られない。竪穴の南側壁面の一隅にレンガ色焼土のブロックで覆われた一角があり、さらに床中央にも焼土の一塊が確認されるが、これらは竈、及び炉址と推定されるにどまり、それぞれの形体、特徴を見い出すことは出来ないが、特に壁面の焼土塊は竈、煙道等の崩壊したものと考えられ、住居址と做した。

##### 遺物 (第8図、9図)

出土遺物は第8図に示した須恵器、第9図に示した中世珠洲系陶器の他、図示しなかったが土師器片27点の他木器残痕がある。これらの遺物の検出層序は竪穴の程中央上層に位置するものが多く、これらの出土物によって遺構の造立年代を推測することは出来ないが、第8図5の須恵器が遺構床面と南壁の接点より検出された。ここでは一括して記述する。

○須恵器、碗(8-1)、高台付坏(8-2)、壺類(8-3~5)でこの内3は無高台と思われる腰部であり、4は低い削り出しと思われる高台を有する底部、さらに5は小型壺の肩部片で外面はカキ目文上に斜条の叩き文、内面は同様のカキ目文上に同心円の圧痕が見られる。この他図示しないが無高台坏片4ヶある。これらはいずれも細片であり、使用年代は不明であるが、1の碗が朝顔形に上開きであること、4の高台の形態等から見て須恵器の末期に近いものと推定され、11世紀及び至12世紀頃と考えられる。

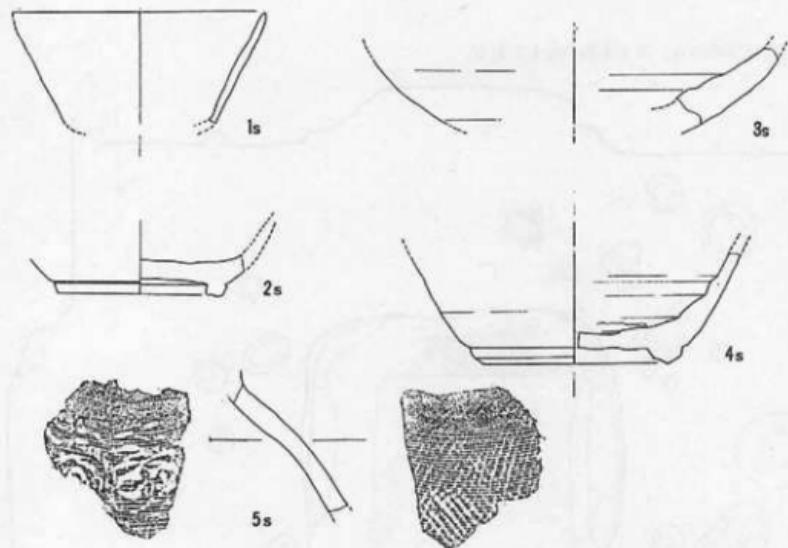
○中世陶器、第9図に示したもので、總て須恵器系の鉢、壺類である。鉢類の内1、2は横目を持たない鉢で、2は浅い片口を有する。3、4、7は内面に横目を有する横鉢である。

壺類は口唇部と肩部の細片のみの出土であり、年代推定は難点があるが5、6の推定口径が約40cmと36cmを計るにもかかわらず、その頸部が短いこと、又、口唇部が単純な丸味を持つことなどから、どちらかと云えばこれらの器種が使用された中期頃のものと思われる。今、ここに示した陶片の内、10の内面に見られる箇状工具による整形痕は顯著であろうか。

漆膜残片、図示しなかったが、図版35-4に示した。漆器の素地である木質部が腐蝕消滅しているが器内の土塊によって形体を知ることが出来、皿又は平碗と推定される。器口直径9.5cm、器高1.5cm、高台又は脚部の径4.3cmで腰部に脛らみのあるものである。この漆膜は器の外表面は施されたもの

で色彩は黒である。はゞ床面の出土である。





第8図 住居址出土遺物(1) (1/3)

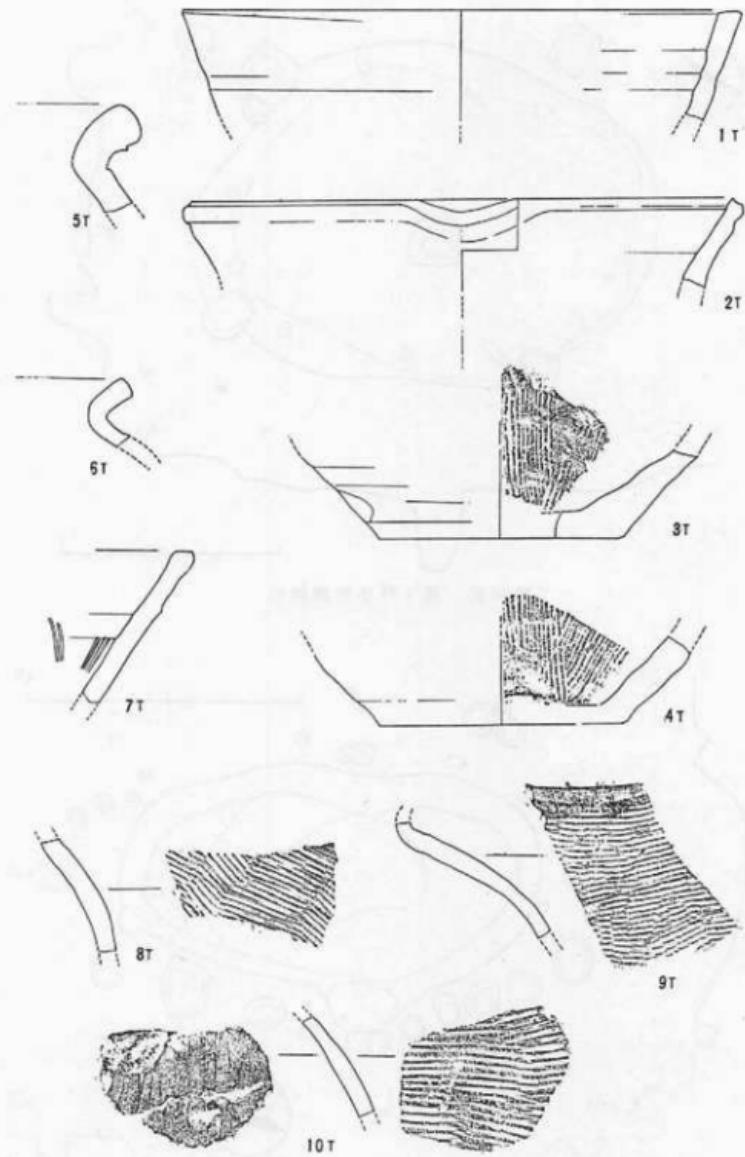
#### B) 小形堅穴建物址 (第10、11、13、14、15、16図、図版8、9、10-1)

小形の堅穴式建物造構であり、都合6基の検出を見た。これらは形態的にも同一ではないが発見順に1～6号とした。

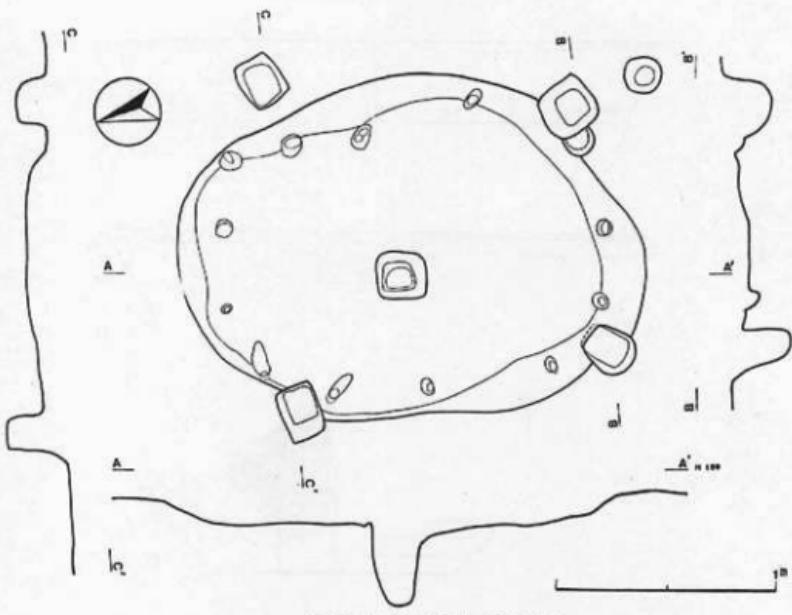
##### 第1号小形建物址 (第10図、図版8-1)

E-7区に位置する。造構は南北に長い橢円の浅い堅穴で、床面の計量は長径3.6m、短径2.65mである。柱穴と云うよりは屋根の主たる骨材と考えられるもののビットは中央に1箇、堅穴の壁面又は外部にかけて4箇と合計5箇が認められ、さらに堅穴の周辺及び壁面にかけて12箇の小穴が一周する。これらの間隔は一定しないが、確認されなかったものもある。この小穴は直径5～10cm、深さ7～15cmであり、小形建物の場合屋根材等の骨を埋込んだものとも見られるが、主要ビットの内側に位置することから堅穴の壁材を支えた杭の跡と思われる。尚主要ビットはいずれも方形である。遺物は北西のビットより土師器細片3点が検出されたにとどまった。

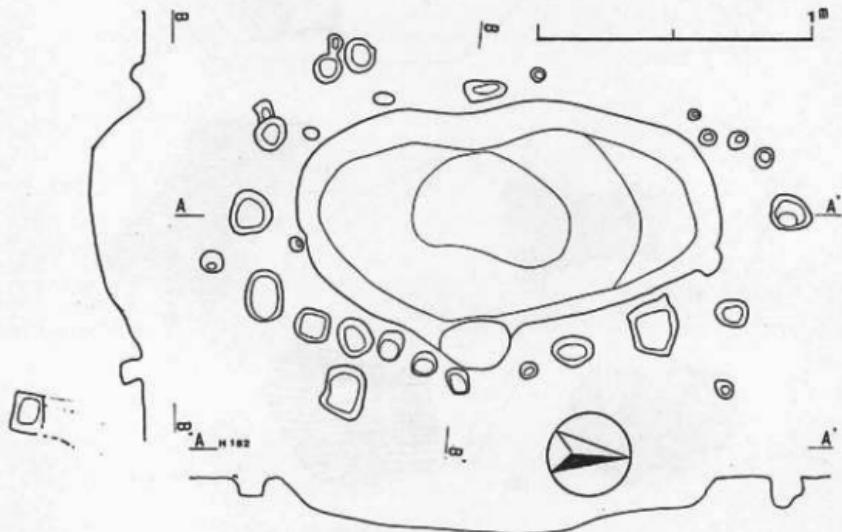
第2号小形建物址 (第11図、図版9-1、2) 第1区F-15、G-15グリットに跨がって位置する。堅穴のプランは長目の橢円形で、その計量は床面で長径2.8m、短径1.2mを計り、床面は舟底状の傾斜をなし堅穴の最深計量は40cmを計る。構造材のビットは総て堅穴の外部にあり、未確認箇所もあるが堅穴の長径両端と側面に各2箇所の6箇に主要構造材のビットが有り、その間に多数の小ビットが検出された。これらの小ビットは屋根材等のものと推測される。出土遺物は床面及びそれに接して後述する如く多数を検出した。



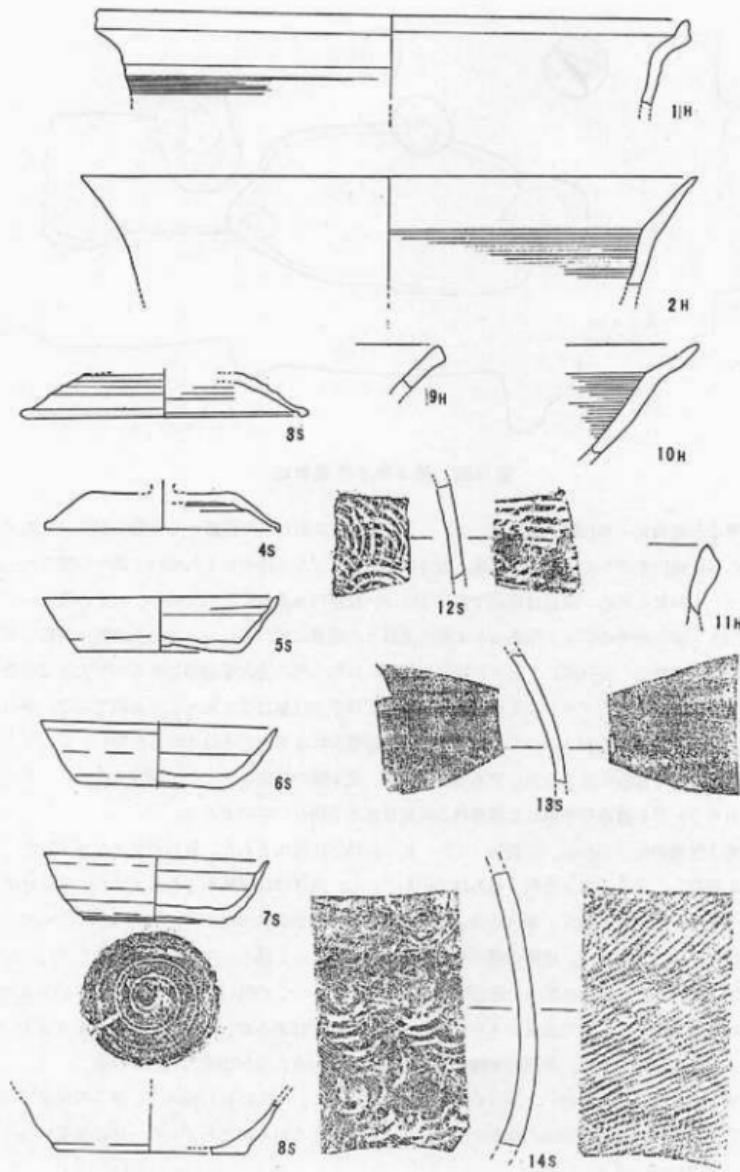
第9図 住居址出土遺物(2) (1/3)



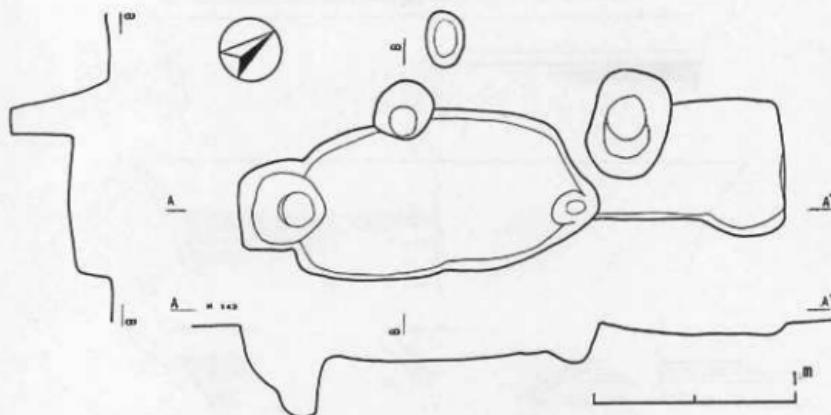
第10図 第1号小形建物址



第11図 第2号小形建物址



第 12 図 第 2 号小形建物址出土遺物 (1 / 3)



第13図 第3号小形建物址

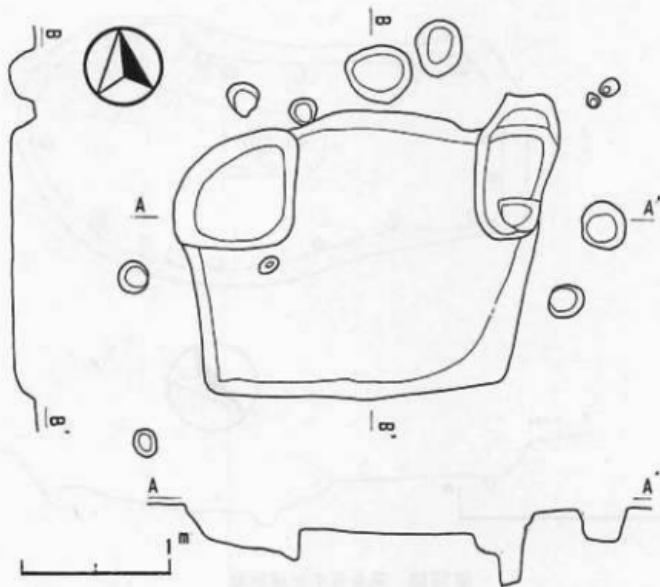
**第3号小形建物址** (第13図、図版8-2) Z-2~3に跨かって位置する小形の竪穴址である。程南北に長い橢円形のもので長径の両端と短径の西側壁面との3箇所にそれぞれ1箇づつ構造材を埋込んだビットが見られる。法量は床面で長径130cm、短径70cm非常に小形である。北面の妻の外部に小さな凹みと40×50強のビットがあるが本竪穴造構との関連は定かでない。尚出土遺物は皆無である。

**第4号小形建物址** (第14図) E-15地区に認められた小形の竪穴状造構であるが早急に建物遺構とは云い切れない。そのプランは東西に長い長方形で床面の法量は2.2m×1.7m程である。竪穴内に2箇所の凹みを有するが北西のそれは浅く柱又は屋根材によるものとは考えられない。よってこの造構が建物として屋根を有するものであるとすれば、北東隅の柱穴を主として竪穴外部小ビット(未確認もある)群が構造材を兼ねた屋根材と推定せざるを得ないものである。

**第5号小形建物址** (第15図、図版10-1) E-16地区に検出された。竪穴のプランは不定形で南北に細長く、その一方は方形、他方は半円形をなし、全体には靴底形とも云えよう。法量は床面で長径2.65m、短径70cm程で、竪穴の深さは約20cm、床面は北側の半分が平坦であるが中央の柱穴から南側にかけて大きく窪む。造構の構造を知るこの出来るビット類で、主要材と考えられる柱穴は竪穴中央に1箇のみで、壁面に添った床面に小穴が一周する。今この数は16箇を数えることが出来たが、未確認のものもある。この直径が4~10cmと小さいものではあるが、主要柱が1本である以上、根曲の柴、朶類を使用すれば、壁面の保護杭と屋根材とを兼ねることが出来たと思われる。

**第6号小形建物址** (第16図) 5号と同じE-16区にある。南北に長い橢円で、竪穴の深度は20~25cm、床面は平坦である。床面の南側に主要柱穴1箇が確認されたにとどまった。床面法量は長径1.45m、短径80cmである。

以上6例の竪穴形式を有する小形建造物を報告したが、これらは6例共建築構造が異なるかに見え



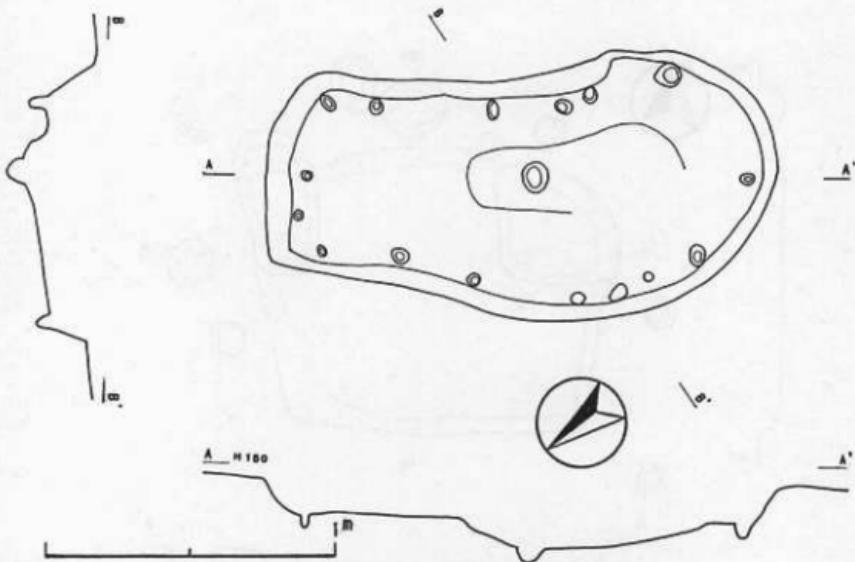
第14図 第4号小形建物址

る。然しながらいずれも屋根の庇の部分が地面を覆ったであろう、いわゆる三角屋根を有するものであろうと考えられる。私達は今、古代、中世に於ける類似例の見間を持たないが、近世及び現代の浜（註1）、サケ小屋等の報告に酷似するものである。

#### 遺物（第12図）

以上6基の堅穴構造を有する小形建物址より遺物を検出したのは1号址と2号址のみにとどまり、その他は皆無であった。すでに前述した如く第1号址よりの遺物は柱穴内より土師式土器の細片3点が検出されたにすぎず、この遺物について云々するにはあまりにも細片すぎる。よってここで記述出来るものは第2号址のもののみであり、第12図に表示したものがそれで土師式土器と須恵器である。これらは遺構の床面及びそれに接する位置より検出されている。

**土師式土器（第12図1、2、9～11）** いずれも細片のみであるが壺類、壠類と思われるもののみである。1はくの字に外反する頸部で、その口唇部を上方へつまみ出しておらず、ロクロ整形による外面ヨコナデが見られる。法量は口縁部に最大径の32cmを計る胴長の壺である。内面一部に炭化物の付着を見る。2は朝顔形に外開するもので頸部をさらに外反させその口唇部は先細りぎみとなる。器内面はロクロ回転によるカキ目痕があり、口縁部における最大径は33cmを計る。器形は鉢形、或いは壠類



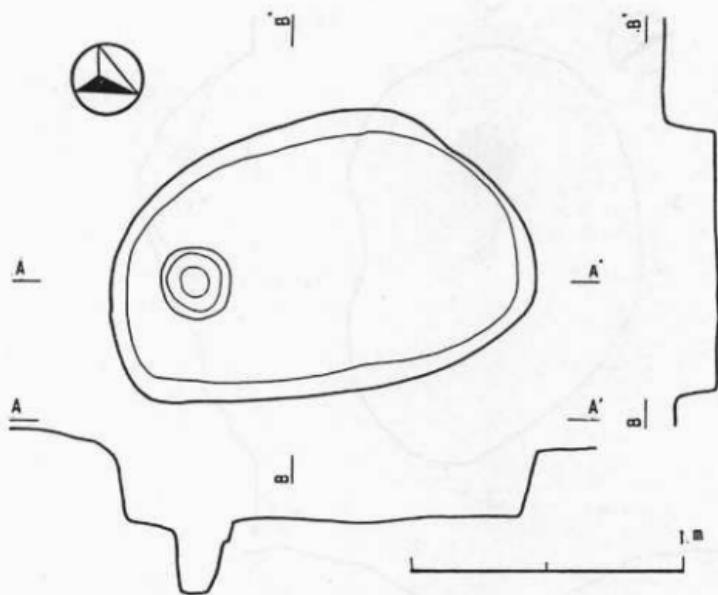
第15図 第5号小形建物址

であろうか。10は2と同様の特徴を有するものであるが、なお外開の器形であり、おそらく壠類と推定される。器内面に炭化物の付着を見る。前後するが9及び11は壠類で口縁端部は面取りされている。9は小形容器と思われるし、11は特にロクロによる水挽ヨコナデ痕が顕著である。

この他33点の細片を検出したが、その多くは条線状のカキ目、タタキ目痕を有する壠類の破片であり、平底の底部片2点等であった。

**須恵器** (第12図、3~8、12~14) 3、4は壺蓋で共に破片である。3は外面のヘラによる整形痕を著しく残し、外開きぎみで最大径15.5cmであり、4は内湾ぎみで直径12.5cmである。5~7壠類である。5は器壁立上りで底部端にするどい角を残すが、口縁部にかけては内湾し、端部は丸味を有する。底部はヘラ起しによるが、その激しいタッチが見られる。6、7は外反する口縁と、先細りの端部とを有するもので、共に左廻転ロクロによるヘラ起し成形である。壺類はこの他2ヶ体分が確認された。8、13は壠類と思われるが、形態は不明である。前者は外面共にロクロによる水挽成形が行われたもので、その直径10.5cmを計る底部を持つ。後者は外面共同様のヨコナデ痕を有する壠の肩から胴部にかけての破片であろう。12、14は壠類の破片で12は表面に条線状のタタキ目、内面は青海波紋のタタキがある。14の内面には同心円状の青海波紋の上から櫛状工具によるカキ目痕がある。

以上の土師式土器及び須恵器が使用された年代をこれだけの遺物から推測するのはあまりにも困難である。土師式土器片は一般には晩期Ⅱ式即ち9~10世紀のものと考えられるが2号竪穴への流入物



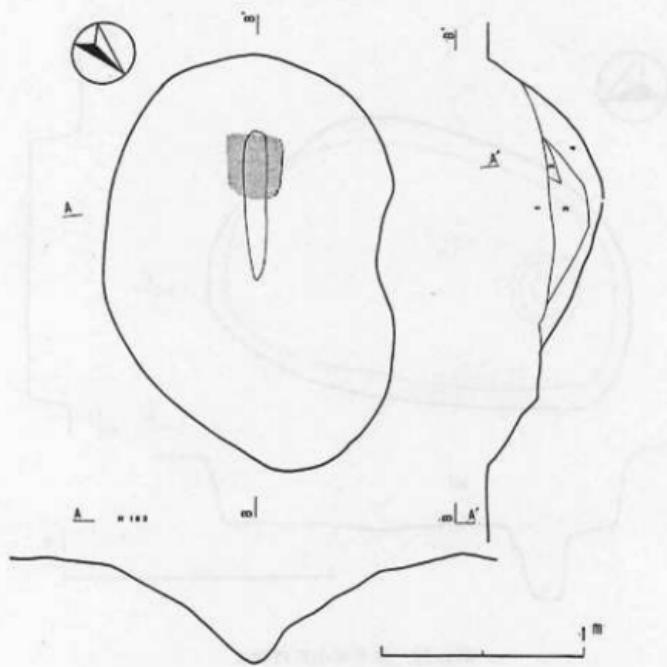
第16図 第6号小形建物址

とも考えられるきらいはある。この遺構内で使用されたと思われる須恵器の壺類は周辺の出土物との関連等から見ても10~11世紀のものと考えられよう。

### C) 鋼冶遺構

2区Y-4~5区に於て2基の火床状遺構を検出した。第6図に示したF1、F2がそれであり、その形態及び坑内堆積物等より鋼冶炉を推定したが、もとより二次精鍛用或るいは鍛打用との區別は出来ない。2基の遺構に接し、北面に浅い溝、北側にはやゝ深い溝を検出した。遺構との関連は不明であるが、溝内より鉱滓及び刀子片、鎌と思われる鉄製品が出土していることから、火床遺構に並行したことと推定して支障はなかろう。

**第1号火床**（第17図、図版11-1~2） 地面を薬研状に掘り窪めた炉である。地山に残る遺構はやゝ橢円形であるが、一方がやゝくびれている。法量は長径210cm、短径140cm、深さ55cmで薬研状の底部は断面図に示した如くかなり小さい。遺構内の堆積物は、後に流入した茶褐色土の下部は灰、そして鉄サビを混入したものと思われる粘質土からなり、灰層の一部に方形の酸化した物質が確認された。



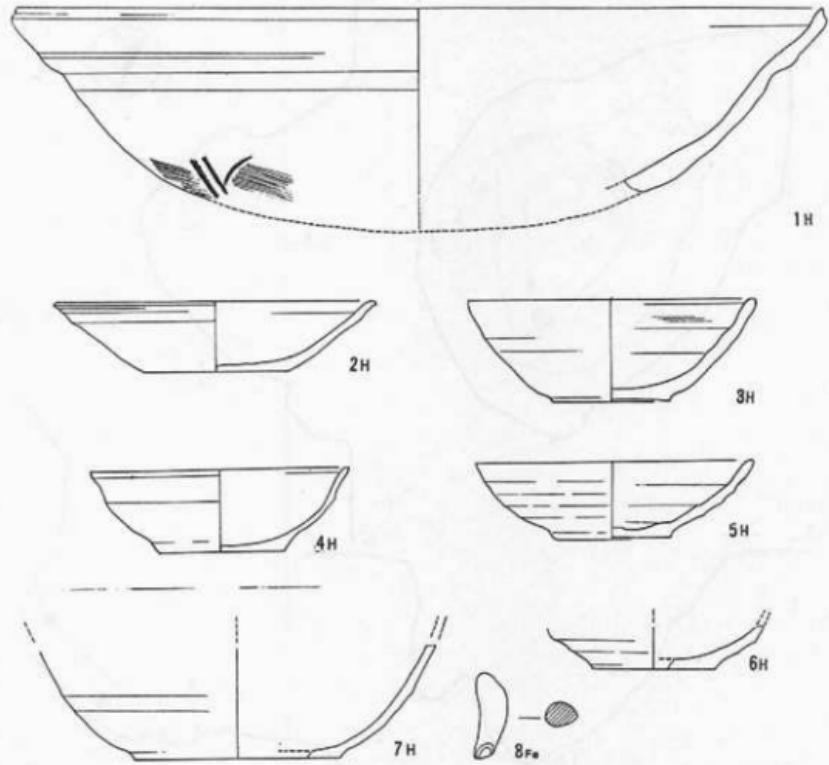
1. 茶褐色土 2. 鉄錆 3. 灰 4. 鉄錆混入粘質土

第17図 第1号火床址

#### 遺物（第18図）

灰層の上に流入したと思われる粘質土層内に数箇の拳大の躰と土師式土器（土師3類）が多数検出された。1は場で、口径40cmとやゝ小形である。器形は口縁部で凸帶とくびれを有し、内湾する口縁先端は面取りによって上方につまみ出されている。底部に近い一部分にわずかにヨコナデ痕が見られる以外は内外共に無紋で、色調は黄褐色で胎土は荒い。外面に炭化物と鉄錆痕を残す。2～6はいずれも回転糸切底を有する壺であるが、それぞれ特徴を異にする。2は器形全体が外開きであり口縁部も外反する。さらに底部外面がその他の物の様に高台状につき出さずすんなりと形取られている。

又一種を有する。4の器形は内湾するが口縁部が外反し、1と共に非常に薄手である。他は厚手で胎土も荒いがロクロ痕が顕著である。今2、5は完器であるがその他は $\frac{2}{3} \sim \frac{1}{4}$ の残片である。7は平底を有する壺類の底部から腰部にかけての残片であり、細片にもかゝわらず整形の特徴を見ることが出来る。それはロクロによる水挽がなされたこと、器形が中形と思われるにもかゝわらずその器壁の



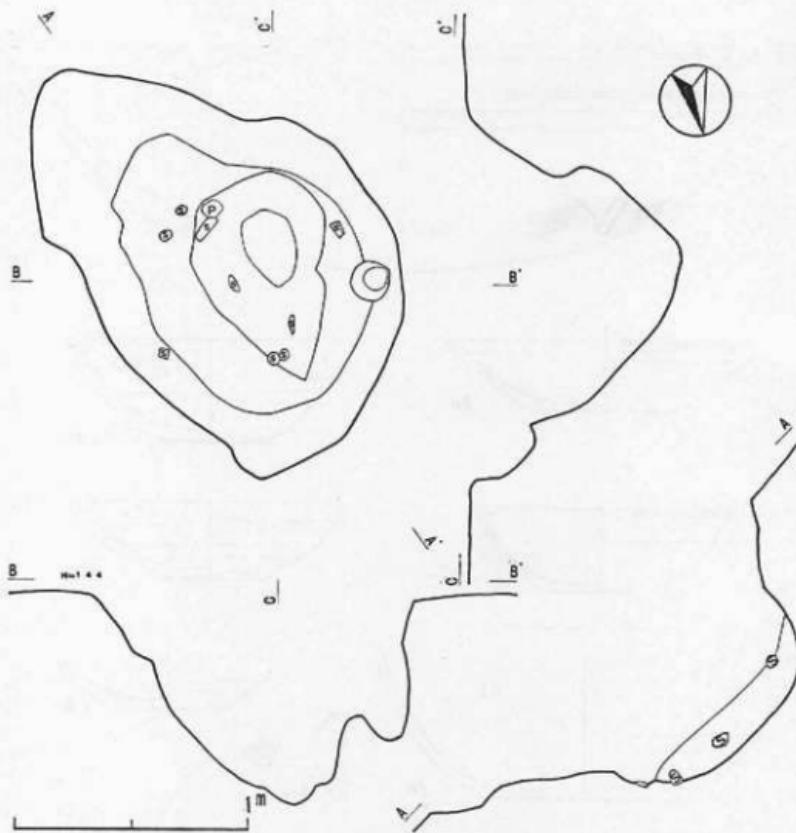
第18図 第1号火床址出土遺物 (1/3)

内厚が0.5cmにも満たないものであることなどである。以上その他、ごく細片であるが壺類の破片30余箇、坏片40片等が出土した。8は鋳造の進んだ鉄であるが原形は不明である。

**第2号火床** (第19図、図版10-2) 長軸方向は1号火床とほぼ同方向の橢円をなし、1号火床との距離は中心で5m、近接する外周で3.1mと接近している。炉の形態は、長径2m、短径1.3mの橢円で、炉底は深度0.9mの薬研状を成すが東南側へ片寄っている。同じく東南の壁面に径15cm程の窪みが見られる。炉底より30cm余は灰が充満し、その灰層と上部の流入土層の接点に12~3の跡と土器片が検出された。

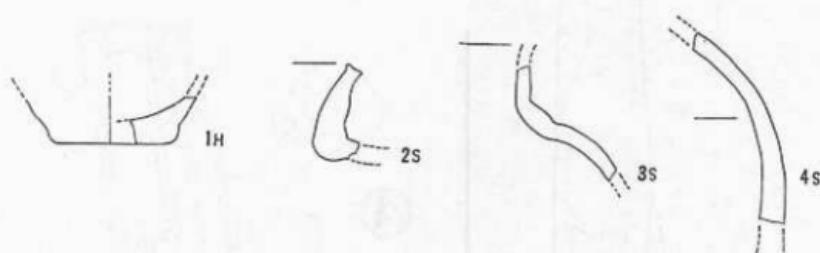
#### 遺物 (第20図)

第2号火床内出土の遺物は土師式土器(土師3類)、須恵器、珠洲系陶器であるが、いずれも細片



第19図 第2号火床址

にすぎない。炉の廃棄後の流入物と考えられる。1は土師式土器の小形壺の底部である。2は須恵器、横瓶の頸部である。口唇部を上からおさえた面取によって先端を内側上方へつまみ出している。肩部との接合に当り頸部の付根は補強土によってかなり堅らんでいる。3は壺形を呈する須恵器の頸部から肩部にかけての破片である。内外共に櫛状工具によるカキ目紋があるが、外面のそれはハケ状工具によるかと思われる程に細かい。4は無紋の壺細片で器形は大きい。内面に圧痕が見られ、ごく稀薄であるが外面にも見られる。須恵器と見るのが妥当であるが、須恵器系中世陶器と見ることも出来る。この他図示しないが須恵器細片1点がある。



第20図 第2号火床址出土遺物 (1/3)

#### D) 溝 遺 構

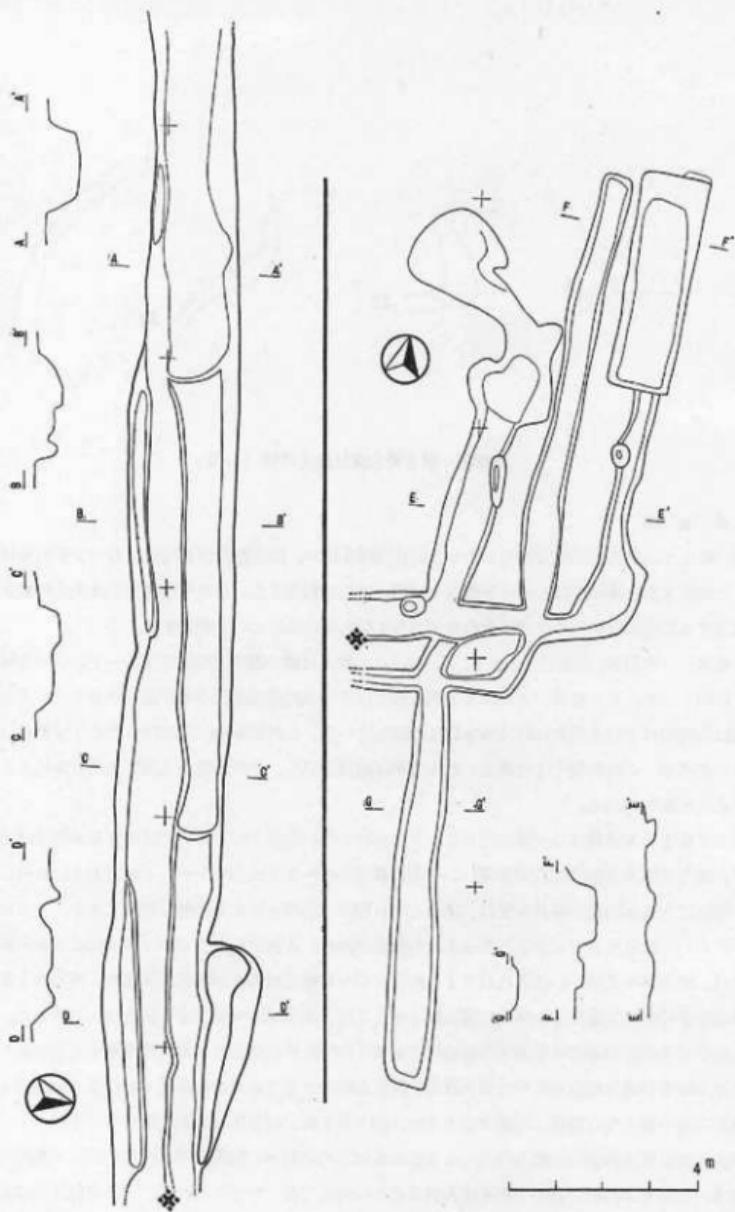
遺跡内にはその性格は不明であるが大小の溝状遺構を始め、排水路及び運河的なもの等多数を検出することが出来た。本項ではこれらを便宜上「溝」として報告する。なお発掘区内には大小10数本の溝を確認するに及んだが、ここではそれらのうち主なもののみについて報告する。

**第1号溝** (第21図、図版12-1~2、4-2) 第1号溝の基本的な位置はG-1、G-2区より東方に向ってF、E~B例、さらにA B例に於てはT字状に南北に延びる位置に所存した。なおこの遺構は同様のH 1 Gと西方に向う排水路に連結している。この排水路は天然のものとは思われないものではあるが、これに続く1号溝とした本遺構は幅員を益し、その形態から見ても明らかに人工の溝であることが同われる。

G-1で始まる本遺構はほぼ東に当るC-2にかけてその幅員2~2.4mで底部は基本的には2段をなす。即ち左岸半分が浅く右岸が深い。その計量は0.45~0.5mと0.35~0.4mである。さらに左岸の一部には0.25m前後の幅員を要し、深さ0.4m程の小溝帯を有する複雑な形態である。さらに遺構底部についてはBセクション上方で0.1mの段差があり、A及びEセクション間では0.3mの傾斜が見られ、排水路へと続く。西方はBラインに於てやゝ複雑ではあるが南北に屈折し、南方へ1条、北方へ3条に分れて延びる。南向の溝は幅1~1.2m、深さ0.15~0.2mで長さ10mで終える。北側へ延びるものの中前者に對面するものは7mでくの字に折れ全長9mで自然消滅するかに見える。これに並ぶ中央の溝は幅員0.6~0.8と狭く、深さも0.15~0.2mであるが長く延びる。東側のものは不確定な細い溝を5m程経て先端に幅1.4m、深さ0.4m、長さ4mの溜を有している。

この人工的な掘込みがいかなる目的によるものかは不明である。想像の域を出ないが、小規模のものではあったにせよ荷役の為の小舟を曳入れることは可能であったと思われる。又未発掘区内の未確認の屋敷等の周辺を見ることも可能ではある。

**排水溝** 図示しなかったが前述1号溝に続く水路がそれである。第2図遺跡全測図にA・T及



第21図 第1号溝址

びB・Tで示した地域内にある。いずれも水田面下に存在するもので遺構表面は削除されたものと思われるが現水田面下20~25cmに確認され、残存する深さは地区によって不定であるが0.3~0.7mであり、幅員は1.2~2.8mを計る。第1号溝より続く水路は西方に向って走り、確認出来たのは85mであり、その先はおそらく現在の大排水路のある底地へ向うものと考えられる。今、途中に十字状の支流を受け入れるがB・Tに示したもののがそれである。それは東方へ85m地点でやゝ北々東に屈折し、112mを確認した。この屈折地点で西方から来る支流と合流している。このB・T地域の水路が本流と合流する対岸には東南東より来る小水路が合流する。

これらの水路はいずれも土側溝であるが、十字状合流地点の主に北東側に多量の坑がはゞ0.5m間隔に打ち込まれているのが検出された。

#### 遺物（第22図、図版32-2、38-3）

ここでは前記第1号溝と排水路内出土遺物とを合せて報告する。出土遺物は土師器、須恵器、中世陶器、船載磁器、かわらけ、木器と数量的には少ないので多様をきわめた。

**土師式土器** 1、2は壺の底部である。いずれも平底で底部を台状に造り出したものである。1は大粒の石英を多量に含んだもので無紋である。2は白茶色で外面に縦位のカキ目痕を残し、さらに煤が付着する。3は高环の脚部残片である。あまり広がりを持たないものでやゝ内湾ぎみに広がり裾に近くくびれを有し、先端部がやゝ開く。色調は黄茶褐色で胎土に微粒砂を含む。8~9世紀の所産であろう。

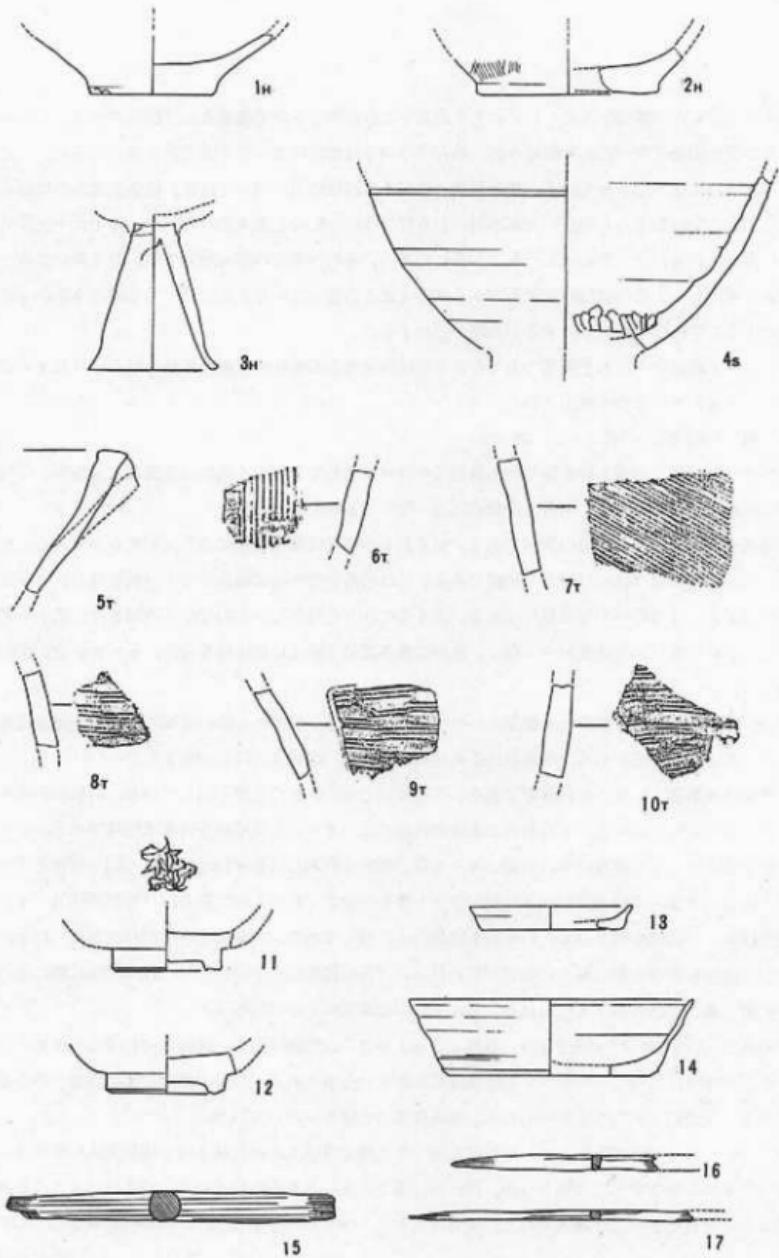
**須恵器** 4は壺の脚部から腰部にかけての破片である。脚部に一条の沈線を残し、内面脚部末端に粗い刺突痕が一面にある。須恵器はこの他に壺及び壺、壺等細片12点が出土した。

**中世須恵系陶器** 5、6は鉢類である。5は片口で浅い注ぎ口を押し出している。口唇部が水平よりやゝ外側に傾いている。6は細片であるが内面にクシガキによる擦目を有する擦鉢である。7~10は壺片である。7は細目の平行条線のタタキ痕が認められるし、8~10はおそらく同一個体と思われるもので、3条一単位と思われる特異なタタキ痕を見てくれるものである。（写真図版31-3）

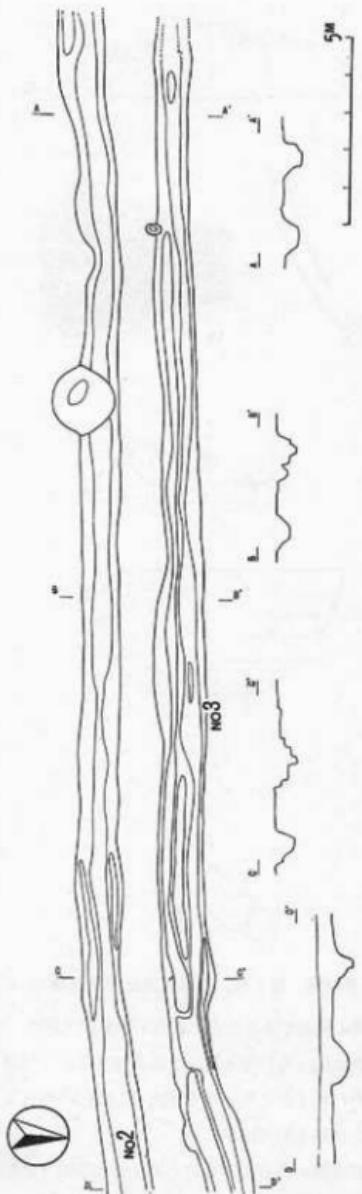
**船載磁器** 青磁の碗2点で、いずれも底部のみの残片であり、内面に小さな刻花紋が見られる。11はやゝ緑色を帯びた釉に細かい亀裂が見られる。（写真図版32-2の左下）12の刻紋は釉に埋れて不明瞭であるが四弁の花と思われる。共に元代の龍泉窯のものであろう。

**かわらけ** 小壺の13は直径8cm、器高1.3cmと小さく、色調は白茶、底部は云わゆるヘラオコシである。14の壺は同様にヘラオコシで色調はごく明るい白茶である。口縁内側の一部に煤がしみこみ、灯明皿として使用されたことが知られる。外面腰部にも煤が付着している。

**木器** 15（写真図版36~8）は杉材を削った丸棒で直径1.5cm、長さは一端が欠失して居る。用途は不明だが織機の部品であろうか。16、17は箸で、共に元が失われている。前者は0.8×0.5cmと偏平で、材質は不明だが雜木である。後者は太さ0.5cmで杉材であろう。この他杉板類が出土している。



第22図 第1号溝址及びA・T、B・T出土遺物 (1/3)



**杭類(図版38-3)** 出土地点は前述した如く水路の十字状合流地点に建立するもので、おそらく護岸用のしがらみ等に使用されたものと思われる。杭の材質は総て杉材で、多くは大木の副物で少量が小丸太の焼杭である。採取出来たのは20本でその内丸材は2本である。太さは5~10cm、程んどは上部を失っておるが、長いもので75cm程度を計る。図版38-3右より2番目に見られる様に先端をまったく削らないものも折ち込まれている。

#### 第2号、3号溝(第23図、図版13-1)

9区から10区にかけて検出された2号、3号の2条の溝遺構はその間隔をはゞ1m前後に保ちながら平行に並び、その方行は1号溝と同様に東から西に向って位置する。2号溝は幅員1~1.2m、深さ0.4~0.5mで単純な形態であるがCセクション前後で両側面に小さな段がある。A、Bセクション間に大きな土坑があるが、溝遺構とは関係のないもので、推定の域を出ないが溝以前の井戸類似遺構(後述する第18号土坑)である。3号溝の幅員は2号溝と同様であり深さが0.5m余とやゝ深い。全体に複雑な形態を示し、Bセクションに示した如く南岸に狭くて浅い溝状の溜りが18m間に有り、本溝には両岸に段状のステップを有する。調査地内に於ける2条の溝底の高低差は2号溝は10cm、3号溝は5cmと共に西側が低い。今2条の水路が如何なる機能を有していたかは不明であるが、むしろそれよりも中間の狭い場所に何等かの目的があつたのではなかろうかと思う。そこには当然のことではあるが周辺の如き多量のピットは見られないところである。

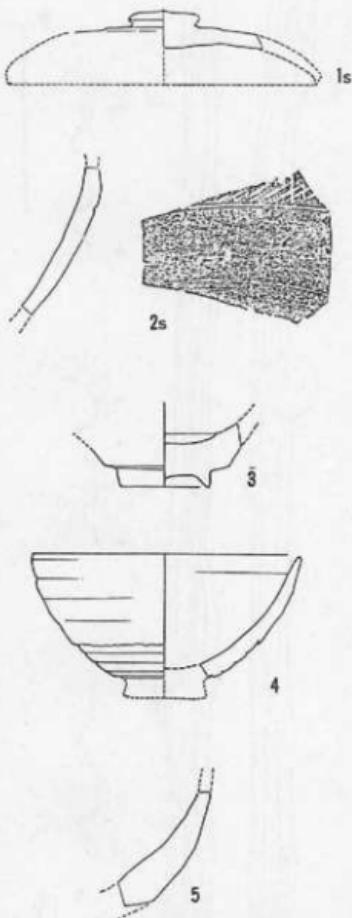
### 遺物（第24図）

第2号、3号溝内出土の遺物はきわめて少なく、図示したものが統てである。1は須恵器の壺蓋で内厚きみのもの、2は同じく須恵器壺片で一条の沈線と斜条の圧痕が上部に見られる特異なものである。3は肉厚の底部を残す中世陶器である。外面共釉の色調は茶色をなし、内面は特に暗茶色の斑をなす。素地は薄茶で低い高台を有する。釉の容解温度に達しない天目釉であろう。（図版32-1右下）、4は外面共黒色の釉よりなり、胎土は白味でやゝ粗雑さが見られる。やゝ確信を得ないが瀬戸系の天目碗であろう。（図版32-1上段）

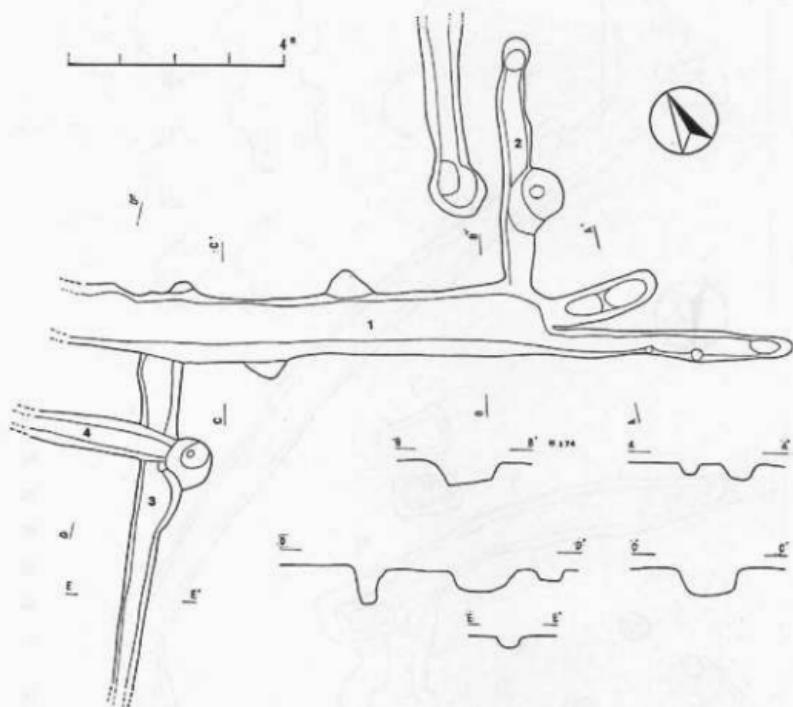
第4～6号溝（第4、5、25図）前後するが、第3図XYZの4にその主体があるものを5号とした。これに交わる溝状造構が南北にある。本造構の出土品は小量の鉄滓と刀子状残片、不定形の鉄片等があり溝南側にある前述の2基の火床造構に関連するものと思われる。第25図中4に示した溝は同3よりも30～50cmも深く防湿を主としたものであろうか。

第4号溝は第4図11区にあり、2、3号溝には平行する。両端を確實に把握することが出来た。幅員1m、長さ14.5mで一端くびれ先端に3mの狭いものが続く。深さは西下りで40～50cmである。今この狭くなった部分の北側から2号溝に接する位置にかけて矩形の窪みがある。南北7m、東西3.5mで深さは30～40cmである。さらにその底部には小溝、ピット等がある。所在する位置から見て4号溝に関連があるかもしれないが解明出来ない。第6号溝は第5図C-5、F-3区に位置し南東より北西に向うものである。これら第4号、6号溝はその他の溝の中では比較的大形なものであるが出土遺物はわずかに第4号で検出した青磁の刻花文碗の細片1点にとどまった（第24図5）。今これらの溝の性格も把握出来ない。

尚これらその他第5図、6図に見られる様に小規模の溝状造構があるが、これらの性格も不明である。



第24号 第2号、第3号溝出土遺物(1/3)

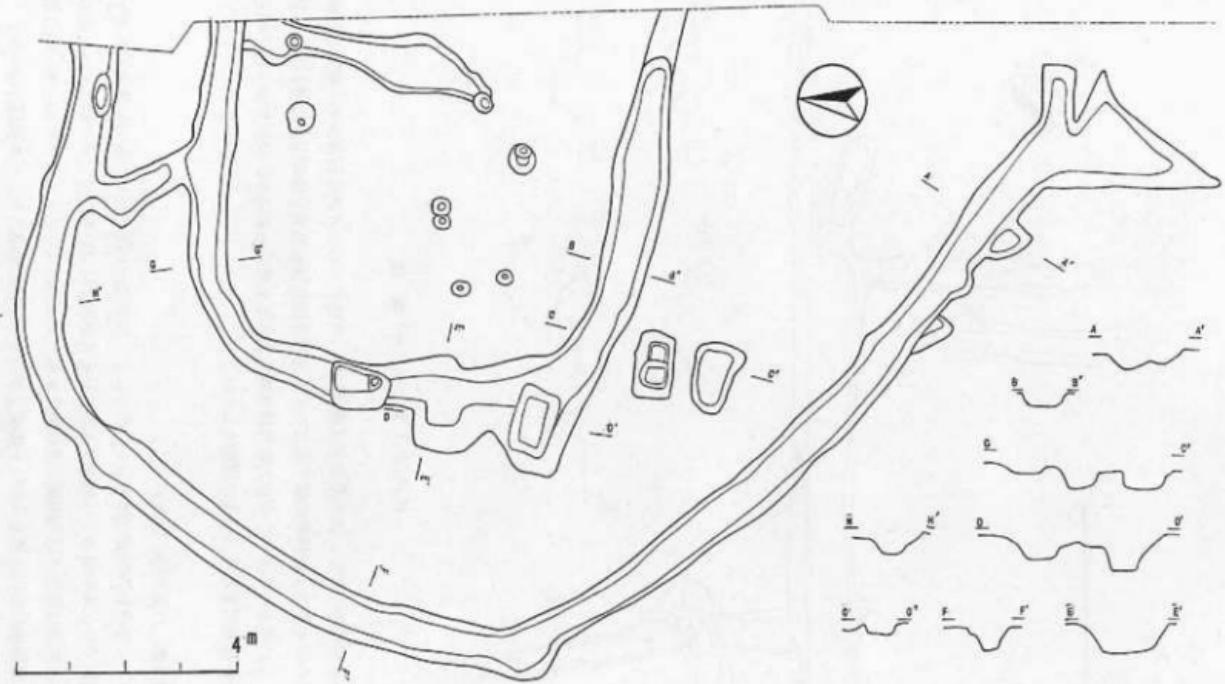


第25図 第5号溝址

第6図XYZ区に於けるものが、ほゞ南北又は東西に向って位置することから何等かの小規模な区画を意味するもの如く考えるが憶測の域を出ない。一方第5図に見られるもの多くは井戸又は井戸類似遺構に接しているものが多い。平面的には排水溝と溜穴とも考えられるが、傾斜等からみて偶然の所産と考えられるものもある。今後の課題としたい。

#### E) 二重周溝遺構 (第26図、図版13-2)

この遺構については全容の調査は出来なかったが、C、Dの12~15区内にて二重の周溝遺構を検出した。外溝は南側でやゝ不明瞭となり消滅するかに見えるが円形に近いもので、溝の幅員90cm、深さ30cm前後である。内溝は隅丸方形で南側が不明瞭である。第26図に見られる北東より中心部へ向う浅い溝は本溝とは無関係のものと考えられ、一応東空きのコの字状に検出した。この幅員は60~90cm、



第26図 二重周溝造構址

深さ25~40cmである。西側溝内に3箇の方形の土坑が並ぶがおそらく重複したものと考えられる。又北側で外溝より内溝に向う連結部分があるが、完通はしていない。造構の内区及び外区共に多数のピットがあり、その多くは柱穴と考えられるが本造構との関連については不明であり、本造構の性格も又不明である。尚図版13-2に見られる外区の方形部分は下層造構（第25号井戸造構）調査の為のものである。

本溝造構よりの出土遺物は無いが、内区中心部より須恵器壺等完器を含めて数点が出土した。今これらの遺物の年代をもって本造構に結びつけるのはやゝ経率すぎるが、少なくとも後出の24号井戸以降即ち11世紀以降のものであることに相違ない。

#### F) 井戸及び井戸類似造構

発掘区全面に亘って井戸及び土坑群が検出された。この内土坑群の多くについてはその形態から井筒、井側等の内部構造材が消滅した井戸造構と判断するものであるが、ここでは明瞭なものを井戸とし、その他を土坑と呼ぶことにし、任意に一連番号を記したので一括して報告する。

第1表に明示した如く、1~4、16、17、24、25号の8基の井戸及び35号までの27基の土坑を検出した。井戸と称したものにはその構造上から次の如く数通りの形態が見られ、円形又は方形の曲物型井側形式、方形横桟型井側、方形隅柱横桟型井側等に分類出来る。

次に土坑については、その形態から見てその程んどは円形又は方形の井側を有していたものと考えられる。今、これらの土坑が井戸であることの最も有力な手がかりは、底部が方形になるものが多いことと第1表で明示したところの、井戸内に向って一段降りるステップ状の掘込みを有するものが多いことと底部に眼（マナコ）状の掘窪みを有するものが多いことである。

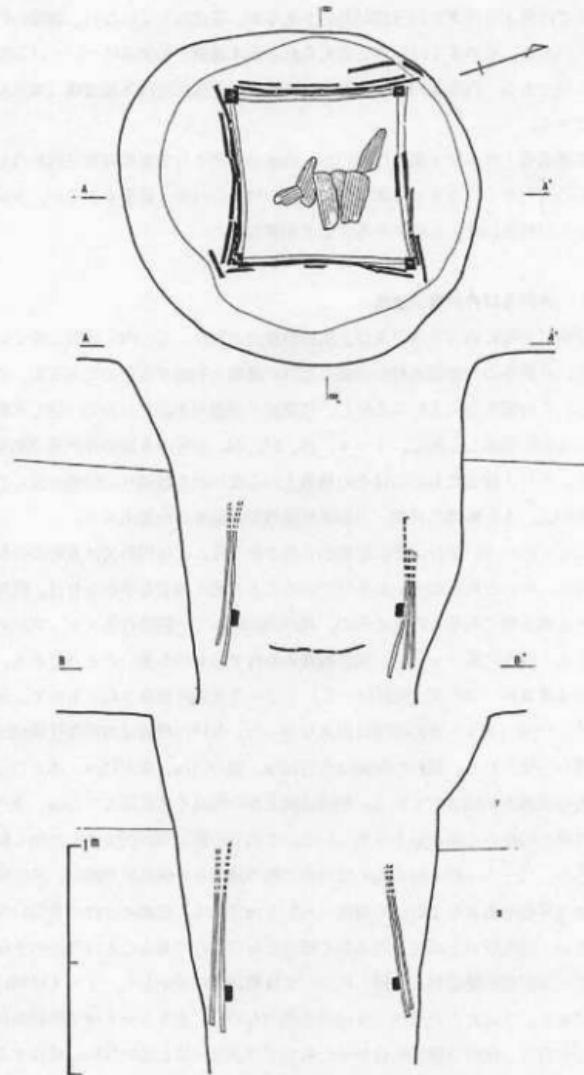
第1号井戸（第27図、図版14-1） 2-1 北隣に発見されたもので、発掘区域ぎりぎりの位置でもあり周囲のピット等の確認は出来なかった。井戸の構造は方形隅柱横桟式井戸側形式であることが造構から知られる。隅柱の間隔は北方75cm、南方71cm、東方75cm、西方72cmとはゞ正方形で最下部の4方の横桟が構組されている。納穴は南北が一段高く柱底部より23cm、東西が17cmと一段低い。横桟の外側に縦板が二重に添えられている。これらの板は第27図で示した如く数枚の幅の狭いものも見られるが、15~20cm程の幅のもので内面の板の隙間を外側の板が補い、共に隅柱の外側に連している。深さは基盤地表より140cmで海拔（-）3cmである。底部に5枚の板切れが認められるが落物と考えたい。尚図版14上に見られる如く四方とも弓なりであることは周辺の土圧によるものである。

次に井戸側の構造材（遺物）については第28図に表示した。1~4は隅柱で、1は南方の西側、2は同東側、3は北方の東側、4は同西側のもので、太さ5~6cmで良質の杉材を角柱状に打ち割ったものである。納穴は横桟に合わせたもので寸法は一定していない。残存する長さは4の最大77cmであるが下より2段目の納穴がまだ認められないことから見て、総体としては3段の横桟を有したものと考えられる。（図版39-1） 5~8は横桟である。柱と同様杉材の打ち割りで、幅5~6cm、厚さ

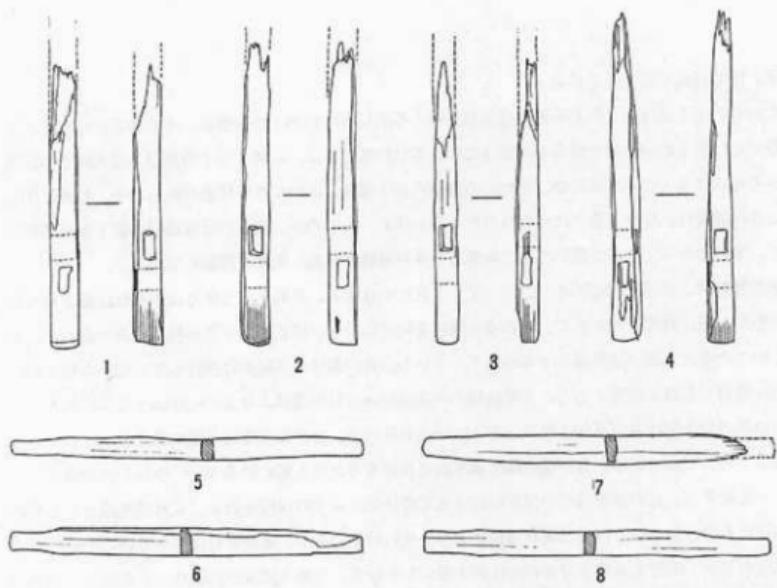
2.5 cm、枕は削り出しである。(図版39-2)側板については図示しなかったが、杉材で同様に打ち割のものであり、底部の切断痕は斧によるものである。

#### 遺物(第29図)

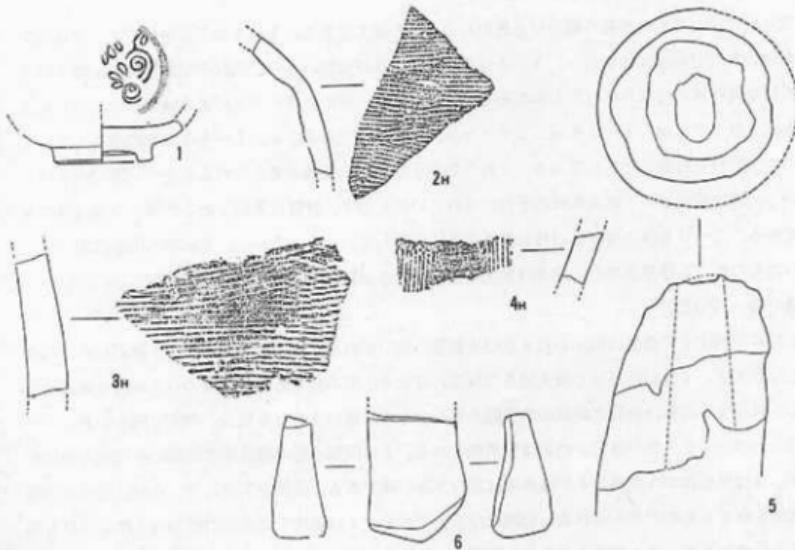
1号井戸内検出の遺物は少なく第29図に示したものが全てである。1は青磁碗底部残欠で、緑色を帯びた釉の下に刻花文が見られる。2～4はいずれも須恵器系中世陶器片で、2は中形の壺肩部で曜黒色のもの、3は大形甕片で共に条線状叩痕を有する。4は鉢片で内面に擇目を有する。5は羽口先端部残欠で残存する最大径8 cm、内部孔は橢円で $2 \times 3.5$  cmである。(図版34-3)全体に白茶色であるが、先端 $\frac{1}{3}$ 程は鉄色のガラス質に被われている。6は磁石断片で、かなり使い込んだものが中央で折れたものである。これらの他構造面で前述した板材の他多量の



第27図 第1号井戸



第28図 第1号井戸構成遺物 (1/15)



第29図 第1号井戸出土遺物 (1/3)

樹皮、即ち杉皮が出土している。

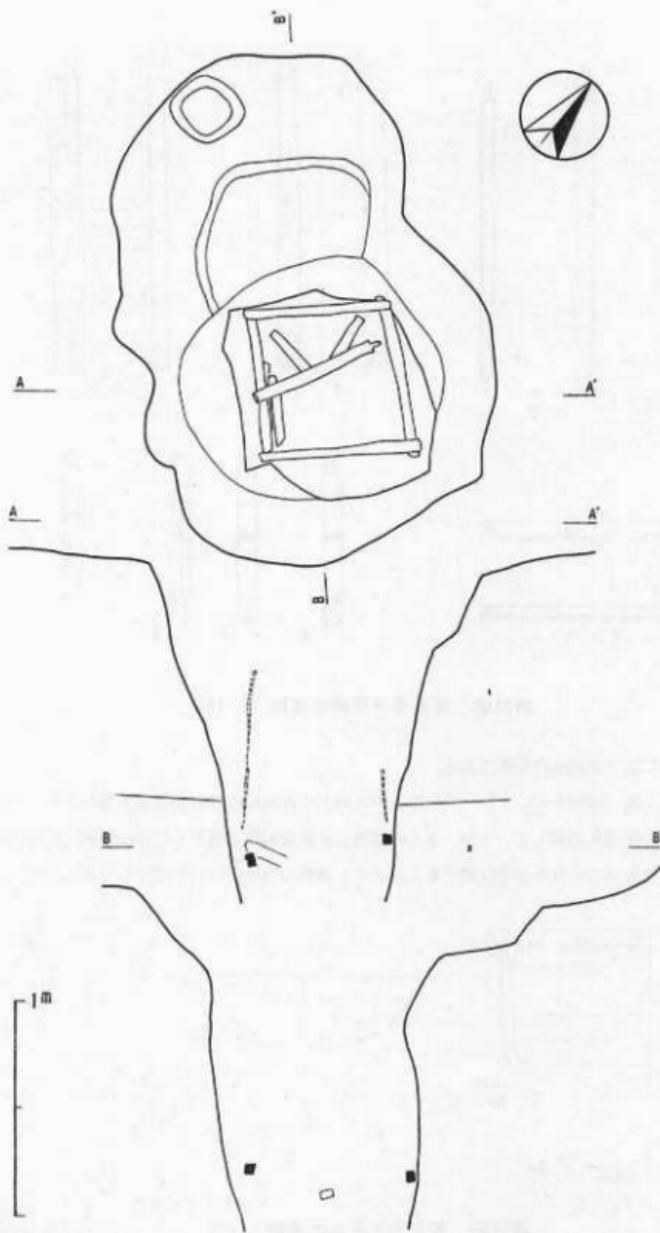
これらの出土品はいずれも小形の残欠品で多くを語り得ないが1の青磁碗、4の鉢等から見てごく大雜把ではあるが14世紀を過るものではない。羽口に関しては、近隣する1号及び2号火床との関連性が考えられるところであるが、それらの遺構内出土遺物とはかなり年代差が見られる。杉皮に関しては井戸廃棄時に於ける覆いに使用されたものが落不したものか、或るいは墨根材の落下かは不明である。<sup>(註3)</sup>筆者はかって杉皮で覆いをして廃棄した井戸遺構の発掘、実測を経験している。

第2号井戸（第30図、図版14-2）Y-1区に所在する。井桁と云うよりは炉桁状に組まれた横桟のみが下辺に残存するもので、云わゆる隅柱を持たない所の形式、即ち方形横桟型井戸側方式によるもので内部に上部の横桟残片4本が落下している。井戸側である縦板は残存していないが粘土層の全面に板材の痕跡が顕著である。下部横桟の内法は60cmで井戸底部より20~30cm上方に位置する。側板痕跡の最上部は井戸底部より計って110cm迄見られる。井戸の深度は基礎地表より165cmでその標高は(-)32cmである。井戸端南側に湧水面に接近するためと思われる40×70cmの一段降ったステップを有する。井戸側作成時の掘削口は上部で直径150~170cm程を計る。又外部施設として覆いがあったものと見られ、西側は溝状遺構によって失われているが、東側半分に3~5箇の方形の柱穴が見られるが、隣接する第3号井戸の柱穴と混合している。（第3図及び図版15-2参照）尚第30図の断面図Aに見られる東側横桟が二重になっているが、降下ぎみで尚且つ薄身の棟に台木を差したもので、第31図5がそれである。

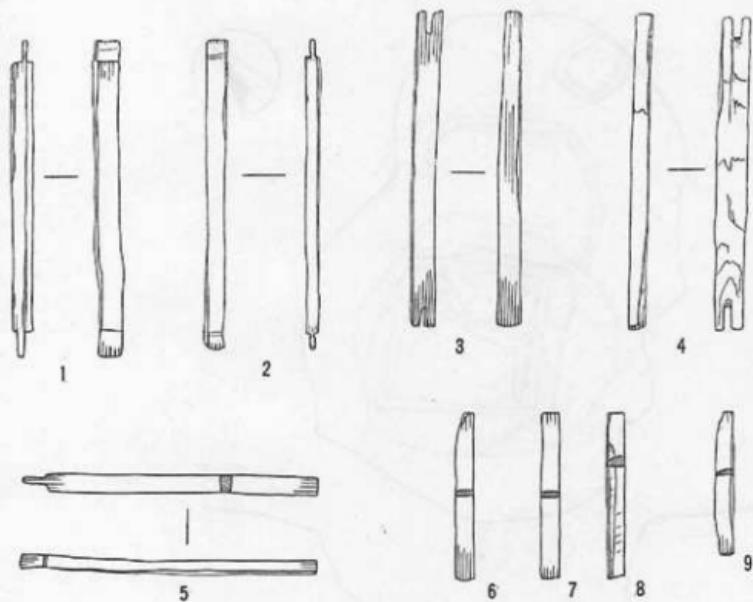
第31図に示したものが井戸構造材と思われるものの總てである。1~4は下部横桟で1、2は北及び南側のもので両端に柄を有し、3、4はそれぞれ西及び東側のもので凹状の受構を持つ。總て良質の杉材を角柱状内打割りにしたものがあるが、3、4の一部にナタケズリによる調整痕がある。太さはそれぞれ3×5cm、4×2.8cm、5.5×5cm、4×7cmである。5、7~9は内部に落下していたもので、杉材を打削したものである。これらの内5は上部の横桟と考えられるもので一端の柄を失っている。6は前述した下部東側横桟の下台にされていたもので、材質は不明であるが唯一の杉以外のものである。7~9も長さ及び8以外の厚さが6に近似しているところから、6同様の用途に用いられていたものとも想像される。尚8は前面にナタケズリが見られ、さらに一部が面取りされている。

#### 遺物（第32図）

2号井戸内出土の遺物は図示した4点の土師器の他いずれも細片にすぎないが、土師器17片、須恵器1片がある。1は口径15cmで最大径を口縁部に有する小形の壺である。水挽のクロコ痕を器面強く残し、外反する口縁は外部に鈎状の小突起を残してくの字状の立上りを見る。内面は細かいヨコナデが見られ口元に炭化物が残る。色調は白茶色である。2は同様小形の壺底部で底部に柱目状の痕跡を残す。3は外面はやゝ内窪するが縫合には開口ぎみの坏である。底部を欠失しているが、全体に肉厚で丸底を有するものと考えられる。色調は白茶色である。4は細片であるが口径33cmと推定される通りの長壺である。やゝつぼまりかけた頸部より外反する口縁は外部から強くおさえられ、小さく折



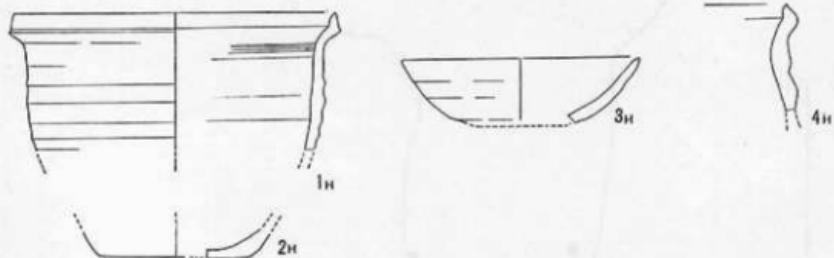
第30図 第2号井戸



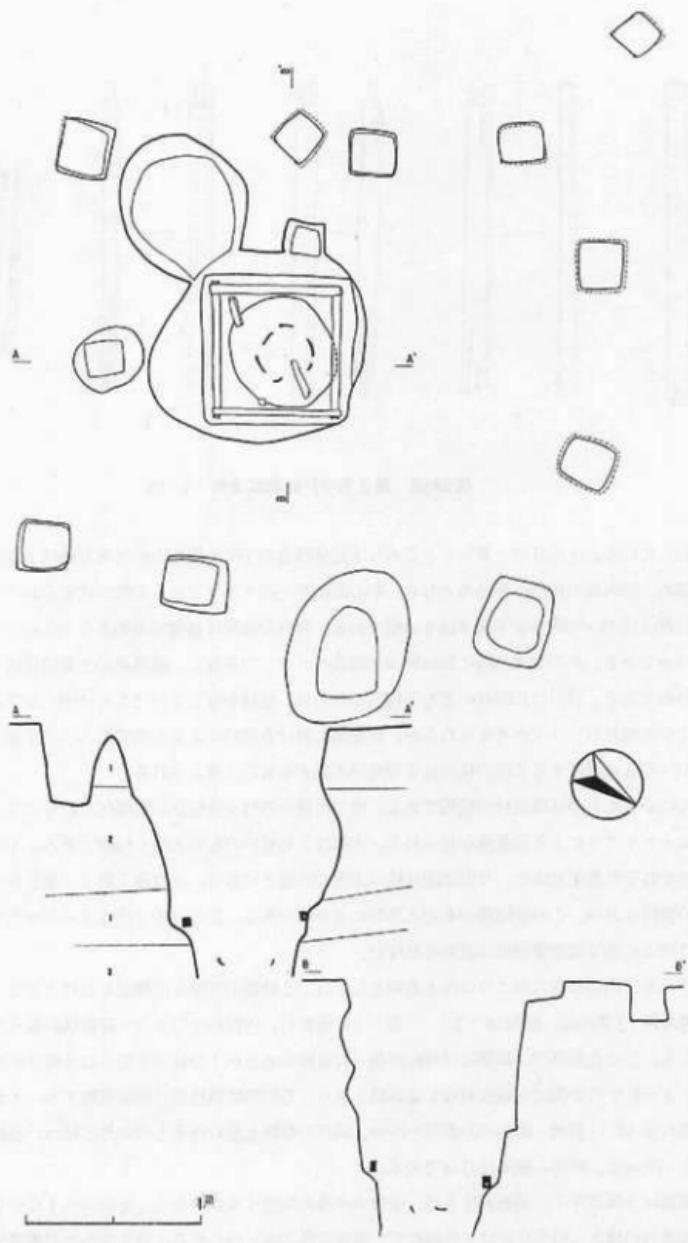
第31図 第2号井戸構成遺物 (1/15)

返して終る。肉厚な器で色調は白茶色である。

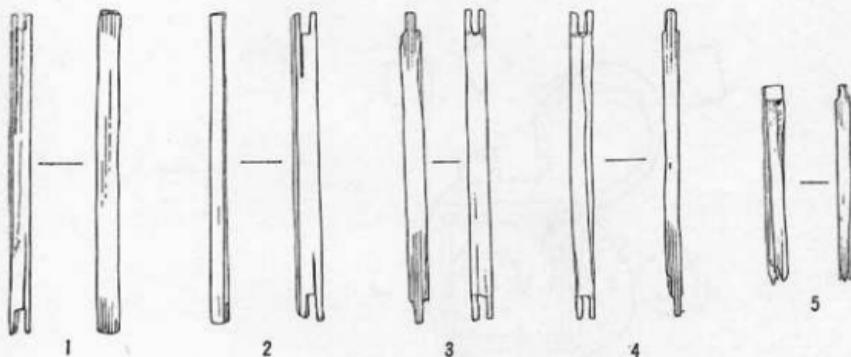
第3号井戸（第33図、図版15-1、2） 2号井戸と同じく方形横桟型井側と考えられるものである。側板及び上部の横桟共消滅しているが、下方の横桟は正状な形態で残りその内径は $65 \times 65\text{cm}$ でがけ状の横桟など2号井戸のそれを全く同様である。さらに側板の痕跡はないか図示した如く周囲は方



第32図 第2号井戸出土遺物 (1/3)



第33図 第3号井戸址



第34図 第3号井戸址構成遺物 (1/15)

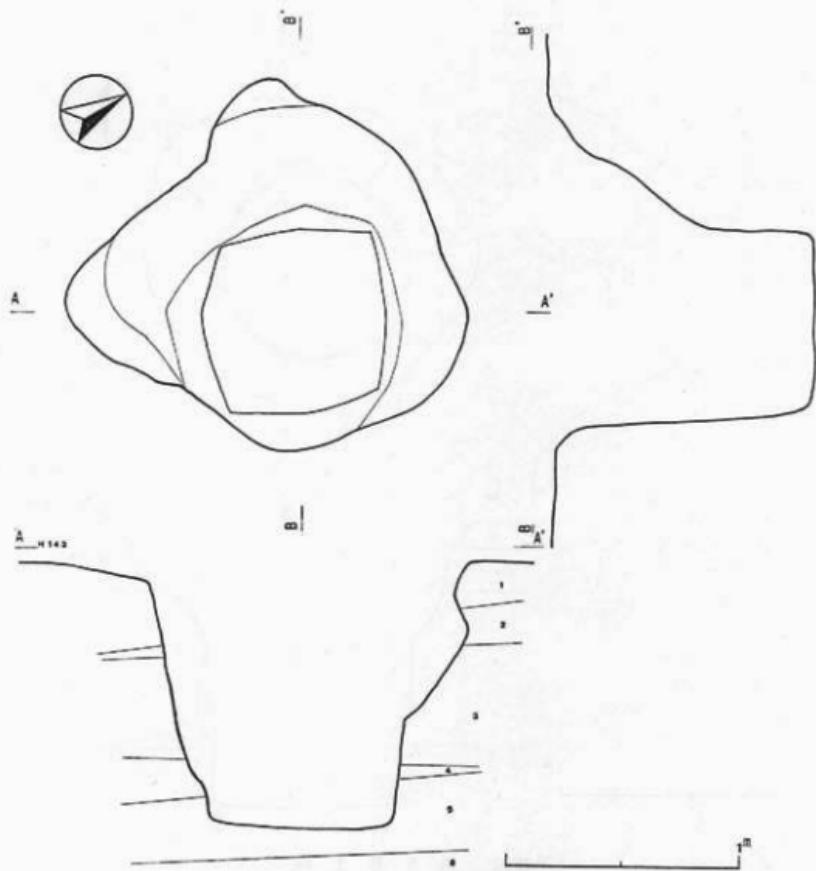
形に残存している。2号井戸と異なるところは下部横桟迄の110cm程が方形であり横桟下部は孔溝を一段と狭め、60cm程の円形の掘込みとなり、中心部に井戸のマナコである曲物が伏せられている。この曲物の直径は30cmで残存する深さは4cm程である。井戸の深度は基礎地表面より145cmで、標高は(-)14cmである。井戸端南西隅に24cm降った縦長のステップを有し、構築時の上部口径は115×130cm程の円形である。周辺に10箇程の方形の柱穴が見られ、屋根を有していたことは明らかである。この柱穴より2通りのプランが考えられるが、長期間における建替によるものであろう。平面図上西側にあるやゝ向きを異にする2箇の柱穴は2号井戸に関するものと考えられる。

第34図に示したものは構造材の横桟である。締て良質の杉材を角柱状に打削にしたもので5の一部分のみにナタケズリによる調整痕が見られる。木組は2号井戸のものと全く同様である。1～4は下部横桟でそれぞれ西東北南に当り実測面は桟の上部の外側とである。5は落下物で一端を失しているが上部の横桟である。この他同様のものと思われる小片がある。これらの寸法は3×5cm乃至5×5cmであり加工の面で鋸の使用痕は認められない。

3号井戸及び周辺の柱穴内よりの出土遺物としては、土師器小片が5点確認したにとどまった。

**第4号井戸** (第35図、図版16-1) Z-1に所在し、円形の上口より一部段状に掘られ底部は方形となる。この北側底辺の両隅には特に角張った痕跡があるが1号井戸に見られる隅柱の跡と考えられる。さらにその中間にも縦板材らしき痕跡もあり、方形隅柱横桟型井戸に部類する。本遺構の計測は上部口径135cm前後、底部の方形75～80cm、隅柱の痕跡と思われるものの外法76cm、基礎地面よりの深さ117cmで、底部の標高は21cmである。

出土遺物は土師器片7、須恵器片4点、中世須恵器系陶器片2点がある。第71図-1に示したもののは土師器甕の口縁から肩部にかけての破片で、推定口径20cm、内外面共に横位のカキ目紋様を持つ。

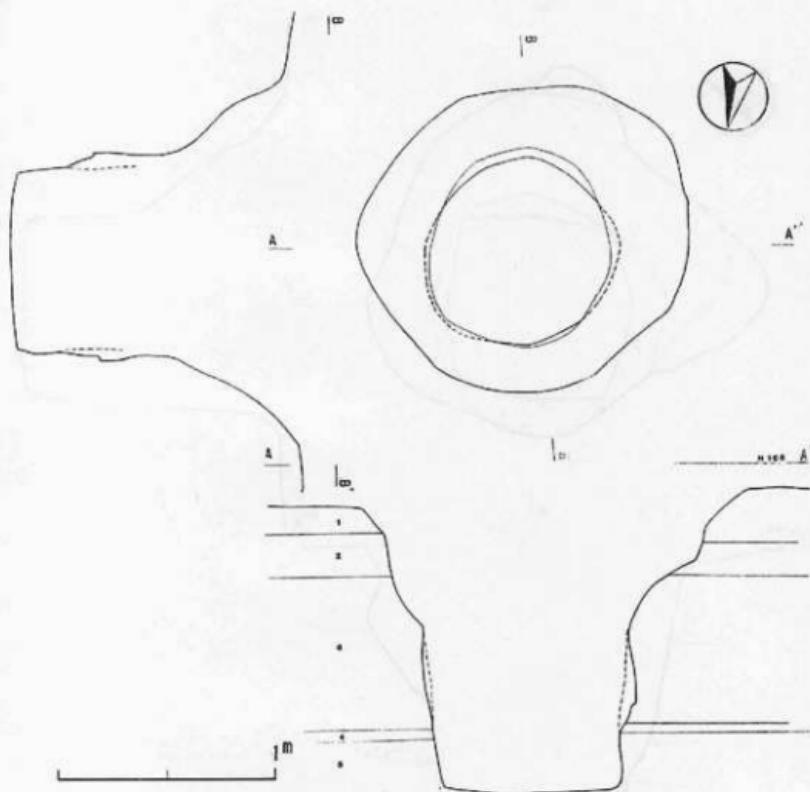


第35図 第4号土坑

その他は図示しなかったが、土師器はいずれも細片であり、須恵器は4片共に壊の破片、中世陶器は2点共甕類の破片である。

**第5号土坑** (第36図) Y-1区に所在し短かい溝状遺跡と切合っている。坑のプランは円形で上口径140~150cm、底径80cmを計る。深さは130cmで底部の標高は19cmである。井戸枠状の痕跡をとどめないが、中間の粘土が基盤地層の粘土と分離するところから井戸側外部の裏込め土と考えられ、井戸遺構と看る。尚中間部の坑壁に鋤状用具による掘削痕を階段状に残す。

出土遺物は総て土師器細片のみで、広口壺を含む18点があり、その内1点のみを第71図-5に示し

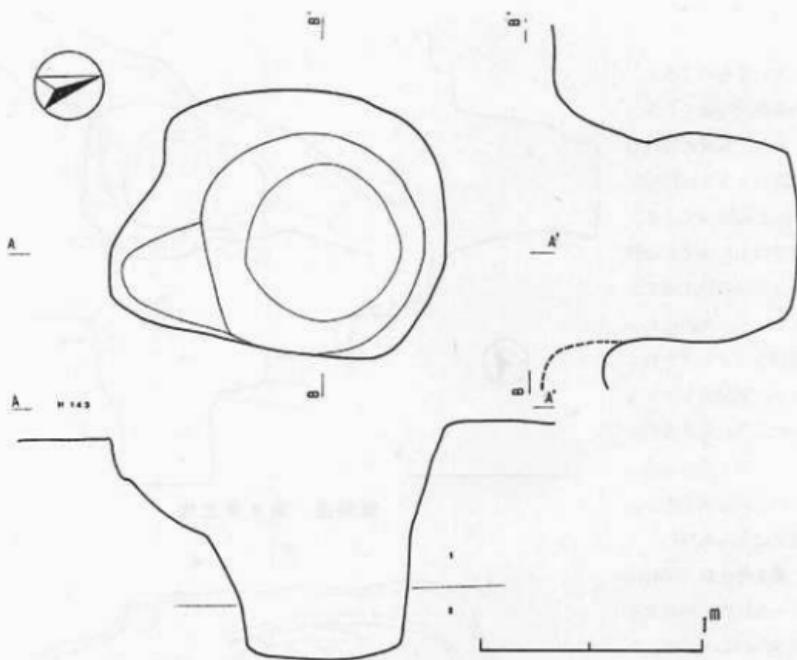


第36図 第5号土坑

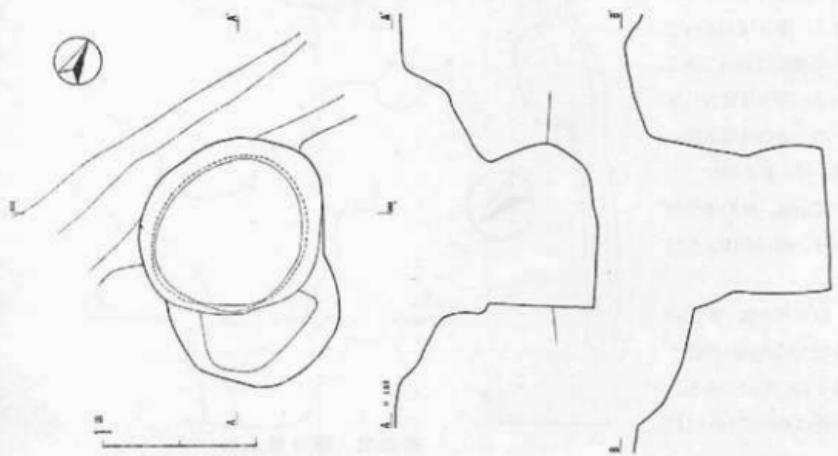
た。これは外反ぎみの口縁を有する薄手のもので推定口径18cmを計る。大粒の砂を多量に含んだ黄褐色の器である。

**第6号、7号土坑（第37、38図）** 共にZ-2区に於て隣接して所在し、短い溝に接している。双方共底部プランは円形で法量は表に示した如くである。底部標高は6号では28cm、7号は3cmである。7号は幅広いステップが確認されるし6号には傾斜度の急な一端が見られるがステップ部分の崩壊したものと做すことは出来る。井戸側等の構造材は見られないが、出土遺物として6号では土師器細片8点、中世須恵器系壺片10点、青磁蓮弁文碗細片（図版32-2の上）1点が見られ、7号よりは中世須恵器系鉢片2点、同壺片1点の出土を見たにとどまった。

**第8号土坑（第39図）** Y-3区で5号溝より北へ張り出した小溝と接しており、おそらく切合



第37図 第6号土坑

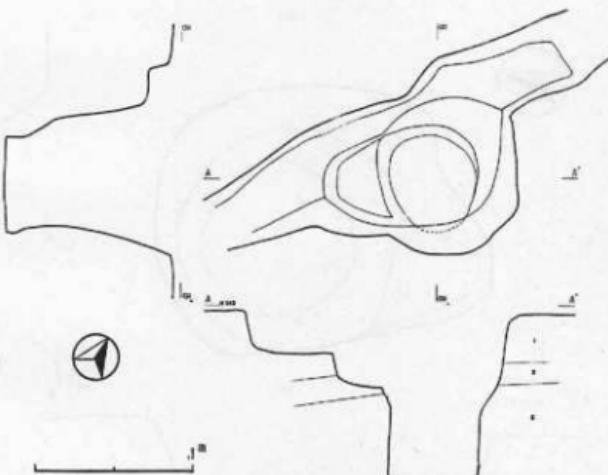


第38図 第7号土坑

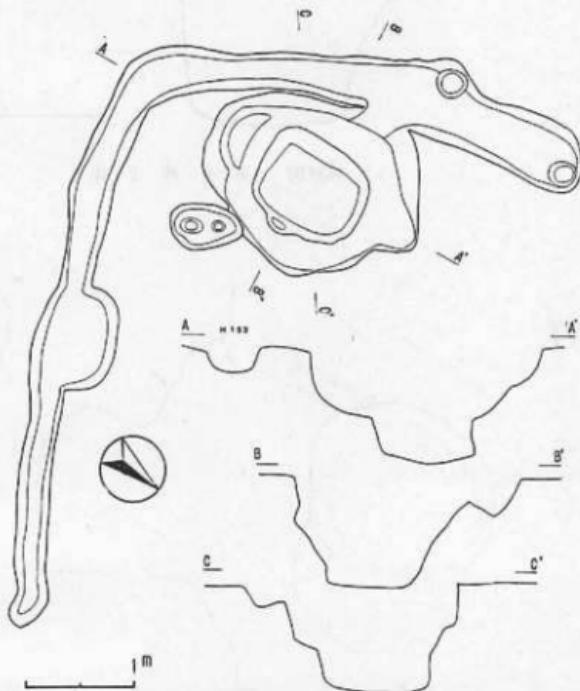
っているものである。内部施設等総てを失っており、現況に於ける底部のプランは円形でその直径60cmである。深さは105cmでその標高は32cmの粘土層で止っている。南西に45cm程降るステップを有するが、39図Aセクションに見られる2段のステップの上段は切合っている溝造構である。遺物は見られない。

**第9号土坑（第40図）**  
F-6区内に所在する数基の内の一つで、L字状の小溝に接している。口経は椭円で200×180cm、底部は2段状で角ばったものを有する。深さは110cmでその標高は48cmである。内部施設等は見当らないが、遺物は須恵器の甕、壺、蓋の細片、土師質土器、鉢形中世陶器片、磁石の出土を見た。

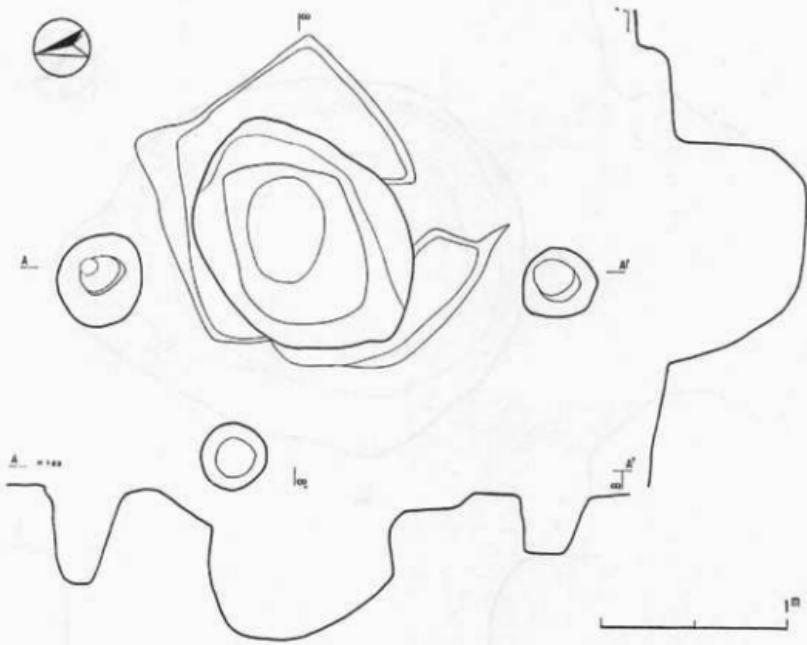
**第10号土坑（第41図）**  
9号土坑東側に所在する小形のものである。口径は椭円で140×110



第39図 第8号土坑



第40図 第9号土坑



第41図 第10号土坑

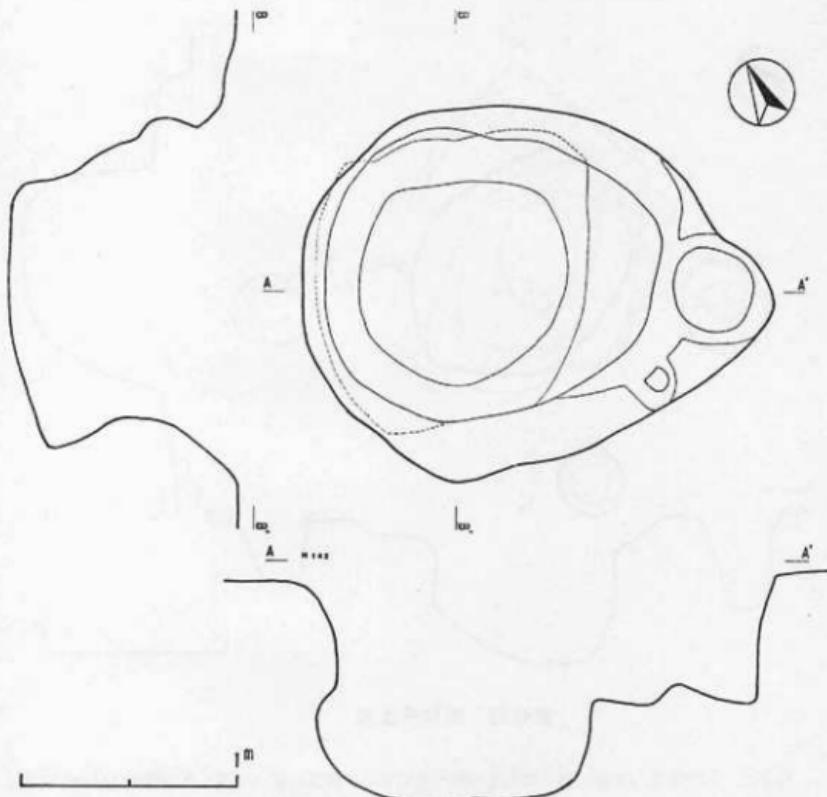
cm、底部は一応方形を示すが、さらに円形の窪みを有する。深度は95cmと浅くその標高は55cmである。東南部の擾乱部分を除いた3方にそれぞれ柱穴が有り、本造構を覆った施設があったことが窺われる。出土遺物は須恵器細片4点のみで井戸側等の遺物はない。

**第11号土坑（第42図）** F-6区に所在し、口径 $160 \times 170$  cm底部は一部にやゝ角張った部分も見られるが、円形プランク部類する。深度は105 cmで標高は31cmを計る。東面に広いステップを見る。遺物は皆無である。

**第12号土坑（第43図）** G-6区に所在し、口径160 cmで底部中央にやゝ方形の凹部を有する。深度は浅く75cm程度で底部の標高は69cmである。南側にステップを有し、東側には幅広い浅溝状の窪みが連結している。出土遺物はない。

**第13号土坑（第44図）** F-6区に位置し、口径は崩壊を重ねたものと推定され $210 \times 180$  cmと大きいが、底部は $70 \times 100$  cmの方形で、さらに小さな窪みを有する。深度は90cmでその標高は47cmである。出土遺物は見ない。

**第14号、15号土坑（第45図、図版17-1～2）** C-6区に隣接して所在する2基で、共に方形



第42図 第11号土坑

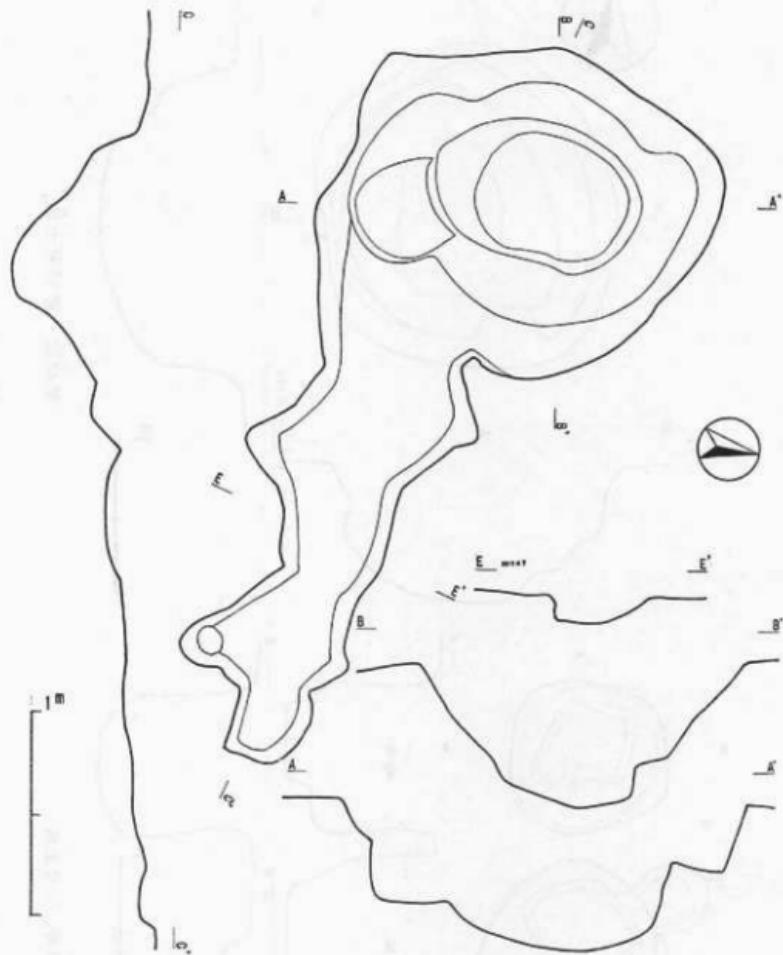
の井戸側を有していたものと推定される底部を留める。第14号は口径 140 ~ 150 cm の円形で、底部は一辺が 70 cm 程度である。深度は基盤地表より 127 cm でその標高は 21 cm を示す。上口西面に 40 × 35 cm のステップを有する。

第15号は口径 125 cm の円形で底部は一辺 60 cm 前後である。深さは 125 cm でその標高は 19 cm である。

#### 遺物

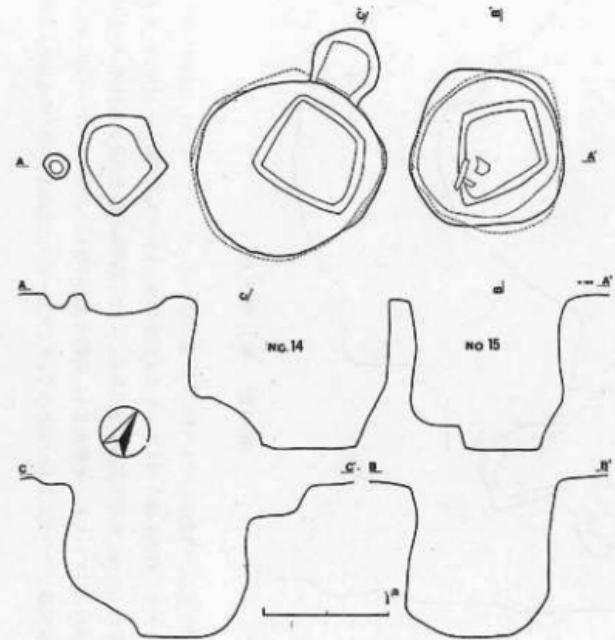
15号より中世須恵器系陶器と木器が出土し、それぞれ第72図、73図に示した。前者 (72-1) は棺跡で 15 本 1 単位の櫛目を持つ。この櫛目の施法と器口縁部に見られる外側からの強い圧痕は特徴的である。推定口径は 30 cm である。後者 (73-1 ~ 2) の内 1 は桧材の柾目もので円形の器の一部分であり、2 は曲物の部分である。下方に底部を據った切り目状の孔が見られる。

**第16号井戸** (第46図、図版20-1~2) E-4 区に主としてあり、掘込み口径 140 cm の円形の

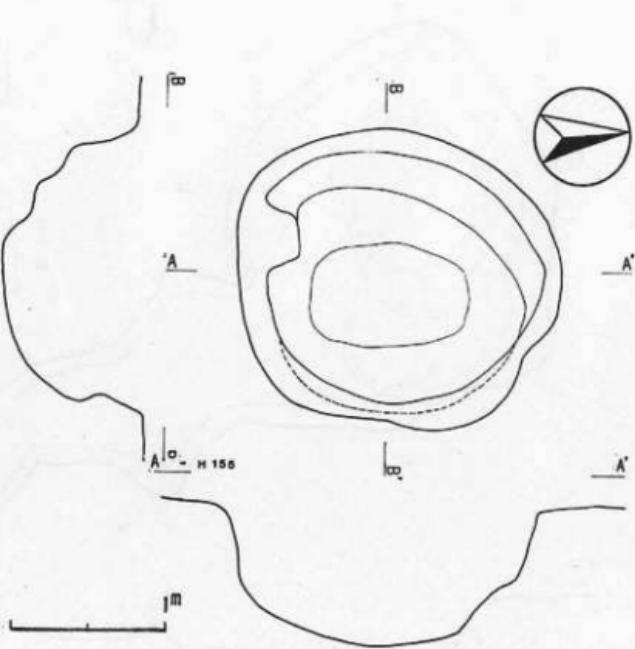


第43図 第12号土坑

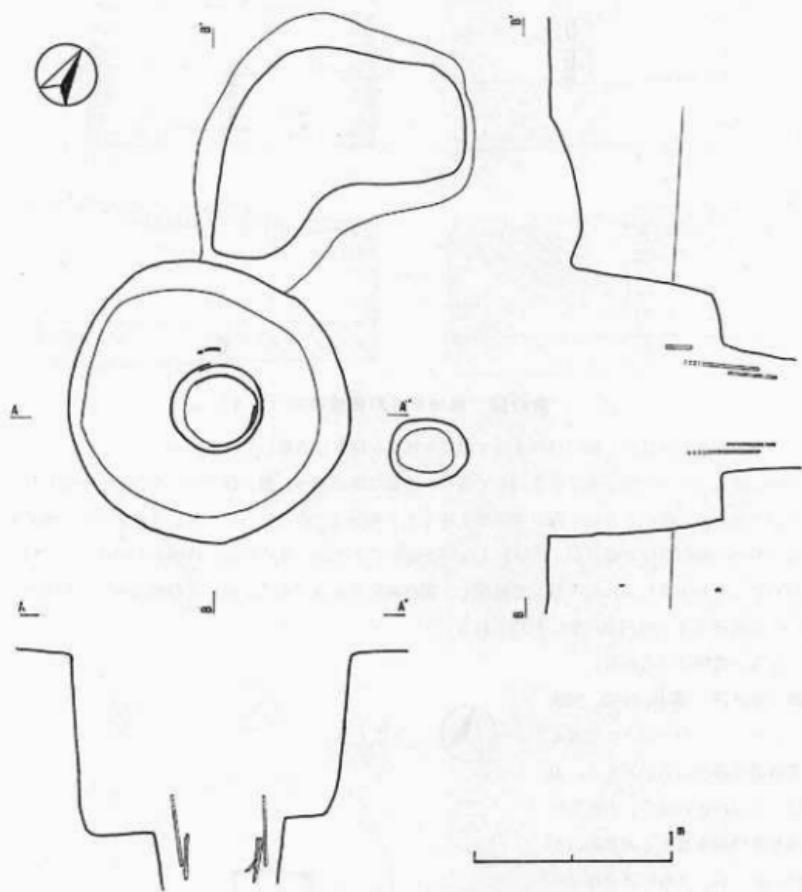
上口と垂直の壁を見る。中央部にセイロ状の円形曲物が2段に据えられている。上段のものは下段のものより一周り大きく外部を覆う如くであり又上部が腐蝕していたため残存高さは37cmにすぎない。上部からの深度は120cm、底部標高は32cmである。これらの曲物は眼と見るよりは井戸側と見られ、さらに上方に重ねられていたものと推定する。曲物の北面に接している板或るいは棟状の板片が見られるが井戸側を保護したか支えたものであろう。ここでは一応円形曲物型井戸（累積井戸）と呼ばれる



第45図 第14号、15号土坑



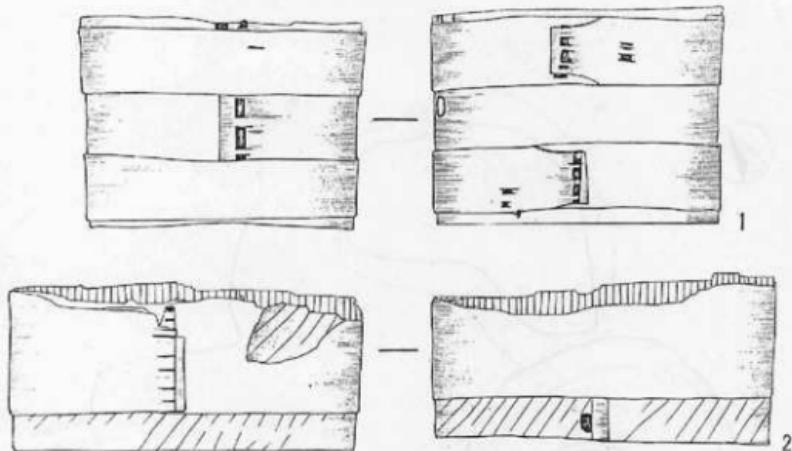
第44図 第13号土坑



第46図 第16号井戸

ものである。

**構成遺物（第47図、図版20-3、4）** 井戸側と見られる曲物のうち上部に位置するものは取揚時点に腐蝕していた上方部を失った。検出時点ではその高さ30cmを計ったが現状では2.15cmであり最大径は44.8cmである。材質は厚さ0.5cmの桧板で2重造りとなる。内側のものはその内部に程1cm間隔の鋸目を縱位に入れ外面には鋭い刃物による斜状のカキ目を入れ曲げを助けている。但し合せ目の6cm程にはこの刻目はない。桜皮の結いを残す。外側のものは内側の底部より5乃至6cm上った位置にあ



第47図 第16号井戸構成遺物 (1/8)

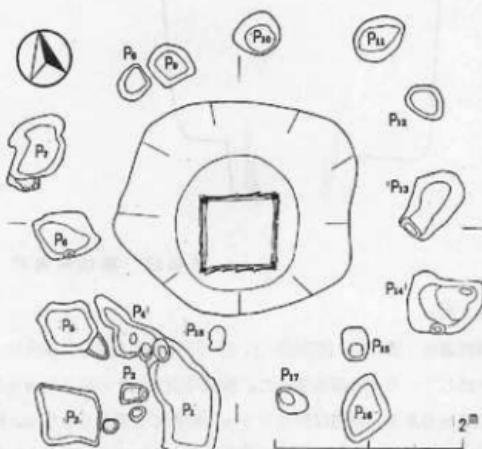
る。内部の如き刻目はなく結い目の4コマの刻を残すが樹皮は消滅している。

内部に位置するものは完全な姿を残して居り、法量は総高28cm、最大径37.7cmを計る。材質は桧と考えられるもので図示した如く器の中間部を除く上下部分は二重となっている。主体となる内側のものは、内部に曲を助ける鋸目が、合せ目7cm間を除いて全面的に見られる。外側のものは上下二段からなりそれぞれ上下に1cm程を残して位置し、幅は共に8.5cmである。結いの桜皮等も完全に残り外面中央に直径3.1cmの円形の焼印が見られる。

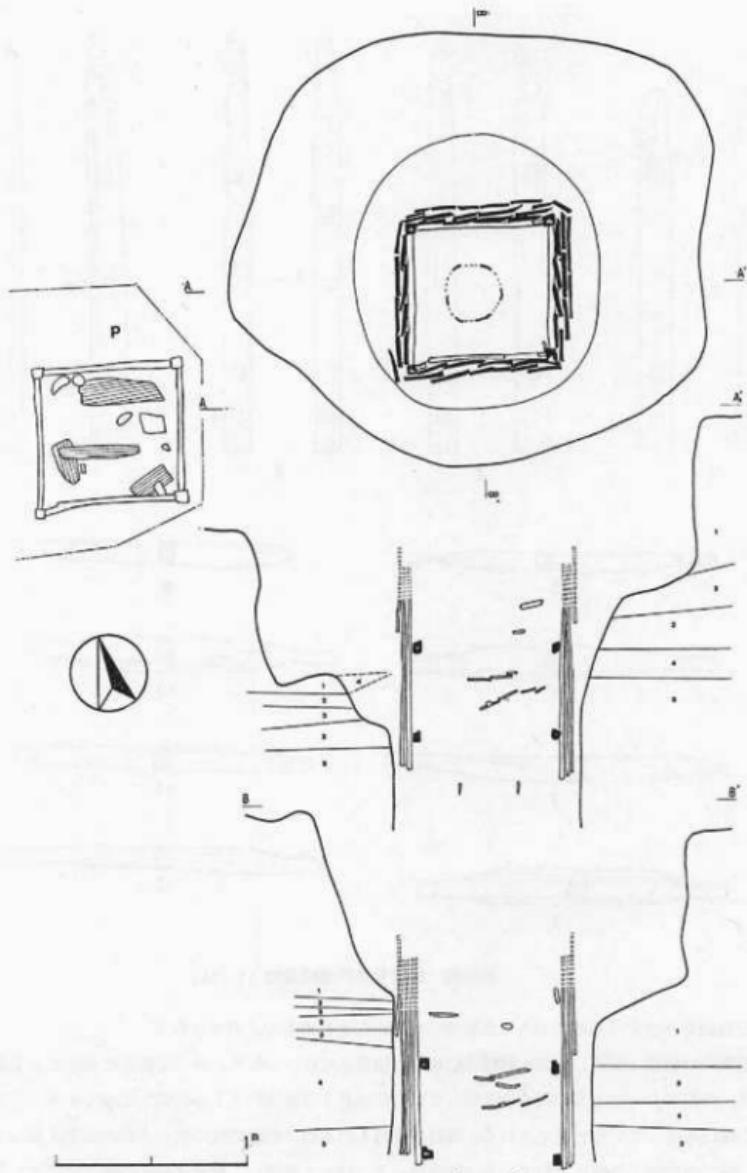
土器等の遺物は見られない。

第17号井戸 (第48、49図、図版18、19-1) D-17区に位置し、同遺構群中最大のものである。遺構は1号井戸と同様で、方形隅柱横棟型井戸側を有する内部施設が下層に見られ、上方には直径2.3×2.5mの掘込み口徑と外周に方形の柱穴群から成る。内部施設の井戸側の法量は一辺80cmの方形で、その最深は基盤地表より195cmで、中央部に見られる眼はさらに下層に有り、よって総深203cmとなる。この深度は標高(-)29cmと深い。

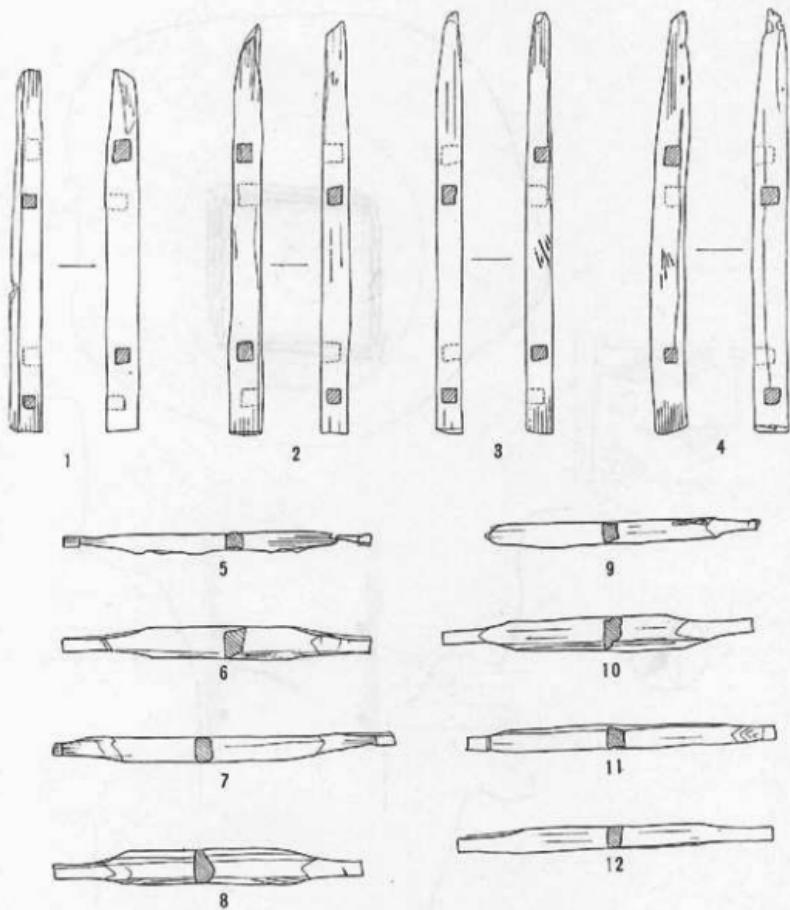
外周に於ける十数箇の柱穴は井戸



第48図 第17号井戸(1)



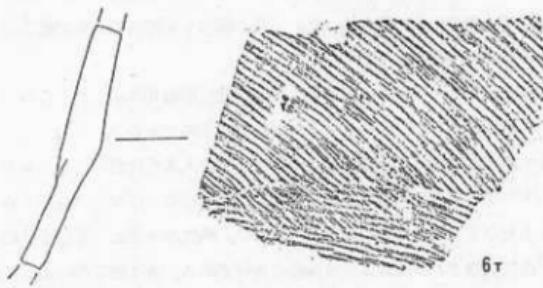
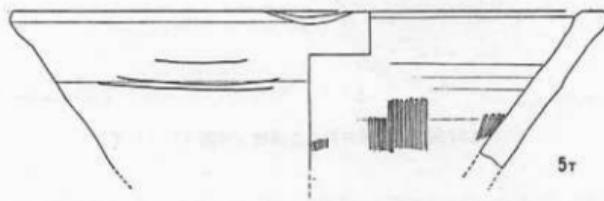
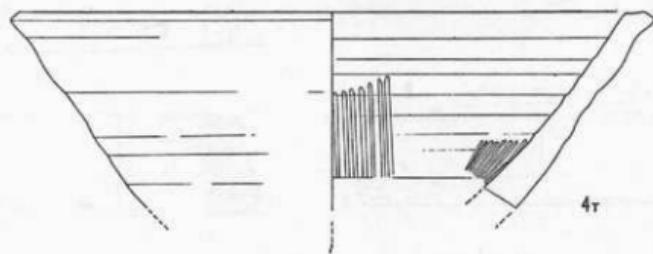
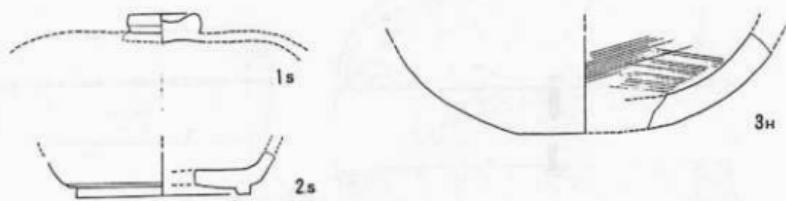
第49図 第17号井戸(2)



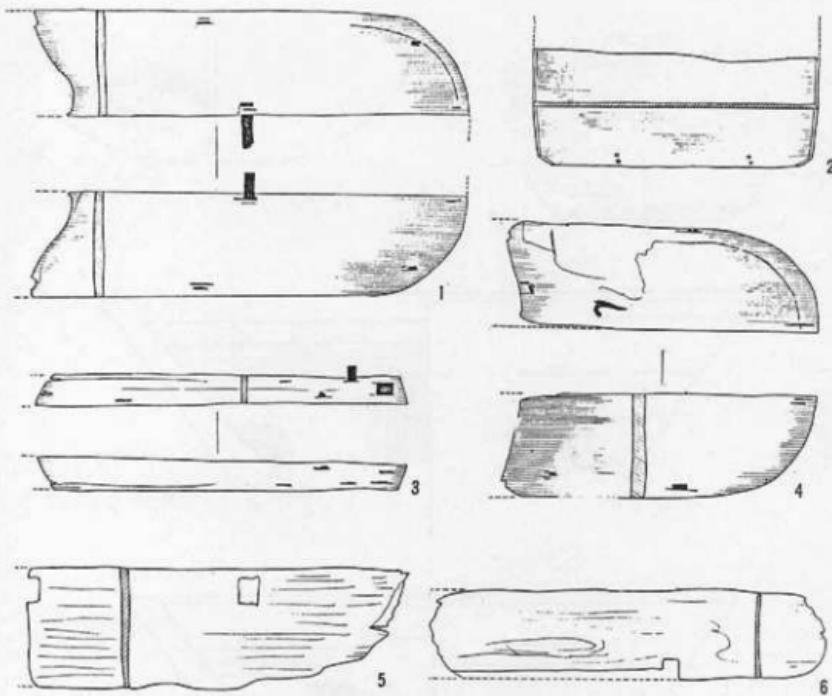
第50図 第17号井戸構成遺物 (1/15)

を覆う屋根をささえるものであろうが数度の建替がなされたものと考えられる。

内部施設の構成は前述した如く隅柱に枘組した横桟と縦板からなり、さらに底部に曲物による眼を有する。朽敗によって上方の程 $\frac{1}{2}$ を欠失しているが残存する横桟の上下の間隔が50cmであることから4段の横桟を持っていたと推定される。隅柱と横桟との木組は枘組で柱の枘穴と桟の両端を削って枘とし、總てが内側より楔止されている(図版18-2、19-1参照)。側板は49図の断面図に示した様に上下2段に分けられて設置されている。この板の長さは上下とも120~130cmと推定され、下段は



第51図 第17号井戸出土遺物（土器）（1/3）



第52図 第17号井戸出土遺物（木器1）（1/6）

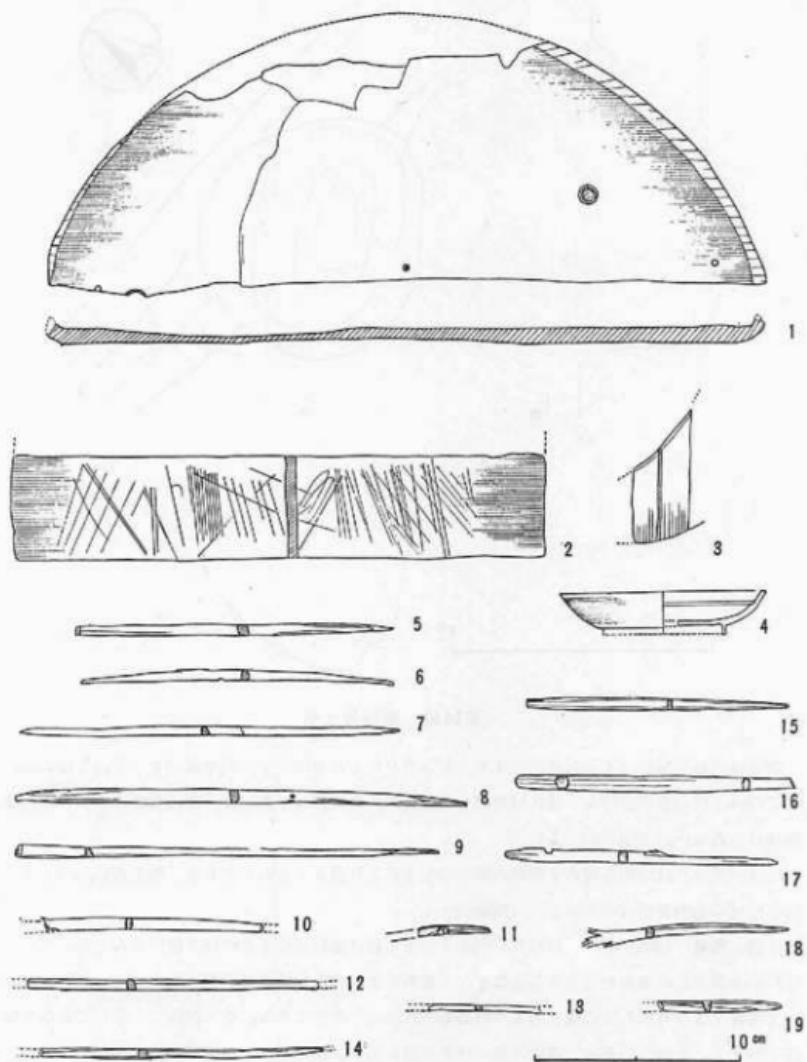
特に2重に設置され、北面の一部から東面の一部分にかけては3重となる。上段はやゝ薄いものがほゞ2重に設置されていた。尚上段の側板はすでに朽敗している部分もあり、又痕跡のみをとどめるもの、あるいは取揚げ不可能のもの等もあった。（第49図の平面図内は上段の板を記入していない。）

#### 遺 物（第50～53図、図版40、他）

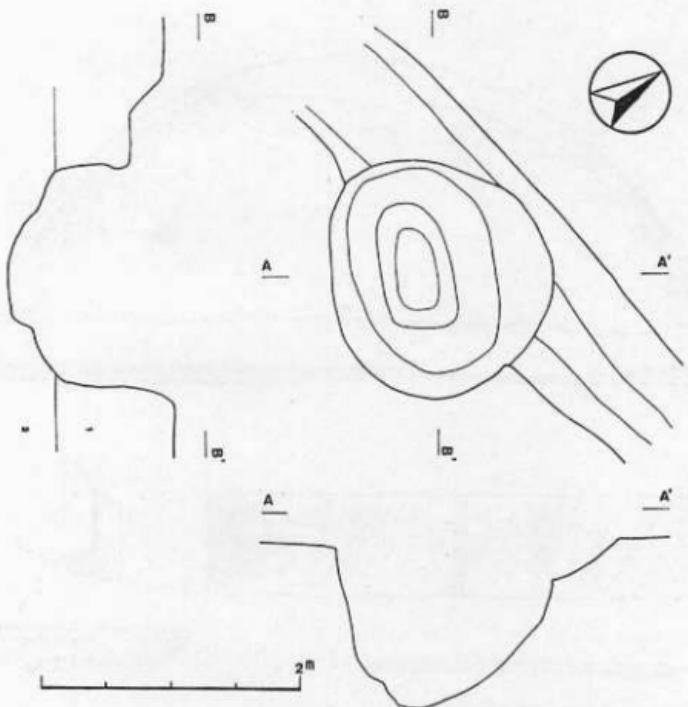
前述の遺構構成を遺物として個々に見る時、第50図及び図版40に示したところである。隅柱、横棟、側板共に良質の杉材であり、眼（図版40-3）は桧材の曲物である。

隅柱の太さは一辺を6cmから8cm程を計る角材で、杉の大木を打割りにしたものであり、2の一部に二次調整としてわずかに斧による削り痕が見られる他は割りっぱなしのものである。柱の底部の切断は総て斧によるもので、鋸の使用痕跡は見られない。枘穴の寸法は一定していない。

横棟は柱と同様に割物で、一辺が5～6cm程の角材である。枘は総て斧によって削り出したもので寸法は不定である。枘組に当っては楔の大小によって調節されている。



第53図 第17号井戸出土遺物（木器2）(1/3)



第54図 第18号土坑

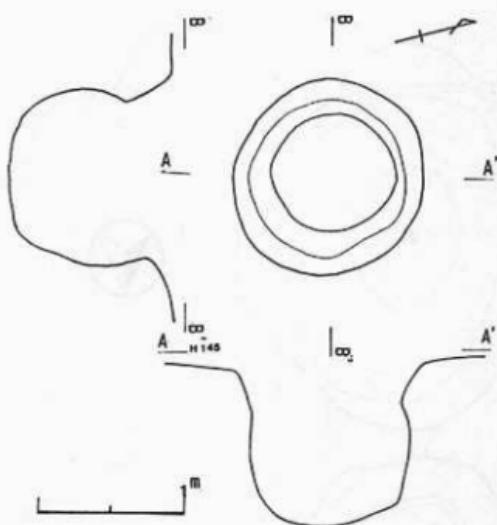
側板は同じく割物（木羽板状に大木をミカン割りにしたもの）で、肉厚部分で2.5cmで幅の広いもので23cm、狭いもので10cm、長さは現存した最長のもので92cmであった。板の端部の切断に鋸の使用痕は見られない。（図版40-4）

眼（マナコ）は原形を留めず曲物の断片の出土により眼とするものである。推定直径30cmと考えられる絵材の曲物断片12点がある。（図版40-3）

**土器、陶器（第51図）** 17号井戸内出土の土器類は総数16点あるが総て破片のみであることと、井戸の中間部分に集中していることなどから廃棄による埋戻し時点での混入物と考えられる。

**土師器** 3は丸底形態の壺と考えられる器の底部の一部分である。やゝ肉厚で内面にこまかにカキ目を有する。色調は白茶色で外面に煤の付着部分がある。図示しないが土師器細片が他に7点出土している。

**須恵器** 1は蓋類（壺蓋と推定される）の紐部分の破片である。上部が大きく窪んでいる。2は高



第55図 第19号土坑

台付环片で、肉厚ぎみであり高台が低いのが特色と言える。环片は他に3点が出土した。

中世陶器 4~6は須恵器系中世陶器と呼ばれるもので4、5は描跡である。4は口径30cmを計り、口縁先端の近くでやや外返ぎみの器形はその口唇部を上部と外部から強く抑えられている。内面には鋭く深い描目が施され、その1条の数は不明であるが、全体では8条と推定される。器内外面共ロクロ痕をあざやかに残し、描目の状態から見ても磨耗度は少ない。5は口径28cmで浅い片口を有し、口唇部は水平である。器内には14条1単位の細い描目が施され、推測ではあるが全体では8条となる。内面は使用によってかなり磨滅している。6は壺形容器の片で、器の腰部と胴部との接合部分であり、断面図及び拓影からも作成法が知られよう。

木製品 (第52、53図、図版35-1~2、36-1~5、37-2~3) 52-1、3、4は橢円形曲物の底板又は蓋である。板の接合部分及び立上り側面との接合部分に樹皮紐を残す。材質は桧か松木であろう。(図版36-1~3) 2(図版36-4) 及び53-2(図版36-5) は折敷である。前者は隅々を切り落され、さらに板の周囲は梯形に面取りされたもので一辺の長さは27.5cm方形となる。縁の立上りを結いた小孔がある。後者は一辺26.5cmであり細い縁片であるが縫孔によって一応折敷とした。両面共に刃物痕が多数あり組として利用された。2者共桧材である。52-5~6(図版37-3) は用途不明である。小さな方形の切込部や孔を有する。53-1(図版35-1) は盆で推定直径36cm、口唇部を欠失しているが0.5cm程の低い縁部を有している。内面及外側面には黒色の漆塗が施されているが、底部には見られない。本地は柾目の板を削ったもので、4カ所の小孔を埋木している。3は桧材の柾目の小片であり、一端をするとどく内湾ぎみに削っている。用途は不明である。4は漆器の坏である。内外面共に黒色漆塗で、内面に1条の沈線がある。底部には欠失しているが薄い高台の名残が見られる。本地は盆と同様柾目状の板材を削っている。(図版35-2)、5~19(図版37-2) は著である。長さ、形態共に不定であり、材質も多くは杉又は桧と思われるが6、11、13は柳であろうか。12、14、15、16はみごとな面取りがなされている。

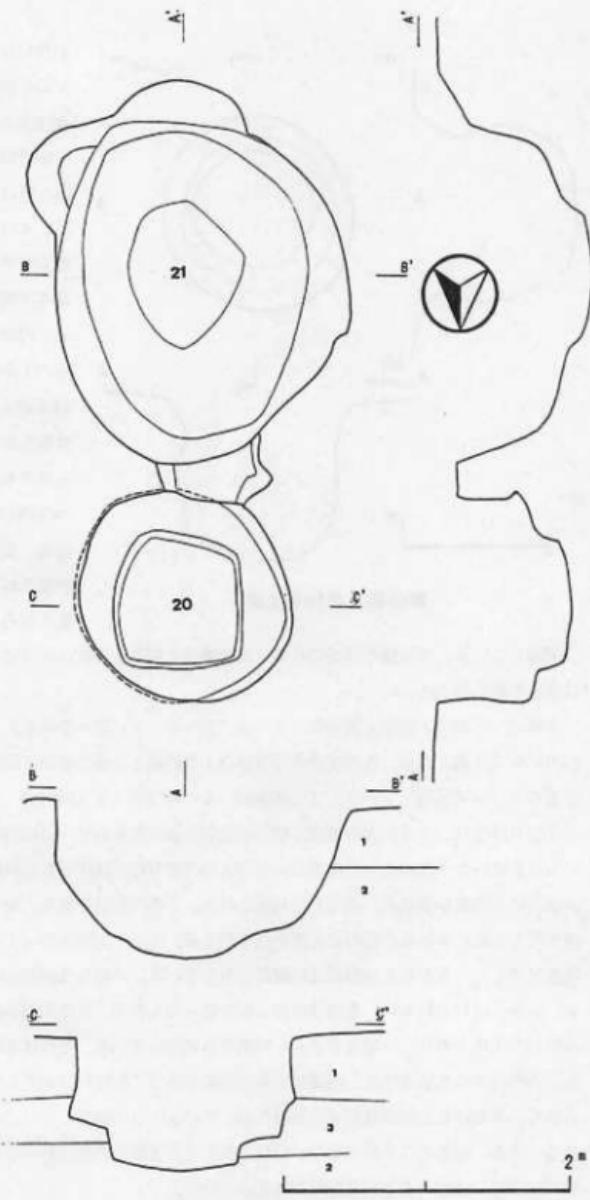
種子類 (図版38-1  
～2) 茄子種約600点、  
カボチャ種5点がある。

第18号井戸 (第54図)  
G-10区内で第2号溝と  
切合って所在する。口径  
180cm、深度125cmを計  
り底部は方形となる。底  
部標高は21cmである。

出土遺物としては土師  
器片13点と須恵器片5点  
がある。いずれも小片だ  
が72-2に示したもの  
は須恵器で肩部に2条の  
沈線を有する壺である。  
器面の多くは緑色の自然  
釉が流れ、内面は明るい  
灰色でヨコナデ痕を残す。  
最大径は胴部で推定では  
あるが19.5cmを計る。

第19号土坑 (第55図、  
図版21-2) F-14区  
に所在し、口縁、底部共  
は△円形で、壁面はやゝ  
内湾する。口径130cm、  
深度115cmで底部標高は  
30cmである。井戸として  
の内部施設の残痕は見ら  
れず、素掘井戸造構とも  
考えられる。坑内出土遺  
物も見られない。

第20号、21号土坑 (第  
56図) それぞれE-13、

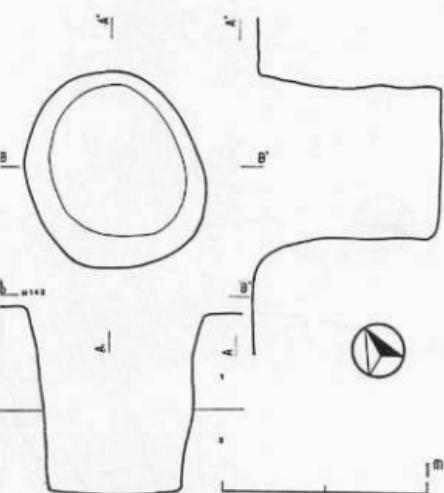


第56図 第20号、21号土坑

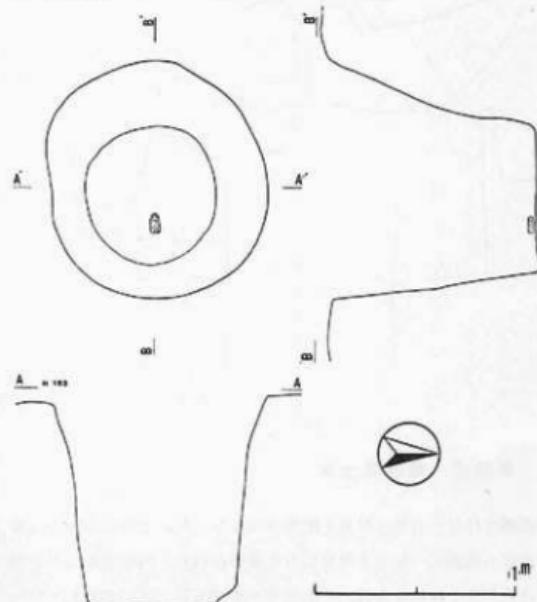
14区に所在するが隣接するものである。共に方形の底部と口縁にステップを有する。20号は口径 150 cm、底部辺90cm、深度95cmであり、21号は口径 220 cmと広いが底部は一辺80cm程度であることから、口縁部において削壠が進んだものと考えられる。深度は 110 cmである。

出土遺物は20号に土師器、須恵器が若干見られたが、21号には無い。第72-5は須恵器の壊蓋で表面全体に緑色の自然釉がかぶる。

第22号、23号土坑（第57、58図、図版16-2） それぞれI-12、14区に所在し、共に円筒形態のものであり井戸としての内部施設の痕跡はとどめない。又口径も共に小さく、その法量は95cmと 110 cm程度で深度は前者が90cm、後者は 107 cmでそれぞれの標高は52cm、27cmである。



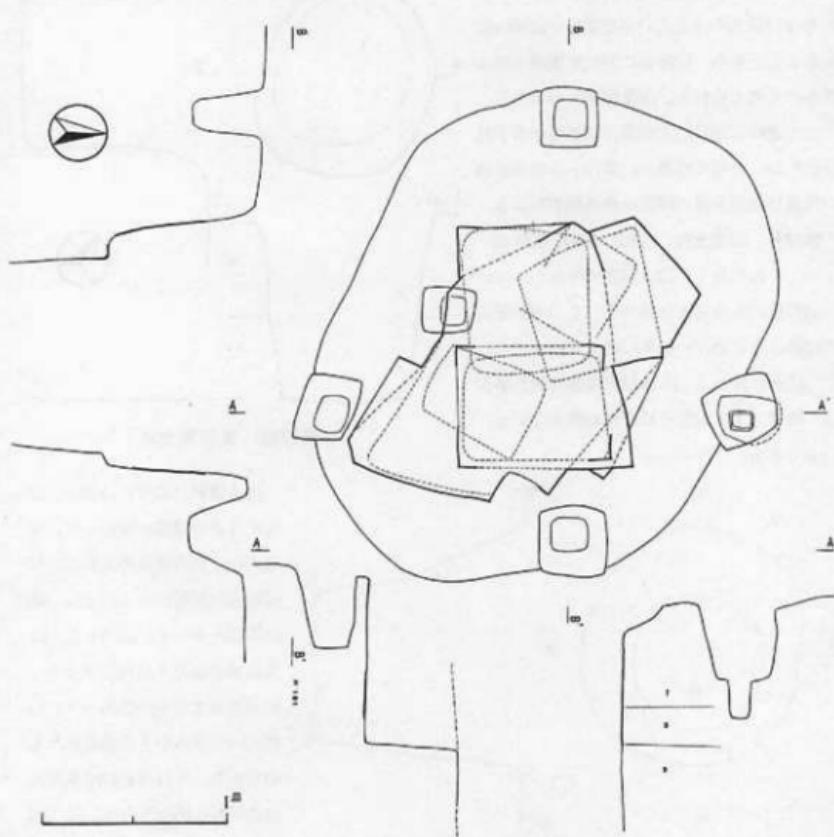
第57図 第22号土坑



第58図 第23号土坑

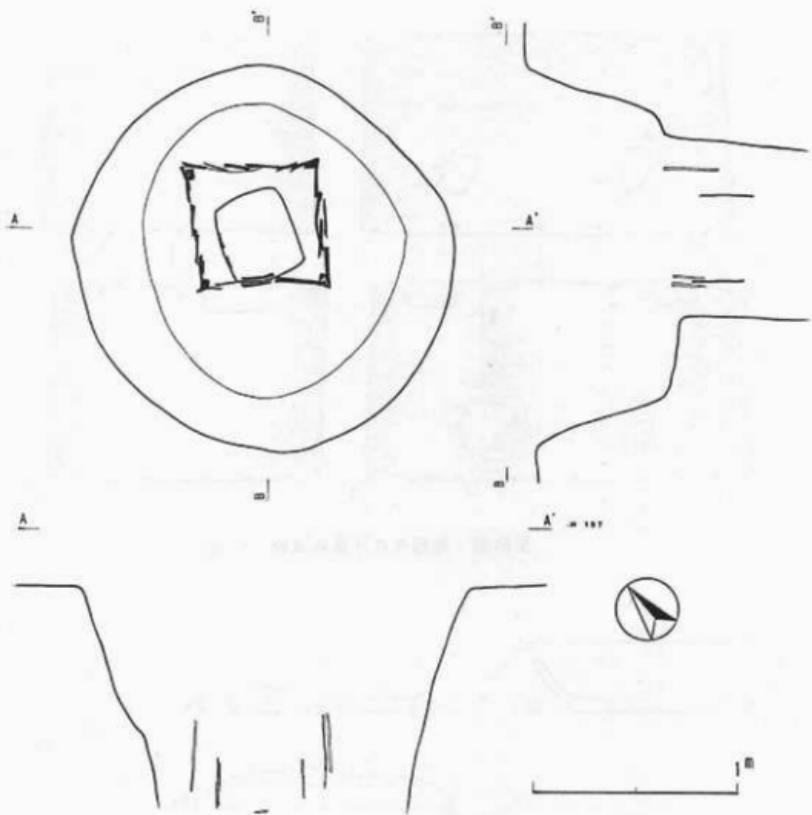
出土遺物は23号には無く、22号に4点の遺物が検出した。その内の1点青磁蓮弁文碗の小片である（図版22-2右上）。他は第72-6～8に図示した。6、8は須恵器で6は皿でおそらく高台を有するものであろう。口径12cmで水みがきを施されたものである。8は壊蓋片で先端部分の厚さに特徴を有す。7.（図版34-2）は石鍤である。やや偏平な自然の丸石に細紐を結ぶ紐は図示した如く前後左右上下の6ヶ所で組合う。紐は炭化して残存する。

第24号土坑（第59図、図版21-1） C-18区に所在するも



第59図 第24号土坑

ので複雑な様相を呈し、且つ見出に困難を伴ない底部の位置を把握出来なかった。上口は方形の口縁が6~7例が重複し、東寄りに最終使用の底部につながる部分の方形造構が残る。内部施設は一切留めないが、外部に覆屋の所在を示す柱穴が7ヶ程数えられ、その内5ヶを図示した。いずれも方形の

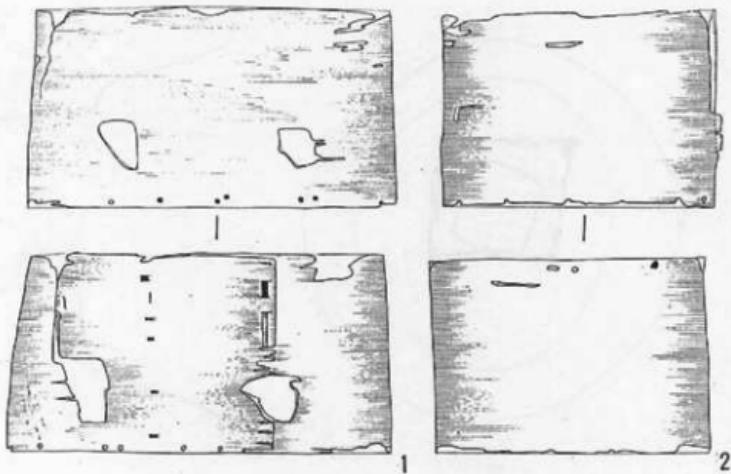


第60図 第25号井戸址

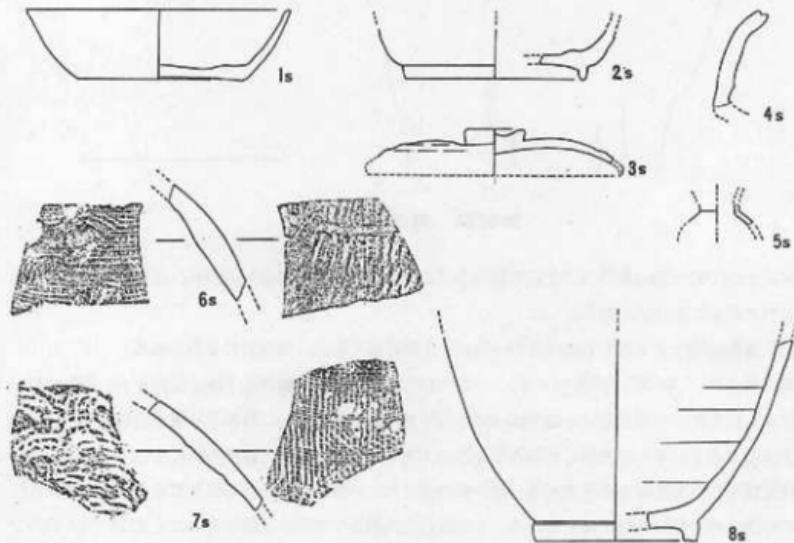
柱穴で一辺が25~35cmを計る。土坑の掘込みはこれらの柱穴の外部迄も広がり、井戸側を設置し埋もされた部分にも柱穴がある。

出土遺物は図示する程のものはなかったが、土師器細片29点、須恵器片2点がある。

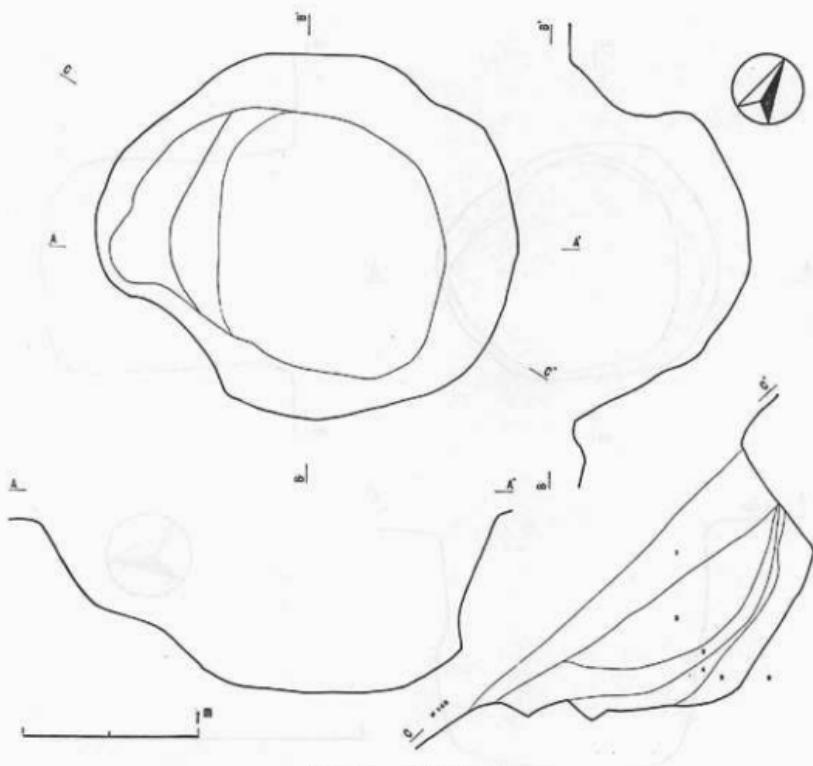
**第25号井戸**（第60図、図版19-2） D-12区、二重周溝造構外区下層に位置する。掘削口径190 cmを計るが、内部構造は一辺が65cmの方形の井戸側にすぎない。残存する構成造構は井戸の深度115 cmの下方をわずかに検出したのみで全容は不明であるが、隅柱と縦壁の側板を見ることから方形隅柱横桟型井戸側を有すると考える。井戸側内の底部には眼と推定される隅丸方形の曲物が設定され、その位置は井戸側の西壁に接している。この接点の内側及び北面には曲物をおさえるかの如く板及び棟が挿入されており、井戸最深部には板が呑せられている。



第61図 第25号井戸構成遺物 (1/8)



第62図 第25号井戸出土遺物 (1/3)



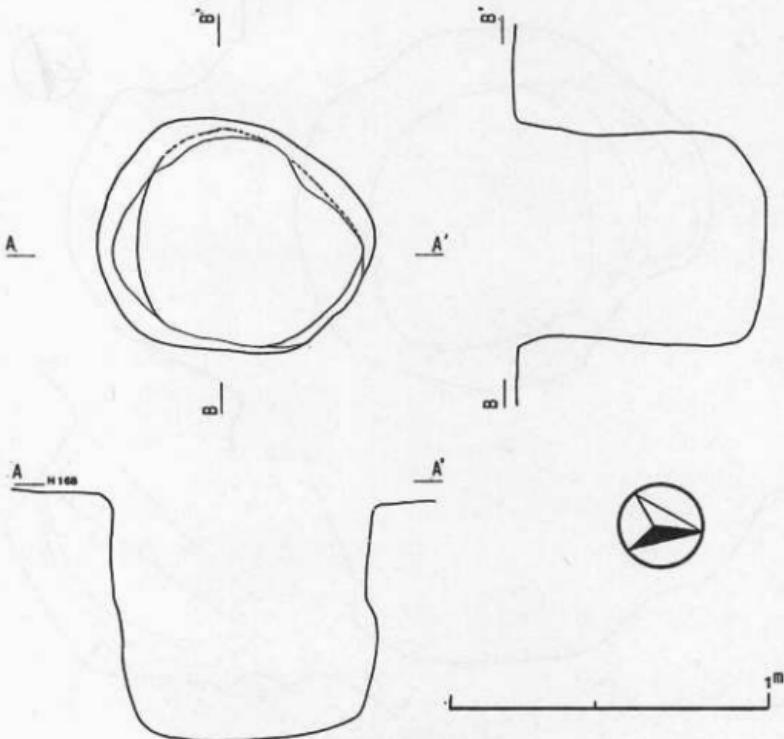
第63図 第25号土坑

遺物（第61、62図、図版41-1～2）

井戸を構成すると遺物即ち構造材としては前述した如く隅柱、板類、曲物にすぎない。この内曲物以外は井戸底部分にわずか20～30cmの高さで残存したのみである。隅柱は杉材の打割り角材で太さは一边が3cmから6cmで必ずしも正角とはかぎらない。おそらく上部には横棟を受ける枘穴を穿っていたものであろう。側板も同じく杉材の削りもので幅は13～15cm程度を主とし、最大幅のもので25cmを計る。厚さは磨耗の為と考えられるがかなり薄く1～1.5cmを主とする。

井戸の眼を推定される曲物は隅丸の方形で桧材である。かなりの損傷はあるが全容を知り得る。第61図はその四面を図示したもので、長径は上口45cm、下部48cmの口すばみで、短径は24.5cm、高さは25cmを計る。厚さは下方で0.8cm、上部は0.2～0.3cmと薄い。下部には底を接合した隙孔が見られ、さらに両側面に人為的なものと思われる大きな孔が2ヶ所づつあけられている。

須恵器（第62図） 25号井戸の出土物は須恵器に限られた。1は坏で荒い砂粒を多く含んだもの



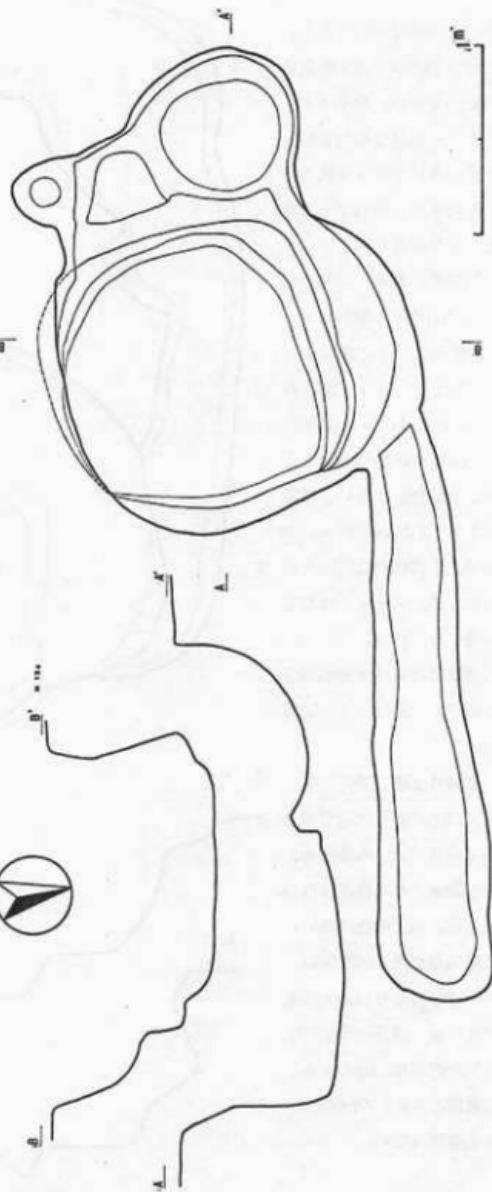
第64図 第27号土坑

で底部にヘラオコシ痕を有する。同様の坏片は他に4ヶ体分を見る。2は高台付坏の、その高台の造りに特徴が見られる。3の坏蓋は頂点がやゝ沈んだ形態が見られる。坏蓋は他に1点がある。4は壺類の口縁部で推定口径13~14cmを計る。5は薄手小形の容器で小壺類部と見られる。6~8は壺片である。6の内側の紋様はカキ目の上に5条程を一単位とする圧痕又はネコカキ紋が上下2段に見られ、7の表側はカキ目の上に垂直な条線状タタキ目が見られる。8は無紋の底部である。

**第26号土坑（第63図）** D-5区に検出され、北西に向って短い溝状造構に連絡する。口径は210cm、底径140cm、深さ105cmで底部の標高43cmを計る。西側に一段のステップを有する。土出遺物はない。

**第27号土坑（第64図）** D-6に位置し、14、15号土坑に隣接するものである。口径は小さく80~90cmで、底部は程垂直に掘られ円形をなす。深度は88cmで底部の標高は80cmとやゝ浅いが砂層を10cm程掘り込んでいる。

第28号土坑



出土遺物としては第71-3、4に示したものが總てで、3は土師器の甕口縁部と思われるもので器内面に横位の細かいカキ目が見られる。4は土師質の土鍤残欠で色調は白茶色である。

**第28号土坑（第65図）** F-5区に有り東側に260cm程の小溝に連なる。口径は180cm、底部130cmの方形をなし、深度は87cmでその標高は47cmである。西側にステップを持つ。

出土遺物は小量で第72-3、4に示したものその他に須恵器細片1点に過ぎない。3は須恵器の壺である。肩に耳を有するが細片のため推測の域を出ないが、三耳壺又は四耳壺であろう。外面に2本の縦を持ち、その間の産んだ帶状区域に波状紋が施される。色調は黒である。4は中世須恵器系陶器の摺鉢である。器内に8条一単位の摺目が見られ推定ではあるが米字状に施されたものであろう。特に口唇部の造りに特徴がある。推定口径は27cmである。

**第29号土坑（第66図）** E-6区に有り口径は180cm、底は方形で一边が90cmを計り、さらに中央部が掘り込まれている。最深度は95cmでその標高は45cmである。東側に湾曲した溝状造構に連結している。出土物として須恵器がある。

**第30号土坑（第67図）** C-3~4区にかけて位置し、東西双方に溝を

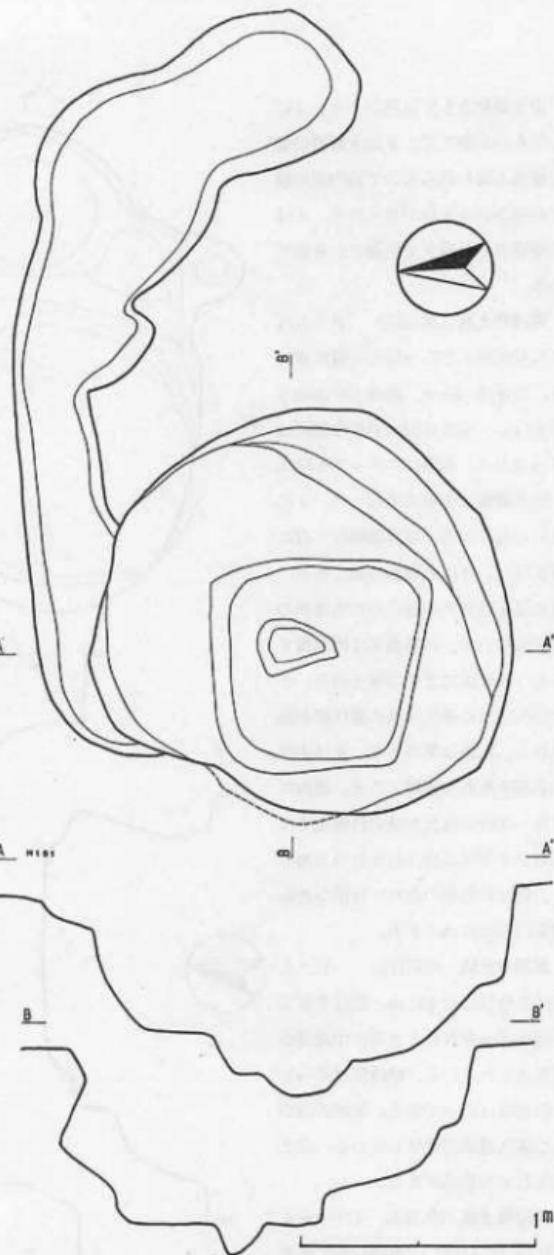
持つが関連は不明である。口径は140cmでは、垂直に掘込んでおり、深度は110cmでその標高は42cmである。北側に浅いステップ状の溝みを有する。坑内出土遺物として須恵器がある。

第31号、32号、33号土坑  
(第68図) 3基共E-2区に集中し、さらに溝によつて連結している。口径はそれぞれ150cm、170cm、170cmで、底部は33号がほぼ垂直であるが、その他は小さい。深度はそれぞれ85cm、85cm、90cmで、その標高は52cmと47cmになる。ステップは32号、33号に見られる。

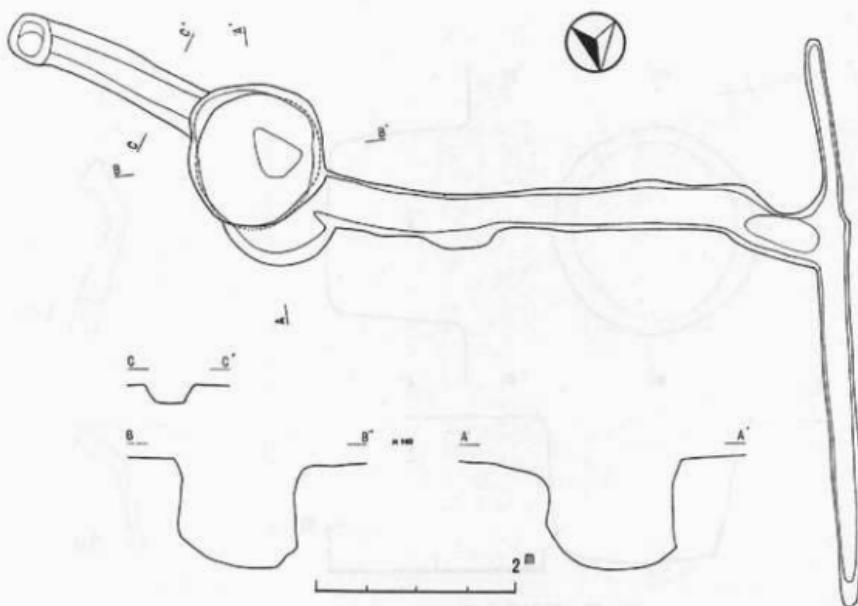
遺物は31号に木製品残欠がある。(第73-3、図版37-4)

第34号土坑 (第69図)  
G-11区に有り円筒形の土坑で口径95cm、底部80cm、深さ68cmでその標高は71cmを計る。出土遺物は無い。

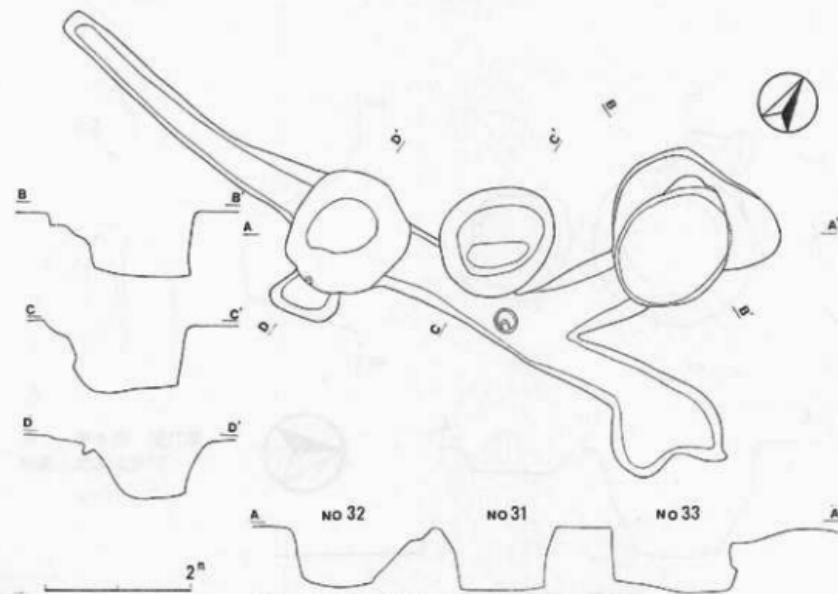
第35号土坑 (第70図)  
F-17区に有り口径160cm、底径65cm、深さ80cmを計り、底部の標高は59cmである。北東側にステップを有する。出土遺物はない。



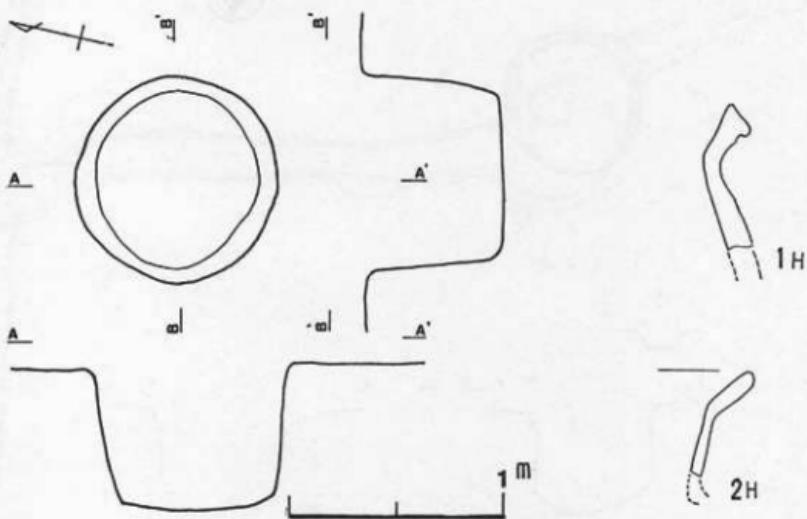
第66号 第29号土坑



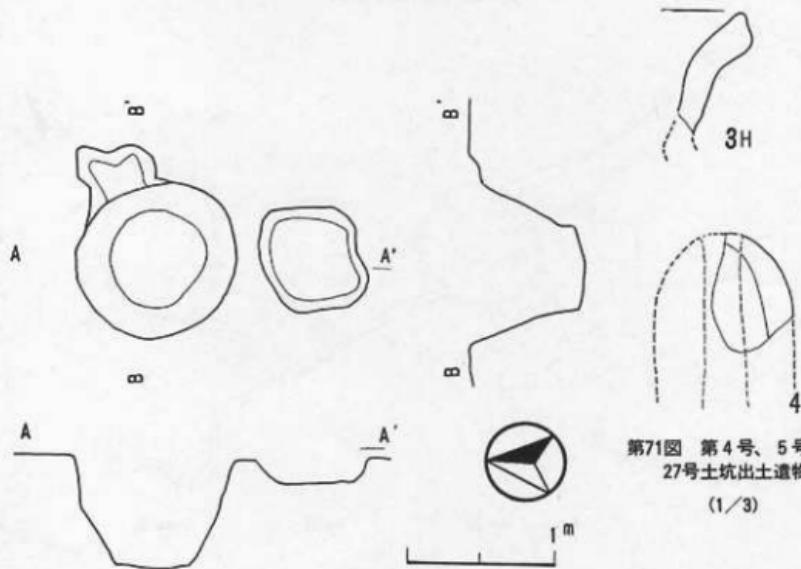
第67図 第30号土坑



第68図 第31、32号、33号土坑

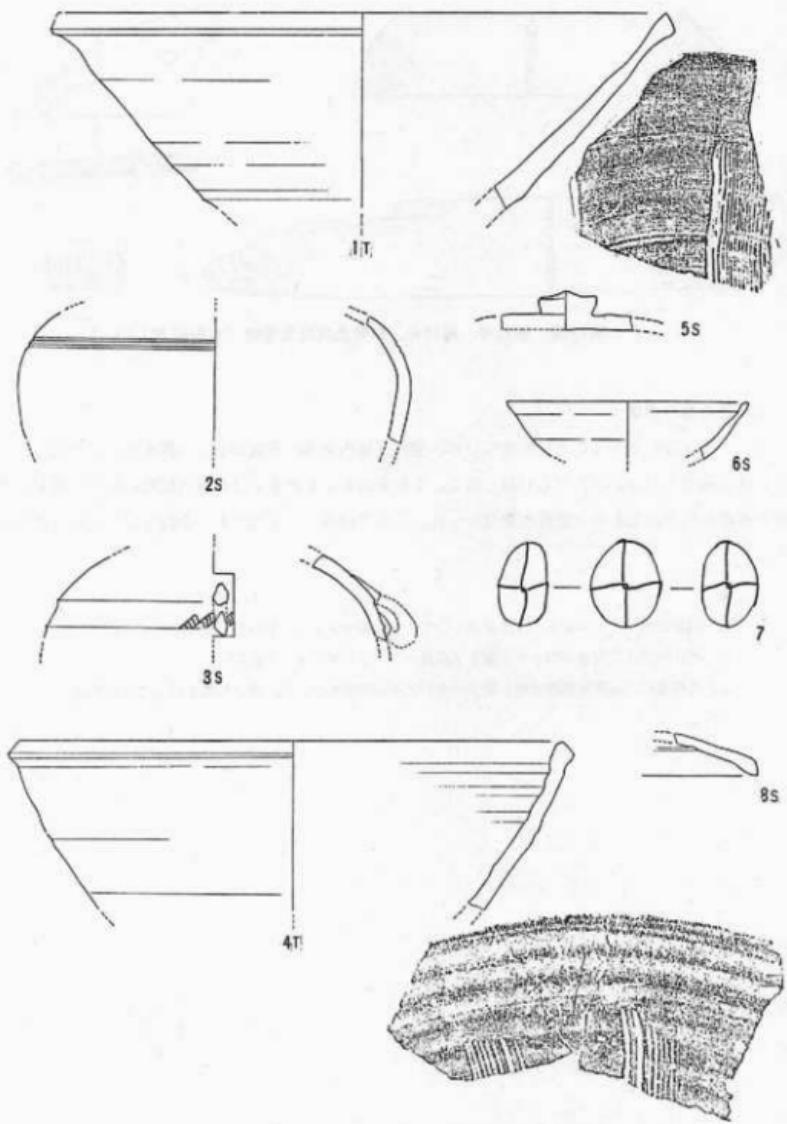


第69図 第34号土坑

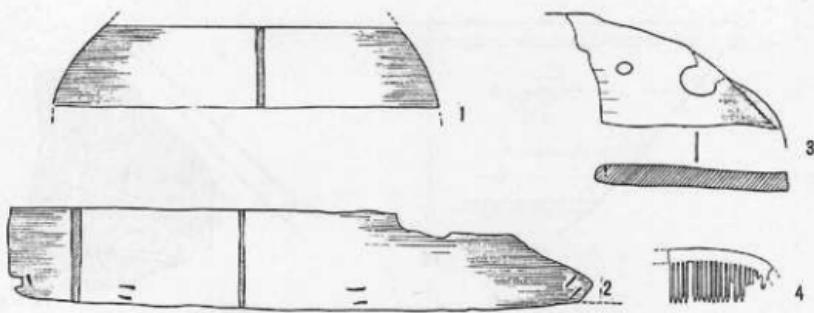


第71図 第4号、5号  
27号土坑出土遺物  
(1/3)

第70図 第35号土坑



第72図 第15号、第18号、20号、28号土坑出土遺物（1/3）



第73図 第15号、第16号、31号土坑出土遺物（木製品他）(1/3)

#### G) その他の遺構

改めて各々取り立てることは出来ないが、発掘区域内全面に多数のピット群があり、特にCDEF-15区以南のそれはおびただしい数となる。これらのピットの多くは高床式建物の柱穴と檻列の杭址等と考えられるのであるが把握出来なかった。ここでは第4～6図にその全貌を記して報告に変える。

#### 註

1. 酒井和男「アミニオとハマ小屋について」（民具マンスリー13-12）1981年
2. 酒井和男「新潟県下のサケ小屋」（民具マンスリー8-4）1975年
3. 曽根遺跡（北蒲原郡郡郷浦町）第3号井戸にその例があり、石、板、杉皮を持って井戸を封じている。

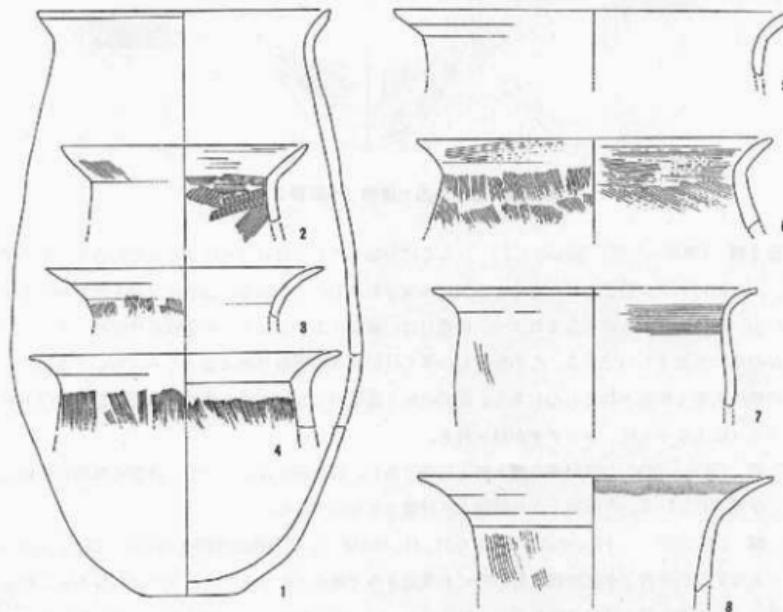
## 2) 遺構外出土の遺物

前項に於て遺構内の主たる遺物について報告を終えた。本項では遺構として記述しなかったピット群の出土遺物及び遺構外より検出した遺物について報告する。

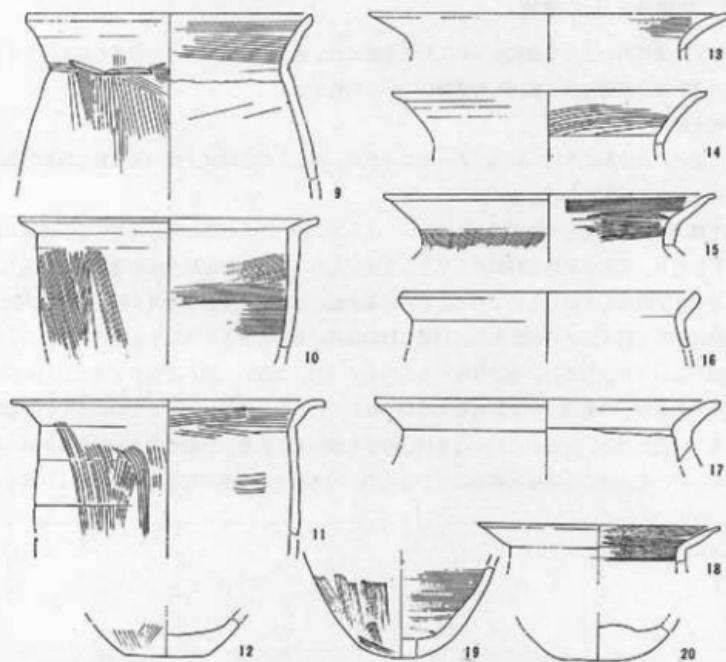
### 土師式土器

前項に記述した土師式土器も同様であったことだが、出土した土師式土器の大多数は壺形容器であり、わずかに鉢、壺形のものがある。

**壺形1類**（第74～77図、図版22、23-1） 1～25、27～29、41等に示したもので、1部に胴長のものも加わり、成形に於ける特徴として2、3上げられる。第1には粘土紐の巻上痕と指又は工具によるナデツケ痕をとどめることである。さらに器表面には縦位を主とするカキ目を施し、内面は横位又は斜状のカキ目又はナデ痕がある。口造りは口縁部において大きく外反するもの（3、9、14他）極端に開くもの（10、18等）、小さな反りをもつもの（21、23他）、殆んど反りを持たないもの（29）等と様々であるが、口唇部はいずれも変化をつけないで終るか、先細状に尖るものが多い。色調は、茶、薄茶、白茶である。なお8の外面は条線状叩きを磨消しており、28の外面も縦位のカキ目を磨消している。この他内面のみ黒色に磨かれているもの。内外面とも丹塗のもの（図版24-1）等がある。



第74図 遺構外出土遺物（土師器）(1/4)

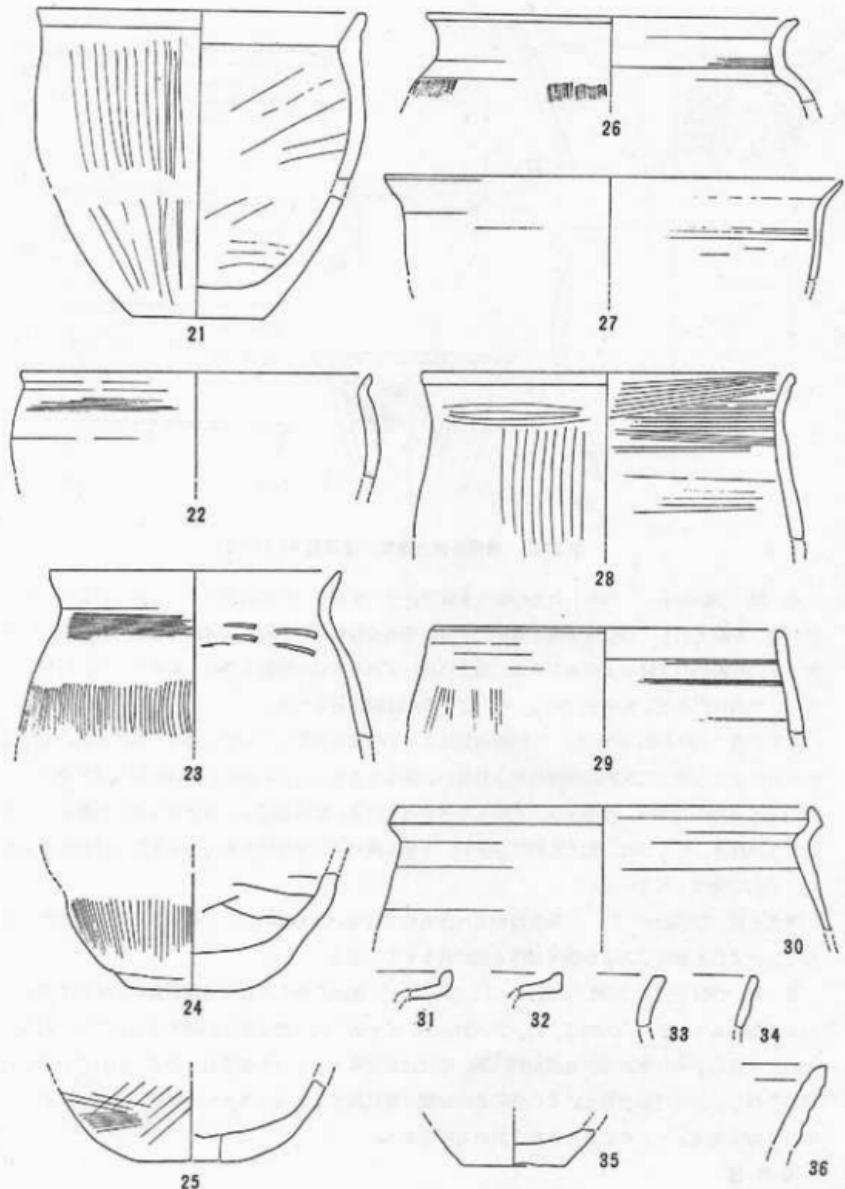


第75図 遺構外出土遺物（土器器2）(1/3)

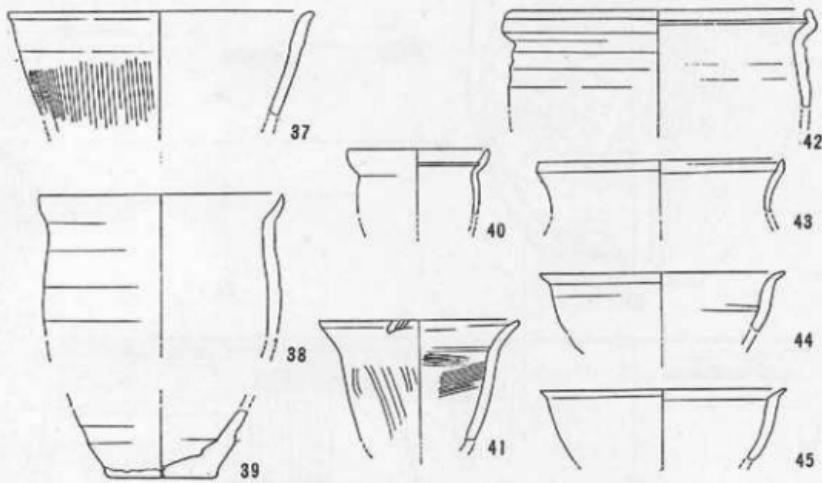
**壺形2類** (第76~79図、図版23-2) ここに分類したものはロクロにより成整形されたものである。二次的にロクロ整形されたものと一緒に水挽されたものとがある。器の全容を知り得るものはないが、胴長形態のものも含まれよう。口造りは口縁部において締てくの字状に外反し、さらに口唇部が内部に折返すものである。この折返しの多くは口唇部の面取りによるところのものであるが、42等の様に大きく折返されたものもある。尚40の如く面取りのないものもまれにある。器面には内外共にロクロによるカキ目、ヨコナデが見られる。

**壺類** (第76~26) 成形等は壺1類と同様であり、口縁部にはヨコナデ、肩部には継位の細いカキ目が施されている。今形態上から壺類より分離するものである。

**鉢類** (第77図) 小形のもののみであり37、41、45がある。前2者は外開きのもので継位のカキ目とナデを有するが後者2ヶは無紋で形態的にも湾曲ぎみで碗形とすべきであろうか。ちなみにこれらの法量についてその最大径は40は7.2cm、41は10cm、44、45は共に12cm、37は15.2cm程である。



第76図 遺構外出土遺物（土師器3）(1/3)



第77図 遺構外出土遺物（土師器4）(1/3)

**場類** (第80図) 図示したものが大多数でありいずれも細片に過ぎない。これらの器径は74、76の41cmを最大とし、75の30.6cmを最小とする。器形の特徴はいずれも口縁部において外反し、口唇部は1の外向の外は総て上向きである。胎土にはいずれも多量の砂粘を含み、特に75、77の砂粒は大きい。色調は白茶色、黄茶色である。今78に2条の沈線が見られる。

**坏形土器** (第81図、図版25) 回転糸切によって底部を切離した坏形土器の一類である。成形はロクロによる水挽で二次的調整痕は見られない。図示したもの6点の内82の他は口径及び器高共は々同一であり12~12.5cm、器高4cm、底形5.5~6cmを計る。82は器高3.5cmとやゝ低く形態も口縁部がやゝ外反ぎみにくびれ、胎土に砂粒が多い。1部は煤により黒味のものもあるが茶又は白茶色であり、高温で焼成されている。

**黑色土器** (図版24-2) 項を改めるべきものではないかも知れないが少量の黑色土器の出土を見た。いずれも細片であるが碗又は壺と思われるものである。

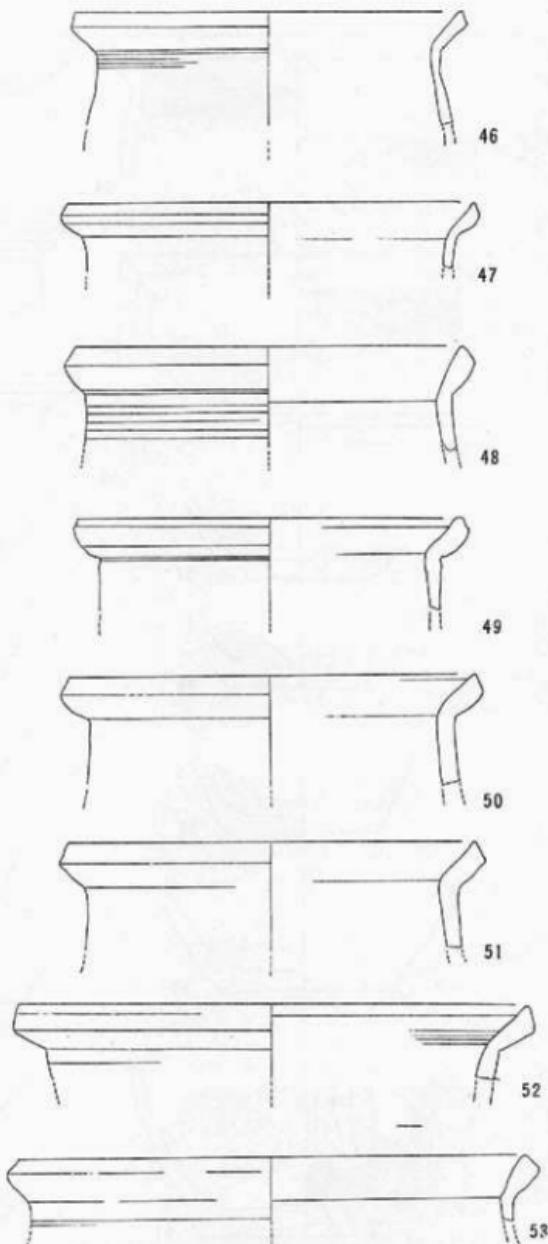
**底部** (第75~77、79図、図版23-3、24-3) 図示したものは主に壺形容器の底部と考えられるものである。これらの内12、19、20、24、25、57~59、61は壺1類に部類するものと思われる。丸底、平底の2通りがあるが丸底の19、20、25には底部にもカキ目が施されている。61は工具の荒い痕跡を残し、25は丹塗が残る。その他のものは壺2類に属するものと考えられ無紋である。これらの内71は特に肉薄でロクロによる水挽されたものである。

#### 須恵器

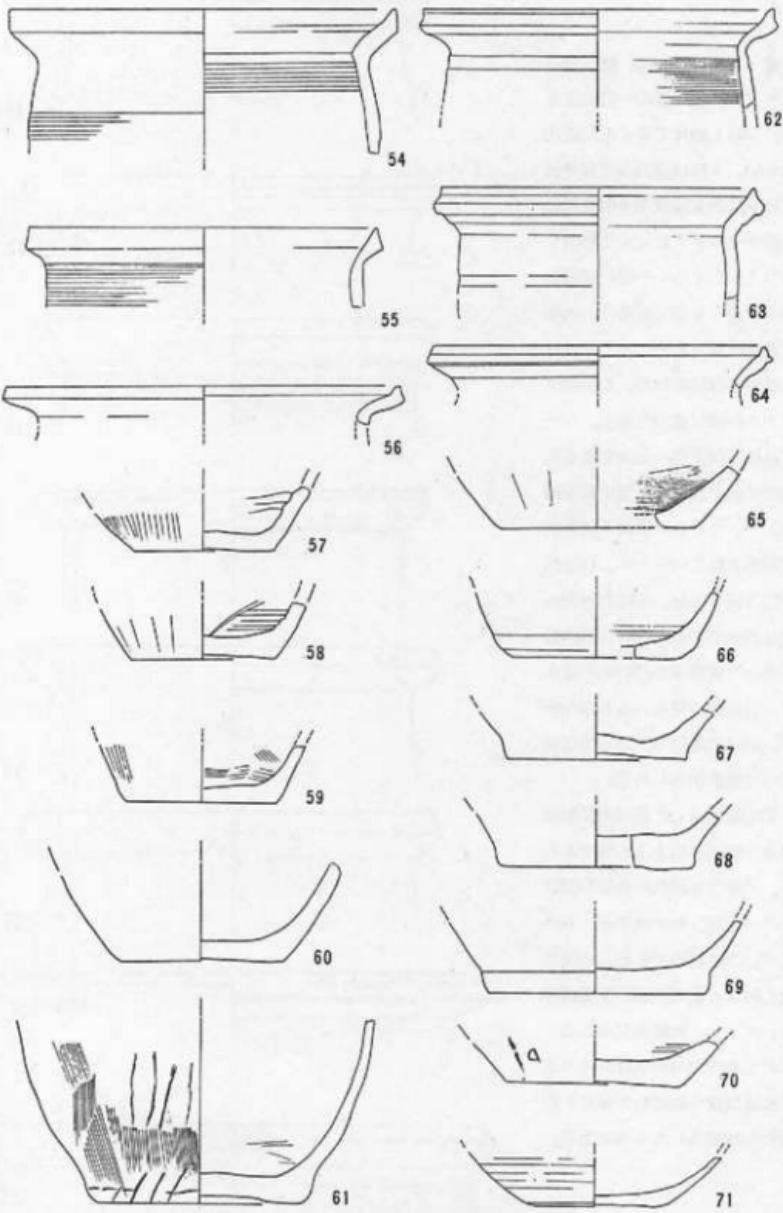
出土した器種は少なく、壺形、壺、碗、蓋形のものに限られる。

臺 A類((第82図、図版26～1～2) 広口臺の一群であるがいざれも細片で多くを記述出来ない。1は口径31cmで器外面には垂直の条線状叩き痕を施し、一部をヨコナデによって磨消している。おそらく一定の間隔に磨消されたものであろう。内面は青海波紋である。2、3はほど同様な器形である。この内2は1と同様な紋様である。4～6は推定口径45～50cmを計るものでそれぞれ口縁外部に段を持つ。5、6はこの段の下に齒状紋が施されている。8、13は推定口径18～20cm、10は25～30cm、12は30cmである。これらの内11を除いて焼成度が良いものばかりで自然釉の見られることが多い。尚11は器形の上から見てあるいは變形かもしれない。

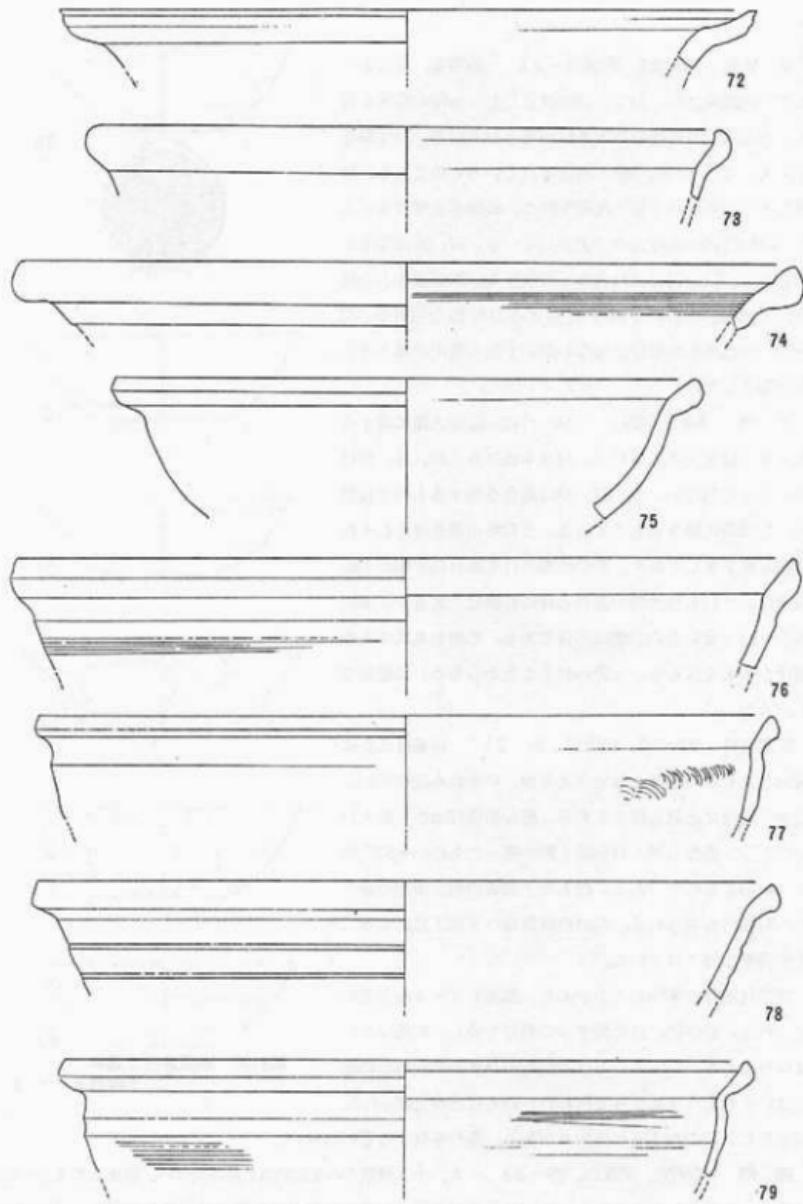
第83図に示した施紋の拓影は概臺A類に部類するものであろう。外面は条線状叩き及び叩目上のハケ目、格子状叩き、ヨコナデ、カキ目等であり、内面は同心円状の青海波紋、条線状叩き、カキメ、無紋が見られる。これらの内24の外面はヨコナデ上に波状紋が施されており、21の内面は剥落したものである。



第78図 遺構外出土遺物（土師器5）（1/3）



第79図 遺構外出土遺物（土師器 6）(1/3)



第80図 遺構外出土遺物（土師器7）（1/3）

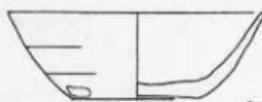
壺 B類 (第84図、図版26-3) 短頸壺、長頸壺である。短頸壺は26、31で、26は直立した2cm程の頸部を有し、内外両面共に横位のカキ目が施されている。31は頸部を欠失しているが短頸壺と推定されているものである。無紋であるが肩部に2筋の沈線を持つ。長頸壺と推定されるものは28で頸部の接合点で欠失している。27、30は頸部そのもので、27の口縁部は大きく外反する。30は胴体との接合点で剥離したものではゞ直立きみの形態を見せる。32~34、36は器形を推定出来ないがいずれも器肉の薄さ等からB類とした。

底 部 (第82、84図) 14~17は一応壺A類に属する底部又は腰部と考えられる。14は平底であるが、16、17は丸底かも知れない。29、37、38は高台を有するもので長頸壺、短頸壺に属するものである。これらの高台はそれぞれ特異な形態をしており、29の底部には毛彫りのX印がある。以上はいずれも自然釉が流れる程の好焼成であるが、35のみや、白っぽいもので焼成不良である。形態も丸底であり器径も大きくならないと思われることからあるいは壺類であろうか。

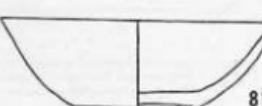
坏蓋及坏 (第85図、図版27、29-2) 坏蓋はここに図示したものの他40ヶ体分があるが、いずれも細片である。器形と同様に法量も様々である。最少器径12cmから最大18cmである。器形も39、41の如く肩が張ったものから53の様にナデ肩のものまである。紐も大小高低の他、頂部の盛上りの有無等が見られる。尚41の肩部はヘラ状工具による二次的調整が施されている。

坏類は器径に多少の大小があり、器高も3~4cmと差が見られる。総的には外開きみの器形を成し、肉薄なものばかりである。形成としては左回転のロクロで底部の切離しはいずれもヘラによって行われていることが上げられる。図示したものの他110ヶ体余りがある。高台を有するものは無い。

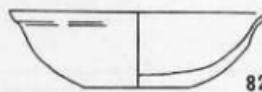
碗 類 (第86図、図版28、29-3) 大、小2種類からなるが出土量は少ない。図示したものの他小碗2、大碗3ヶ体分である。いずれも高台を持つが高台は様々な形態を成し比較的低い。坏に比べ



80



81



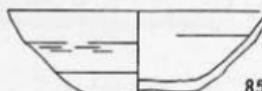
82



83

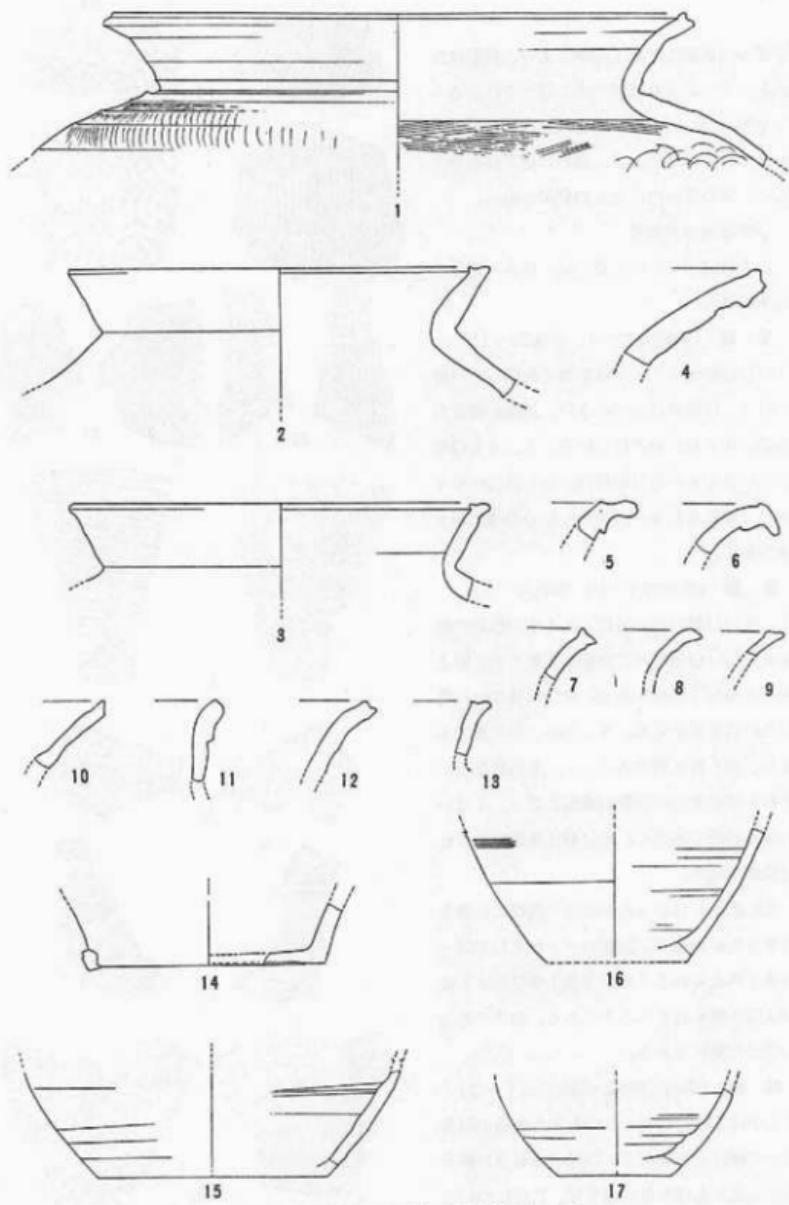


84



85

第81図 遺構外出土遺物  
(土師器8)(1/3)



第82図 造構外出土遺物（須恵器 1）（1/3）

て腰から底部にかけて肉厚であり、成形は左回転ロクロにより底部切離しはヘラによるものが多いが、60、62、69等は二次的調整が行われていて不明である。高台は總て付高台である。65の高台内には×の刻印がある。

#### 須恵器系中世陶器

出土数は少ないが、甕、壺、鉢と一通りの出土を見た。

#### 甕類（第87図1～4、図版30-1）

1は口径40cmでくの字状に強く折曲った口縁の持ち、口唇部は丸く小さい。外面に横位の条線状叩き紋が施されている。2、3も口唇部は同様の丸いものが頸部の反り具合にやゝ異なりが見られる。図示したものの他に26ヶ体がある。

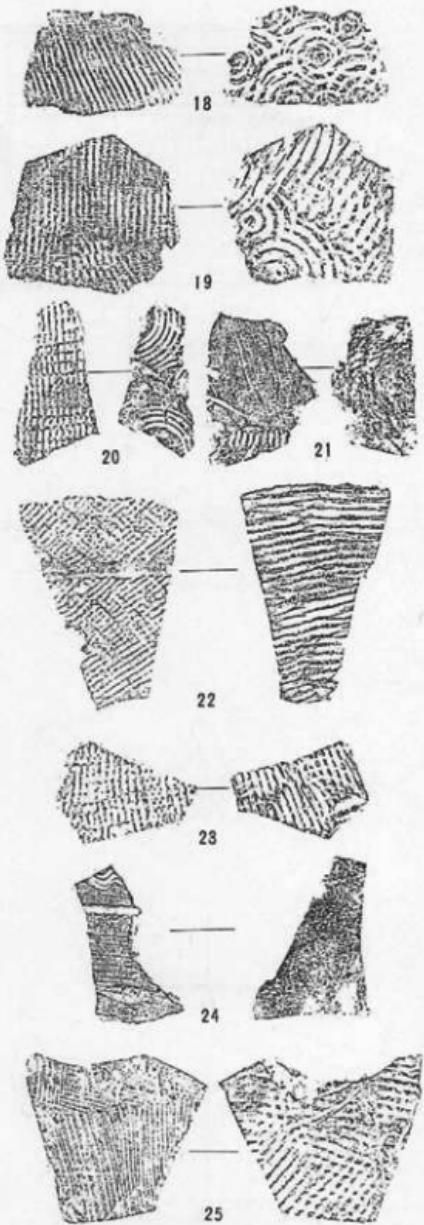
#### 壺類（第87図5～10、図版30-2）

5、6は口縁のみの破片である広口形態の壺であ。5は口径25cmで内側に毛影りの×印と5点の棒状工具痕がある。6は口径20cm、乳白色の自然釉を見る。8、10は小形の壺であるが口造り等不明である。7、9の底部はいずれも平底で広口形態の壺底と思う。7はいわゆる砂底であるし、9は静止糸切による柱目状痕が残る。

次に図示しなかったが器面の施紋に特徴を有するものがある。図版31-3がそれで同一個体と考えられる3片が3条1単位とする条線状叩き紋を有することである。細片であるが特異な施紋である。

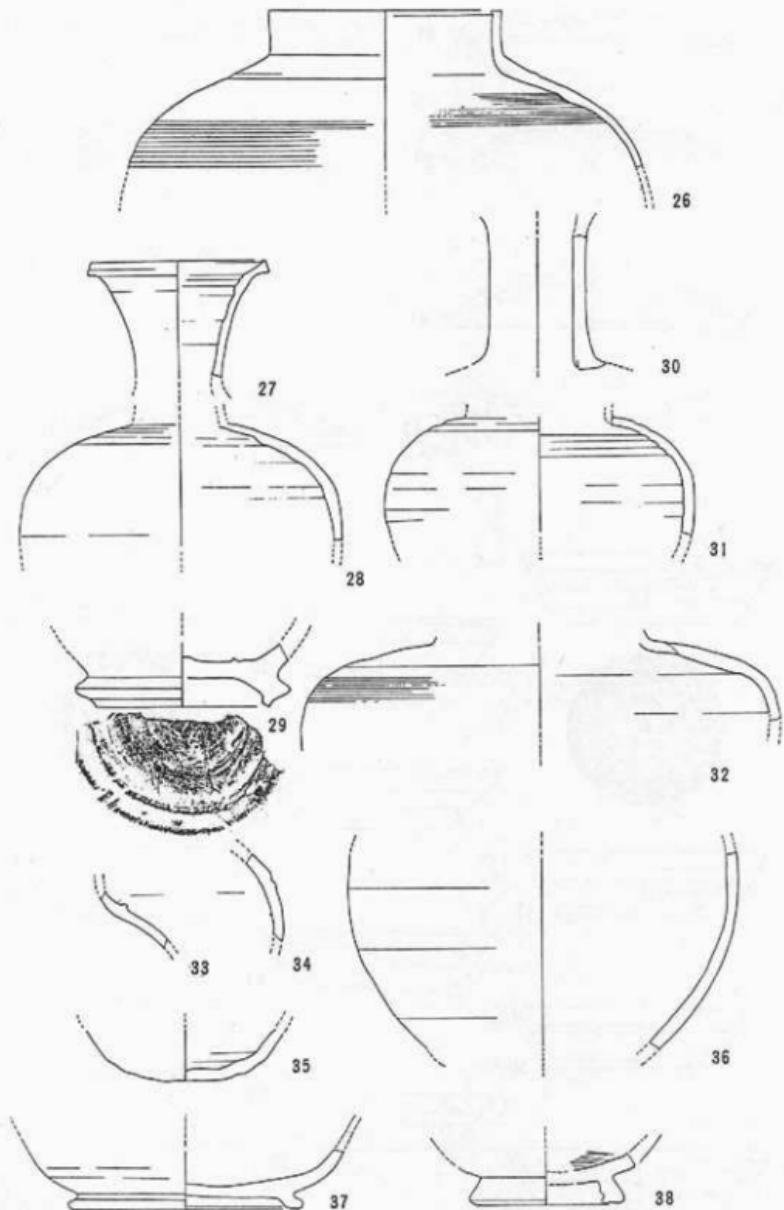
#### 鉢類（第88、89図、図版31-1～2）

ごく小片で播目の見えないものもあるが24を除いて摺鉢と見られる。口径又は底径の解るものを見ても様々な法量を見、口径について

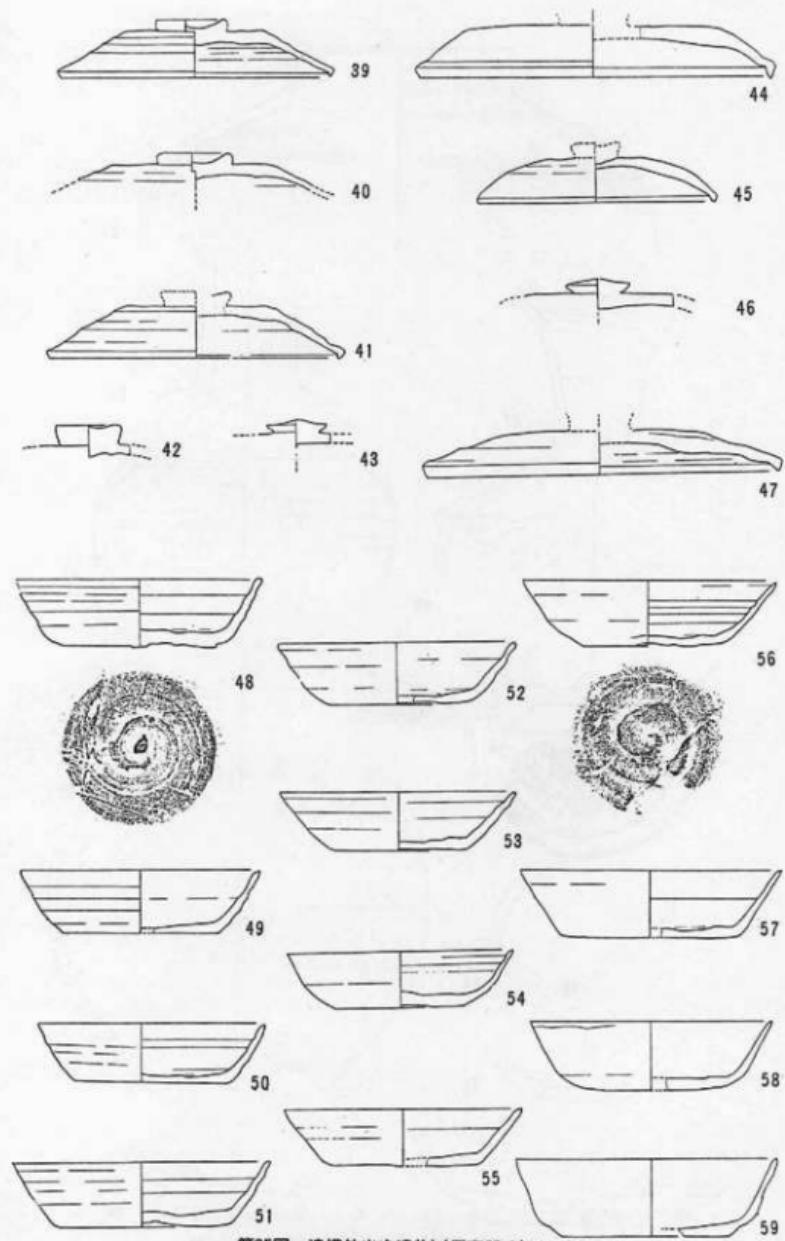


第83図 遺構外出土遺物（須恵器2）

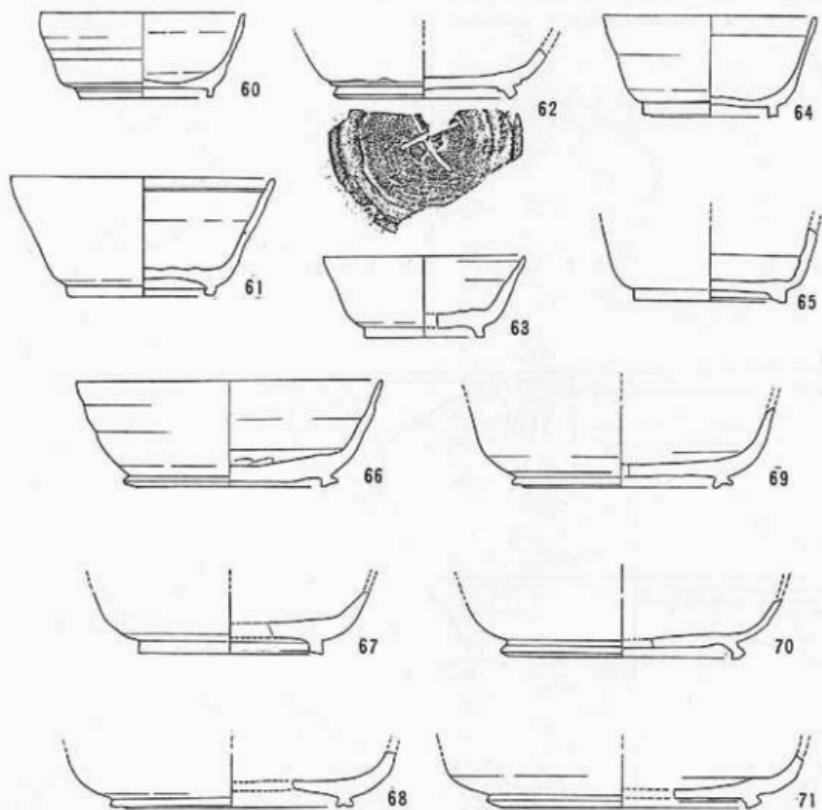
(1/3)



第84図 遺構出土遺物（須恵器 3）(1/3)

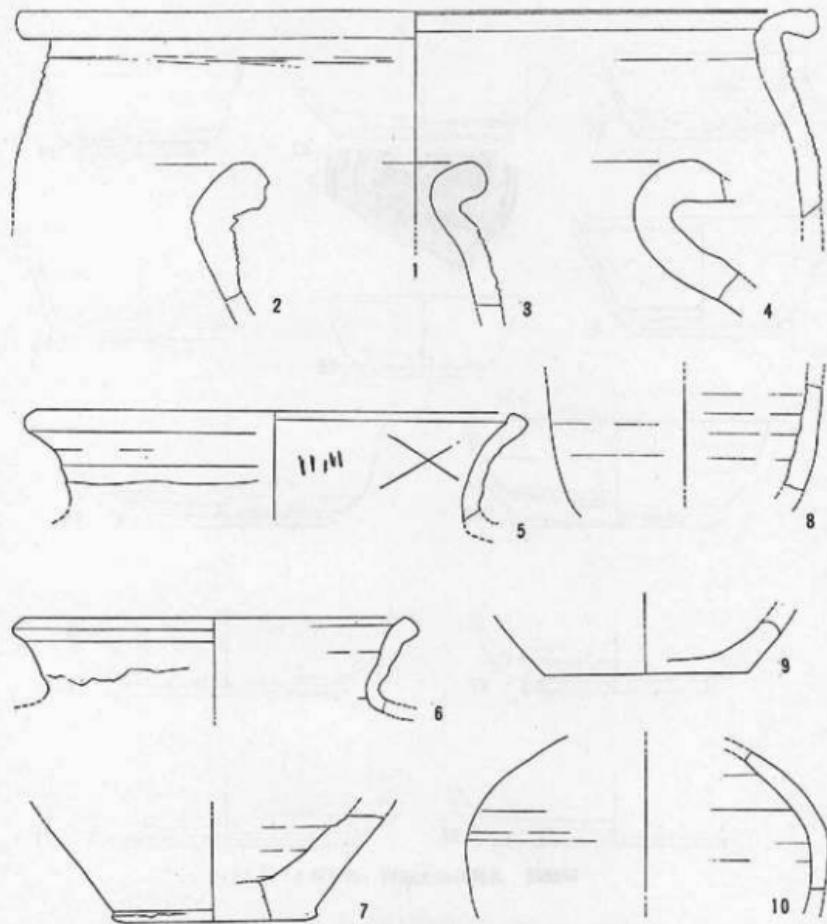


第85図 造構外出土遺物(須恵器4) (1/3)



第86図 遺構外出土遺物（須恵器5）(1/3)

は26~31cmである。口径を図示していないものの内32、37共推定30cmである。器形の特色として口造りの形態については、口唇部の外向きな21、14、33、13、12、24、丸味をおびる11、23、はゞ水平な22、25、28~32、36、37等と分けることが出来る。次に擗目については8~9条を1単位とするもの20、11があり多くは10条1単位とし、中には18の16条、38の17条1単位が見られ、施方も米字状の8条のものと思われるもの11、12、16、17、20等から12条と推定する15、26、27、さらに16条と思われる38等がある。尚19の拓影は一見上下が逆になった如く見えるが工具が無意識に接触したものであろう。又14、22、37はごく磨耗によって擗目の消滅しかけたものである。

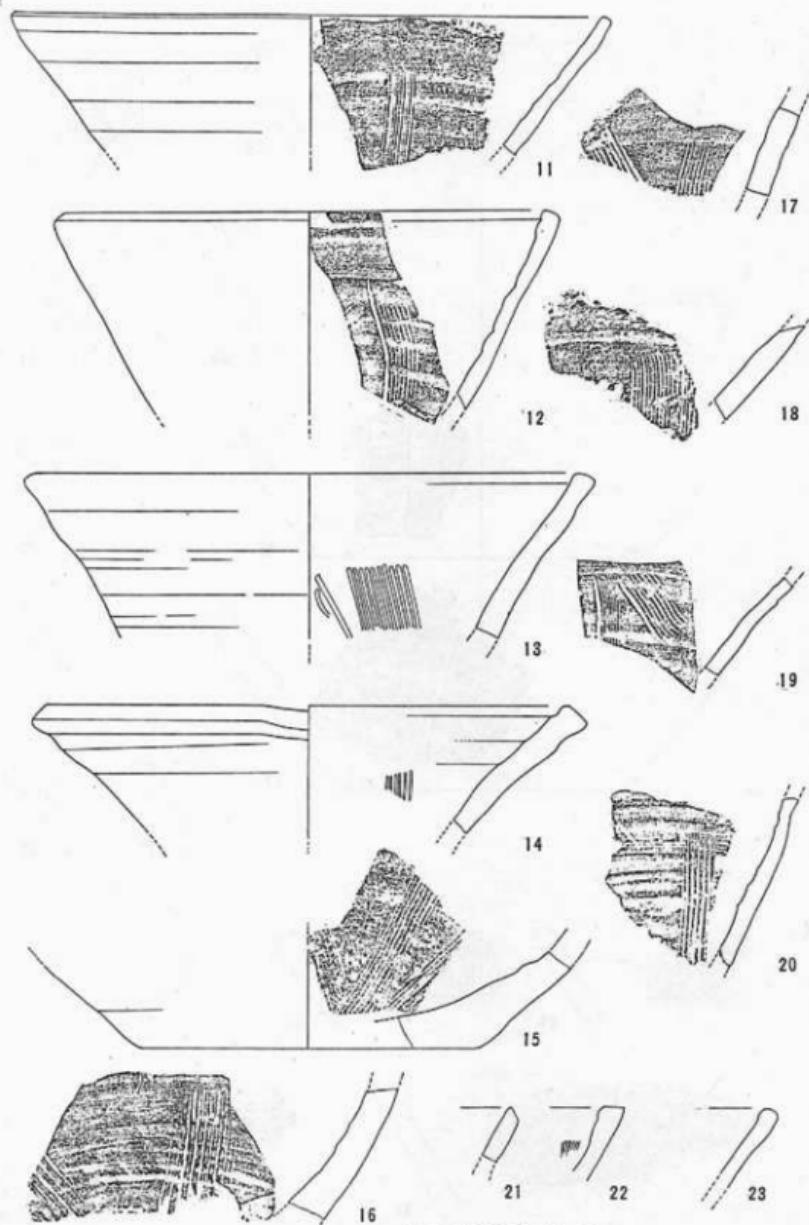


第87図 遺構外出土遺物（中世陶器1）(1/3)

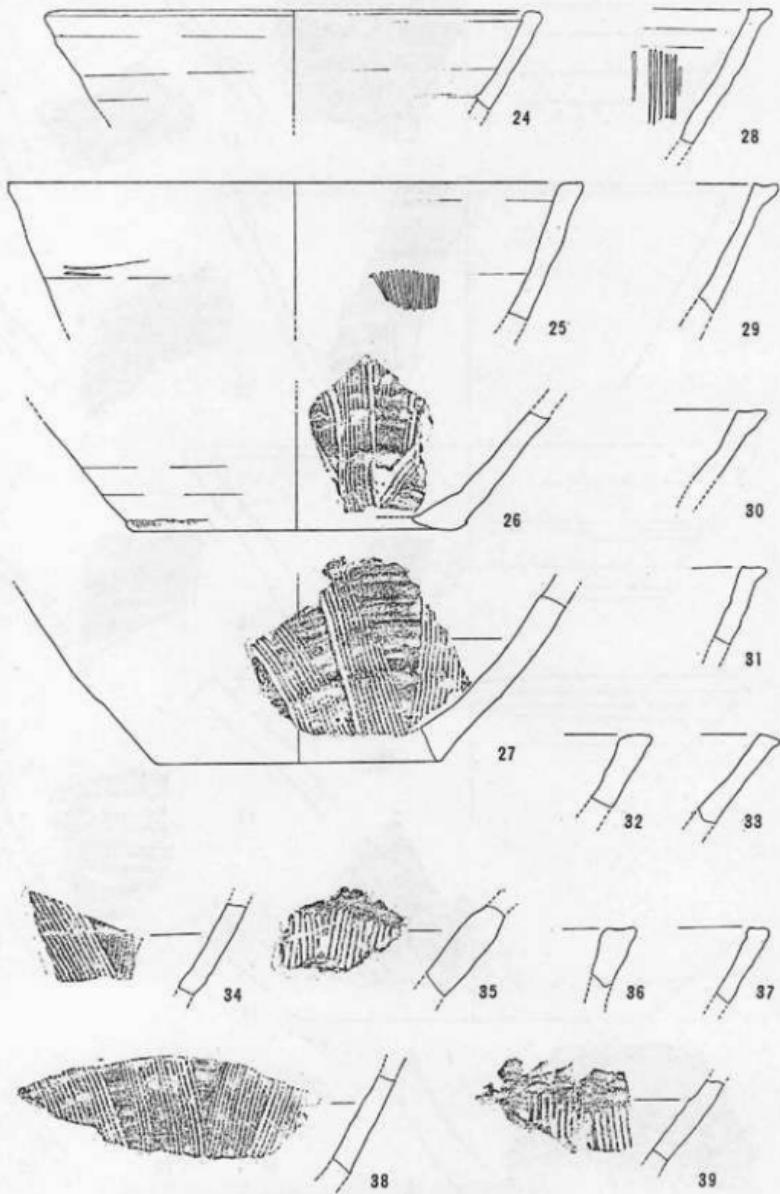
#### その他の陶器

**染付** (図版33-1上段中) 2点の出土である。細片であるが外面に植物文が描かれている。おそらく明窯であろうか。図版33-1の上段左のものは不明であり今後の調査を待ちたい。その他はいわゆるくらわんかと言えるもので、内外面共横走線、弧状の平行線が配されている。呉須の色調は淡い。

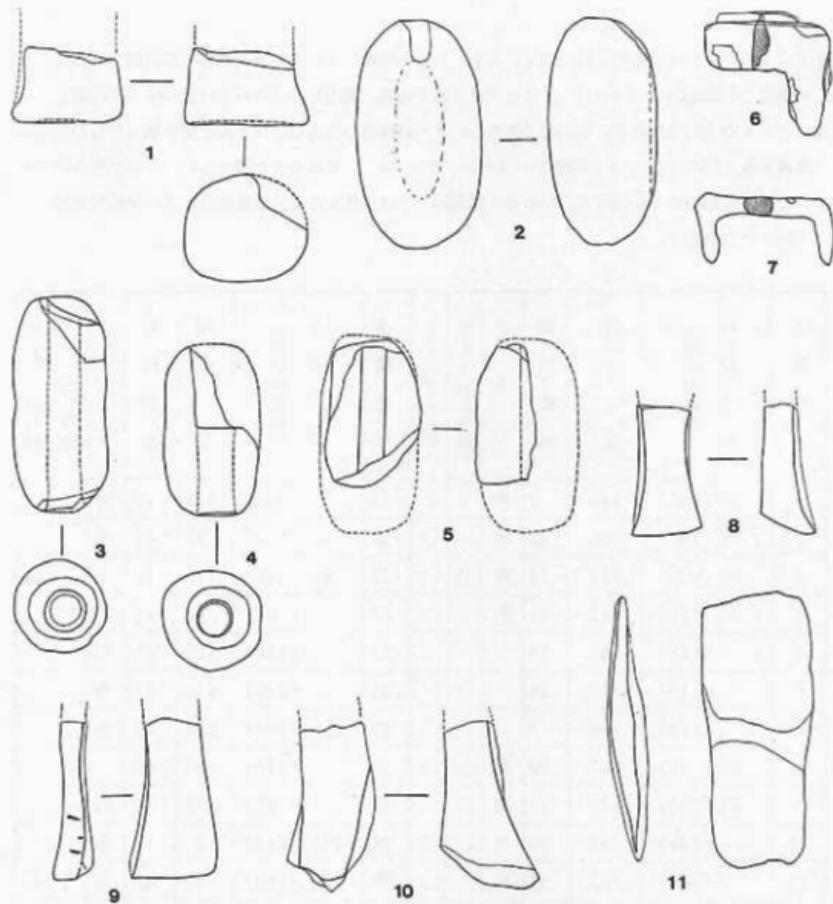
**黒釉陶** (図版33-2) 図版左は底径10cm弱の糸切底で器形は縦長の器である胴部以上に厚目の黒釉がかけられている。右上は高台を有しやゝ茶味をおびた釉が施され、右下のものは分厚いけずり



第88図 遺構外出土遺物（中世陶器2）（1/3）



第89図 遺構外出土遺物（中世陶器3）(1/3)



第90図 遺構外出土遺物（土製品、鉄器、磁石）（1／3）

高台か見られ無釉である。3者共後世の流入物の可能性がある。

#### その他の遺物

その他の遺物として土製品、石製品、金属製品が見られる。

**土製品**（第90図-1 3～5、図版34-1、6） 1は土師質の円形状のものの残欠品で考えられることは支脚（カマド内で五徳の役目をする用具）である。3、4、5は土師質の土錘で、3は茶色で胎土が高密度で重い（図版34-4右）。4は白茶色で軽い感じのものである（同左）。5は細片である。図版34-6は泥めんこ（オハジキ）で、右下の大きいもので直径2.5cm、厚さ0.35cm、右上の

小さなもので 1.6 cm である。花、数字、カナ、社等が浮彫りされている。近世の流入物であろう。

石製品 (第90図2、8~11) 2はタタキ石である。橢円形の自然石で片面の中央を研磨し、一端にタタキの使用痕がある。安山岩であろう。8~11は磁石である。ほとんど使い減ったものである。

金属製品 (第90図6、7、図版34-4~5、33-3) 6はカマと考えられ、7は小形の鎌である。この他釘類の他不明品等 6点がある。図版33-3は古銭である。造存度はわるいが昭聖元宝 (1094~) である。

遺構番号	井側の径 (掘込の直径)	深度	底部標高	ブラ ン	マナコの有無	ステップの有無	遺構番号	井側の径 (掘込の直径)	深度	底部標高	ブラ ン	マナコの有無	ステップの有無
1	75 (155)	140	- 3	角		○	19	(130)	115	30	円		
2	60 (160)	165	- 32	角		○	20	90 (150)	95	42	角		○
3	65 (130)	145	- 14	角	○	○	21	80 (210)	110	25		○	○
4	80 (135)	117	21	角		○	22	( 95)	90	52	円		
5	(145)	130	19				23	(110)	107	27	円		
6	(116)	170	28			○	24	(260)	140	(31)	角		○
7	(118)	130	3			○	25	65 (190)	115	14	角	○	
8	60 ( 98)	105	32	角		○	26	(210)	105	43		○	○
9	75 (200)	110	48	角	○		27	( 85)	88	80	円	○	
10	(125)	95	55	角	○	○	28	(130)(180)	87	47	角		○
11	(165)	105	31	角		○	29	90 (180)	90	46	角	○	○
12	(160)	75	69		○	○	30	(140)	110	42		○	○
13	70 (195)	90	47	角	○		31	(150)	85	41		○	
14	70 (145)	127	21	角		○	32	(170)	85	45		○	○
15	60 (125)	125	19	角	○		33	(170)	90	37			○
16	(50)(140)	120	32	円			34	95	65	71	円		
17	(240)	203	- 29	角	○	○	35	( 65) 160	80	59			○
18	80 (180)	126	21	角	○		単位は cm						

井戸遺構計測表

## 4. ま と め

### 1) 遺構遺物の特徴と年代

前項に記述した多くの遺構と遺物についてのまとめは簡単に記述出来るものではない。遺構内、遺構外出土の遺物の年代を一口に云えば9世紀から14~15世紀迄におよび、さらに稀薄ではあったが17世紀に迄も至らしめる。これら遺物は中間で跡絶えることなく継続するかに見える。したがって当然のことであるが検出された多くの遺構、即ち住居址1、小形建物址6、火床2、溝5、二重周溝遺構1、井戸及び類似遺構35基及び無数のピット群等もそれぞれの時期に営まれたものである。ここでは遺物の年代を整理することによって遺構の序列を考えて行きたい。

土師式土器についてはその特徴を大きく3分類することが出来る。その第1類は粘土紐巻上げ成形によるもので器面には概ね綫位のカキ目を施し、口造りは口縁の方向に向ってそのまま延び、一部にはある程度の厚味を持って終るものと、先細るものとで口唇部に変化をつけないものである。壺1類と鉢類がこれに当る。第2類はロクロによる水挽、又は調整痕を残し器面には概ね横位のカキ目及びヨコナデが見られ、口造りは先端が面取りされるものである。即ち外反する口縁を外側からおさえることによって口唇部を上方へつまみ出したものである。壺類の半数と壠類の多くがこれに当る。第3類はロクロによる水挽き手法により成形され、さらに回転糸切によって底部を切り離した坏頬である。第81図環形土器と報告したものと火床遺構出土のものがある。次にこれらの内第1類は、土師器本来の成形及び焼成をしたがえて来たものであるし、第2類はむしろ須恵器の成形に通じるものであり、須恵器の還元炎焼成に対し、その用途によって酸化炎焼成をなしたものにこの同類を多く見るところである。<sup>(註1)</sup> 第3類は筆者等はこれまで第2類と共に土師質土器として來たものであるがここではあえて土師器として報告することにした。これは須恵器より転化したものと見られ器形の上では前記第2類のそれが須恵器の形態を越えるものではないが、これらは器形の上でも明らかに次期に来る中世陶器の先駆と考えられるものであろう。今第1、2類について類似するものの報告例を県内に求める時、や、困難を生ずる。最も近似するものに茶院遺跡があるがいま一つ特徴を異にしているかに思える。<sup>(註2)</sup> 又曾根遺跡にも小量の類似例はあるが、把握しかねるし、実見の機会を得ない。こゝでは、北陸、関東、東北における編年をもとにその時期は晩期Ⅱ、即ち9世紀後半から10世紀とする。然しながら筆者の私見を持ってするならば、第2類のものは11世紀以降も存続したかに思える。第3類についての県内に於る報告例は貧しい筆者の調査ではあまり知見しないが、南中五輪峠遺跡、飯田五輪峠遺跡に於てあかやき土器として報告されているもの内の一部、及び水原城館址、横峯B遺跡に於て土師式土器として報告したもの、又近年では曾根遺跡であかやき土器として見られるものに比類する。この種に対する編年として南中五輪峠遺跡ではその土器の性格を明らかに指摘しながらも8世紀後半~9世紀前半とし、曾根遺跡では具体的に表現されていないが『晩期Ⅰ、Ⅱの過渡期』と考えて居ら

れる様だ。横峯B遺跡では10世紀とし、水原城館址では前述第2類同様中世陶器と共にすることを指摘した。吉岡廉暢氏の御指導によれば、北陸の編年観をそのまま適用出来ないしながらも、11世紀代に降ることないと云われ、一方東北に於ては多賀城跡遺跡、<sup>(註11)</sup> 多賀城廃寺遺跡では11世紀以降、又は11世紀～12世紀頃と報告されている。越後に於けるこの土器の年代を考える時、主觀として後者に追随したいが、いましばらくの時を得たい。

須恵器については近年各遺跡からの報告が多くなっているがこれらと比較検討する視点を筆者はつかみ得ない。又坏類を除けば器形を推定するにとどまる細片のみでとらえどころがない。県内に於ける生産窯址を集計すると36ヶ所 120基余の窯址の内5基程が8世紀とみられ他の方は9～10世紀で一部11世紀を降るものも報告されている。当遺跡出土のものゝ内わずかに2点を除いては時代をきめる要素を持たない故、ここでは一応9世紀後半から11世紀まで幅を持って考えたい。これらの内、26、30等はやゝ古手に位置するものであろうか。72-3、24-2はこれらよりかなり遅い年代即ち7～8世紀と考えられる要素があるが、あまりにもかけ離れすぎる。

中世陶器は珠洲焼に類似している須恵器系陶器の他瀬戸系の天目及び舶載磁器がある。須恵器系陶器は、墳墓、経塚等から好資料が知られて居るし城館址等からもまとまった報告がある。それをふまえてなお北陸の編年によれば、13世紀中葉を中心とするものが多く一部に14世紀に至るものもあると考えたい。2号溝出土の天目碗は15～16世紀のものと思われ、青磁碗は1号溝出土の2ヶは14世紀、4号溝出土のものは15～16世紀、1号井戸出土の碗は15世紀の所産であろう。

1号溝出土のカワラケ2点(22-13、14)は水原城館址で大量の出土例がある。14世紀後半以降のものと考えられている。

今これらの土器、陶磁器の総出土数は土師式土器1類4,769、同2、3類451、須恵器892、中世陶磁器178片となる。ついでながら土製品13、木器354点がある。

次に造構についての時期は遺物の出土状況を考慮して次の様になろう。1号住居跡は土師器須恵器より多量の中世陶器の出土を見るが後者の出土状態は堅穴の覆土中によるもので当造構は10世紀頃であろう。

6基の小形堅穴より出土したものは1号の土師式土器、2号の土師式土器と須恵器のみで3号以下には出土品を見なかったが、一応同時期と考えてさしつかえないと思うし、土師式土器はいずれも細片であることから須恵器の時期と考えられる。

2基の火床はまったく異った遺物を見せた。一方は土師式土器3類とした完形品が多く、他方は同類と須恵器、中世陶器が共伴する。これらが廃棄後の流入物だとしても2基の操業時期を引離すか、あるいは土師器の県内での通説時期を変えるかのどちらかである。前述した土師器3類についての時期について時間を得たいと述べた原因の一つでもある。

溝造構の内出土した遺物の年代を追うかぎり1号溝ではその下流につながるB・Tとした排水路及びA・Tとした本流と推定される造構は9世紀から14世紀のカワラケ迄の出土を見、長期間に亘る小

川であったことが知られ特に1号溝とした人工の水路の出土物は14世紀代の青磁碗1点のみである。さらに2号溝も流入物と考えられる須恵器片2点はあるが天目碗の出土を見、又4号溝も破片ではあるが青磁碗の出土を見た。これらのことから1～4号溝は共に中世期の経済的要素を多分に含んだ運河と思える。5号溝については前項で記した。二重周溝造構については今のところその性格も時期も全く不明である。

井戸及び井戸類似造構についてこれまで井戸側又は横棟等の痕跡を残すものを井戸造構とし、その他のものを土坑として報告した。然しながらこれら土坑も井戸でないと云いきれるものは皆無であり、その多くは底辺が方形で、眼としての中央部に掘込等が見られむしろ井戸の要素がより積極的なものであることと板井については何々型井側と云う用語を用いたことを断っておく、前項で報告の通り35基の井戸の内井戸側等の痕跡を残すものは1～4、16、17、24、25と少ないが、他の殆んどは施設が消滅したものと見られる。これらは平面的に見て殆んどが方形となる痕跡を残すが、19、23、27は円形と思われる。次に内部構造から見て3通りの型式に分けることが出来る。その1は方形隅柱横棟型井側であり1、4、17、25号がそれに当る。第2は方形横棟型井側であり縦板の井側は第1のものと同じであるが構造がやゝ単純なものである。2、3号がこれに該当する。第3は円形曲物型井側で曲物を積重ねる方式である。16号がこの方式と考えられる。今内部施設を失ったもの多くは方形の底辺を有することから第1、第2の形式と考えられるし、前述した19、23、27号等が第3の方式又はこれに類似する構造を持ったものであろう。これらの形式と時代関係は出土遺物の上から見て明確に分けることは出来ないが、ある程度の推定は出来る。16号を代表とする円形の井側を有するものの内遺物の出土を見たのは27号のみであり、多くを語れないが9～10世紀頃の土師器がある。第2形式では2号井戸の10～11世紀と推定する土師器と須恵器が出土している。第1形式の内1及び17号では中世陶器を主とし13～15世紀の遺物であるが25号からは10世紀を主とする遺物のみで、少なくとも12世紀を降る物は皆無であった。これら井戸造構35基の内9基を除くものにはその造構上層部が灰で覆われていた。この灰がいかなる理由によるかは不明であるが、使用廃止時の祭祀によるものと考えられるが、なお検討を残す。尚井戸上層の灰の堆積例については杉之森遺跡にその報告を見る。

## 2) 遺跡の性格について

水郷の名で知られた底湿地亀田郷における遺跡として当然考えられる宿命的な要素である冠水及び頻度に及ぶ耕地整理等で造構、遺物の保存度の良好さを求めるることは望めないことと考えていたが、一括遺物の出土こそ少なかったが多くの造構が比較的良好な姿を持って確認された。前述したことではあるが遺跡の推定面積約12万m<sup>2</sup>の内、調査が出来たのは3.4%の4,100m<sup>2</sup>にすぎない。検出した造構は住居性を帯びた堅穴、ピット群、火床造構に見られる産業性、経済的要素を考える小運河、そして多数の井戸の集中性は何を語るのであろうか。出土遺物はその殆んどが煮沸、供善と云う生活用器である。又銭貨の出土等からしても単なる農村集落とは考えられない。舶載磁器等から見ても高度な

生活が営まれていたことは窺われよう。

古代、中世に於ける大規模な集落は、城下町、門前町、港町等が考えられるが県内に於いてその性格を適確にされているものは少なく、近年では郡衙や国衙に匹敵するものが報告され、古くは居館址等が主であった。当調査によって遺跡の性格を把握出来るまでには、至らなかった。

遺跡所在地の旧地名は『城山』である。南に『日水』西に『手代山』の地名がある。そして城山地内の小字名には「城所」「中ノ山」「荒木前」「荒木浦」がある。今古書によれば「同郡(中蒲原郡)会津莊城所手代山に古城跡あり、弧主せし小山の頂上凡二千坪平坦にて井臺空塚の痕跡に見ゆ、元亨年中(1321~1322)國の守護職北条家に於て蒲原沖日水手代山に柵を構ふと古書に見ゆるは此處なるべし、近辺に日水の地名もあり永祿年中(1558~1559)より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。天正年中(1573)主家遺跡争へのをり景虎に属せしを以て景勝方に攻られ一族郎等を隨へ北蒲原郡五頭山の山入村杉地方の民間に入り土地の開墾に従事す。為久没後その靈を祀りしものを荒木堂と名づけ今尚は村杉村の入口にあり。」と記されている。<sup>(註1)</sup> 尚遺跡内の西寄りには荒木堂と呼<sup>(註2)</sup>ばれている熊野神社がある。遺跡を含めた一帯には、少なくとも中世末期には城館跡が存在していたことは事実であろう。中ノ山遺跡は此の頃迄の6~700年の長い営みを持った遺跡であった。

この調査はかなりの時間的制限の下に於いて行われたものであった。より広範囲の調査が出来得なかったことを遺憾に思うものである。然しながら、現地調査をはじめ、整理、研究等本書発刊に至るまでの全作業を町民の皆さん的手で行ったと云うことは大きな喜びである。物心両面に渡る御援助を賜った亀田町農業協同組合、亀田町教育委員会の方々に記して謝意を示す次第である。

昭和57年12月10日稿了

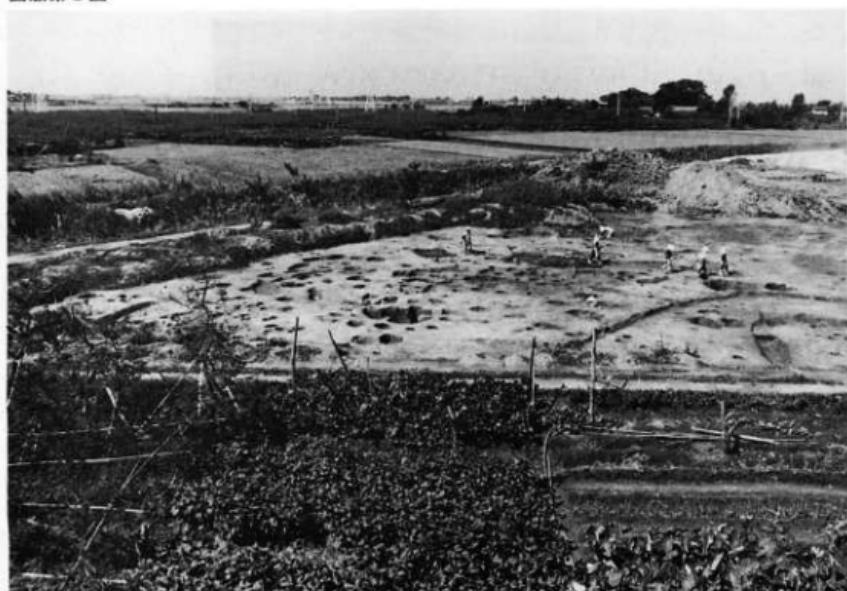
## 註

- 筆者等のこれまでの須恵器址の調査及踏査によって考えられることである。例えば猪沢2号窯址、貝屋窯址、猪沢及び清見寺窯址群、淹沢地内の窯址群。
- 近年県内でも「あかやき土器」と称される様であり、「須恵器系土器」「土師質土器」等と用語の混亂を見る。
- 本間信昭「茶院遺跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第5 1976年)
- 家田順一郎「曾根遺跡Ⅰ・Ⅱ」(逸浦町文化財報告三・四 1981年、1982年)
- 杉原莊介、大塚初重編「土師式土器集成本編4」 1974年
- 筆者等の行った水原城館址の調査に於いて中世陶器と共に伴した例がある。
- 千葉英一「南中五輪山遺跡」(下田村文化財調査報告第7) 1977年

8. 金子拓男「飯田五輪跡遺跡」（7に同じ）
9. 川上貞雄「水原城跡址及び水原代官所址発掘調査報告書」（水原町文化財調査報告6）1977年
10. 川上貞雄、石川日出志「横峯A遺跡・横峯B遺跡」（安田町文化財調査報告5）1981年
11. 氏家和典他「多賀城跡」（宮城県多賀城跡調査研究所年報）1976年度他
12. 伊東信雄他「多賀城廃寺跡」（多賀城跡調査報告1）1970年
13. 川上貞雄「越後の古代、中世窯」（日本やきもの集成2 所収）参照
14. 高堀勝喜他編集「珠洲法住寺第3号窯」（石川県教育委員会他）1977年  
吉岡康暢、平田天秋「珠洲古窯跡」（石川県珠洲市史第1巻）1976年 所収
15. 昭和47年7月山本博氏は「井戸の研究」によって井戸構造上の各部の名称についての学術用語の統一を提唱された。即ち地上施設を井桁、地下施設を井筒と称することに同意するものだが、ここでは用いなれた在地の用語を使用した。
16. 戸根与八郎「杉之森遺跡」（新潟県埋蔵文化財報告書第8）1976年  
尚報告にはないが前出の曾根遺跡に於ける第1号井戸が灰に覆われていたのを実見している。
17. 「温古之禁 第32編」（温古談話会）1892年
18. 立川喜八郎「ふるさとの地名龜田」（龜田町教育委員会他）1982年



遺跡全景（発掘調査前）



1



2

発掘風景



1



2

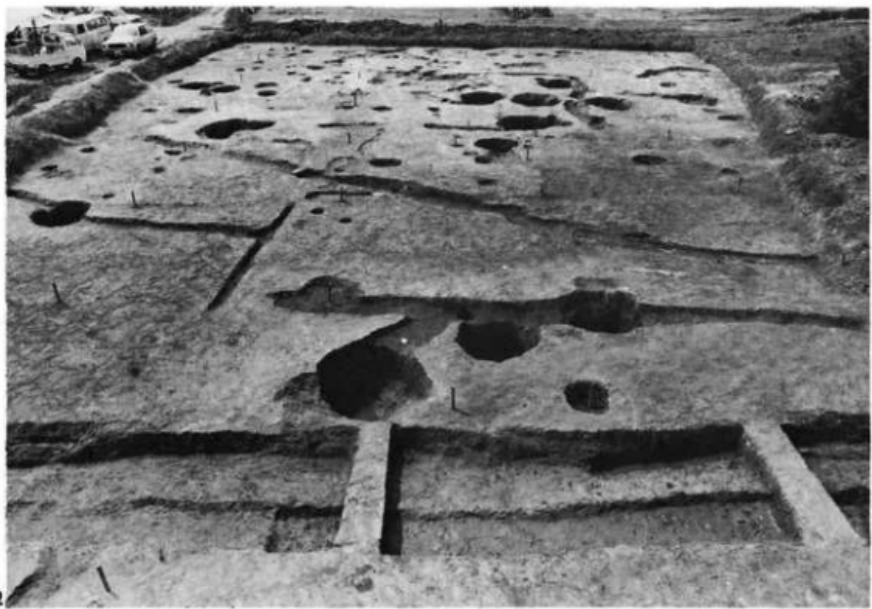
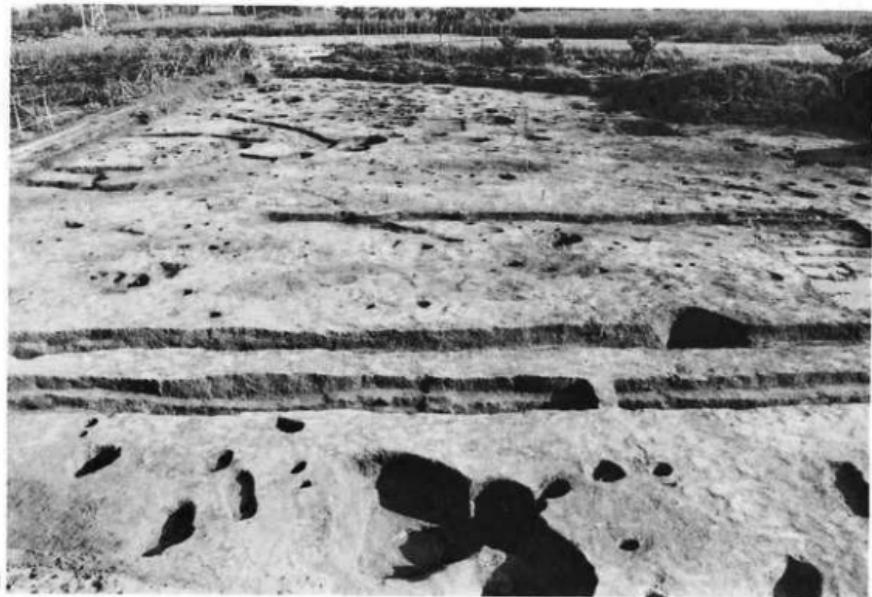
1. 第2区全景

2. 第1南区ピット群



1. 第1南区の遺構群

2. 1号溝東南端



1. 第1区南側全景

2. 第1区北側全景



1



2

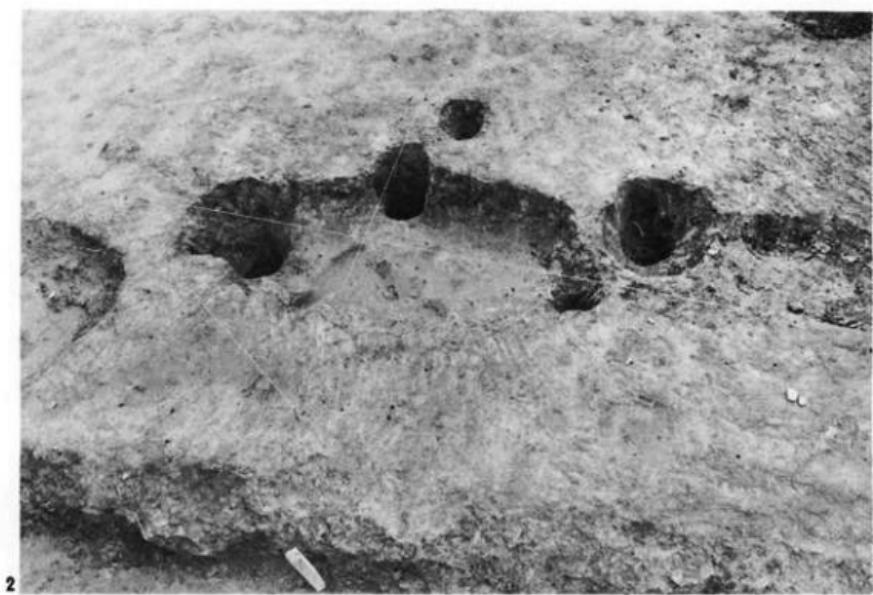
1. 第4層遺物出土状況

2. ピット内遺物出土状況



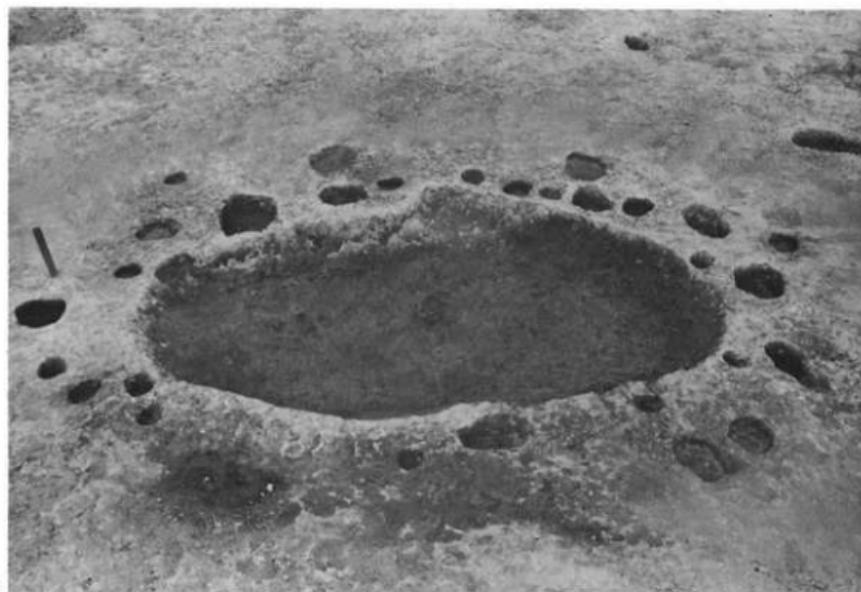
1. 住居址発掘風景

2. 住居址



1. 1号小形建物址

2. 3号小形建物址



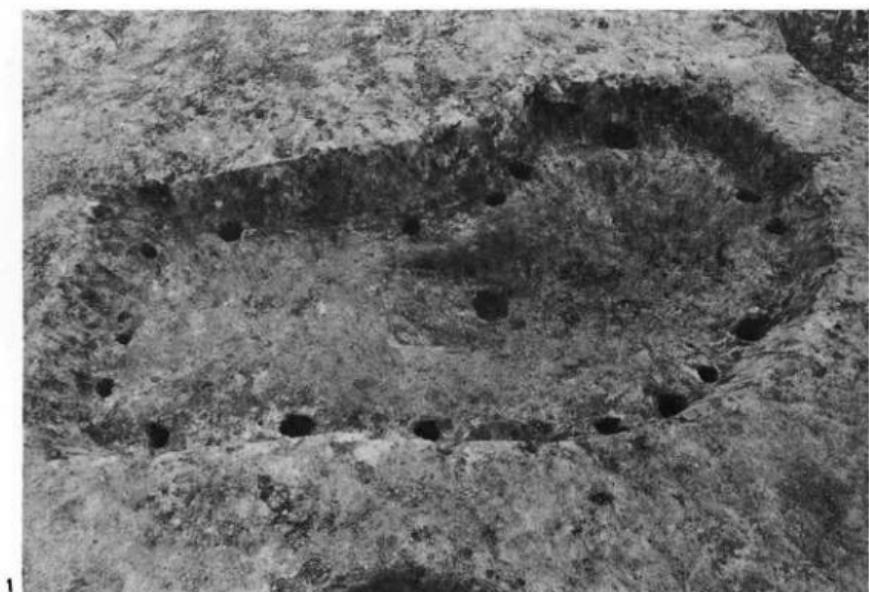
1



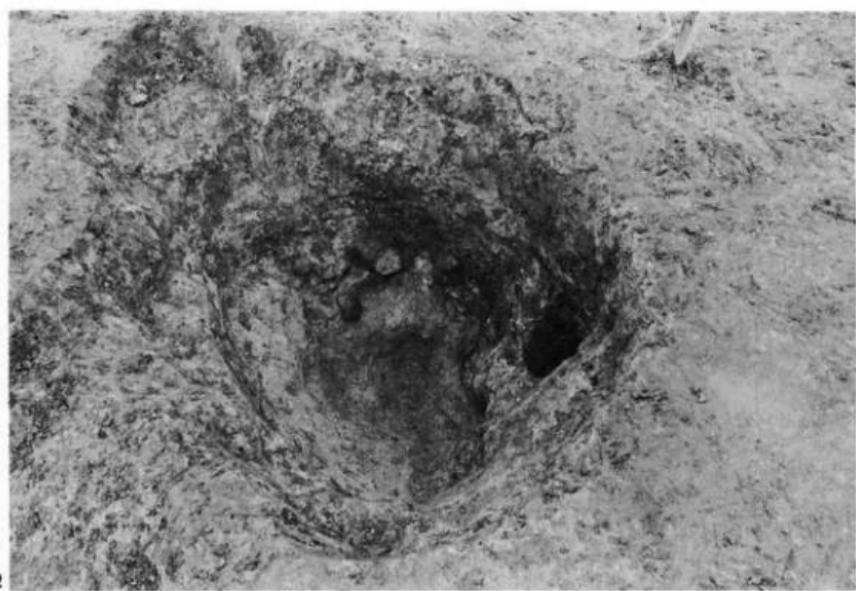
2

1. 2号小形建物址

2. 2号小形建物址内の遺物出土状況



1



2

1. 5号小形建物址

2. 2号火床



1



2

1. 1号火床遺物出土状況

2. 1号火床



1



2

1号構（部分）



1. 2号（左）3号溝

2. 二重周溝遺物



1



2

1. 3号井戸

2. 2号井戸

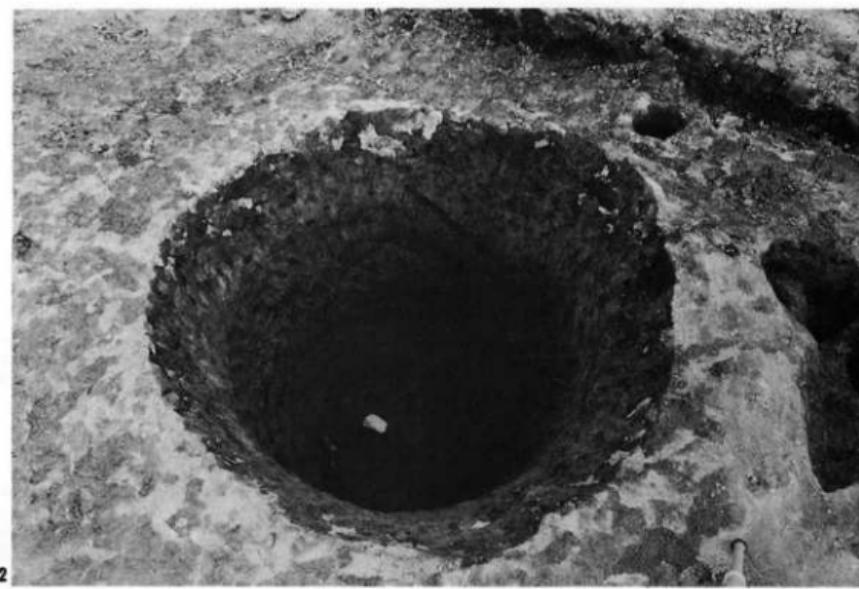


1. 3号井戸

2. 3号井戸柱穴



1



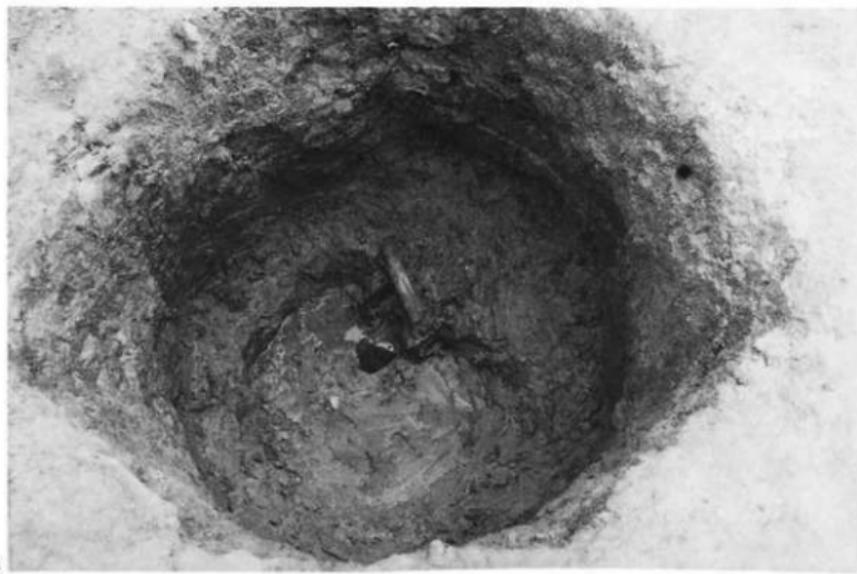
2

1. 第4号井戸

2. 第23号井戸



1



2

1. 15号、14号（右）

2. 15号土坑



1



2

1. 17号井戸中層

2. 17号井戸



1



2



3

1. 第17号井戸隅柱納組

2. 第17号井戸上層

3. 第25号井戸



1



2



3



4

1. 16号井戸

2. 16号井戸部分

3.4. 16号井戸構造材



1



2

1. 第24号井戸

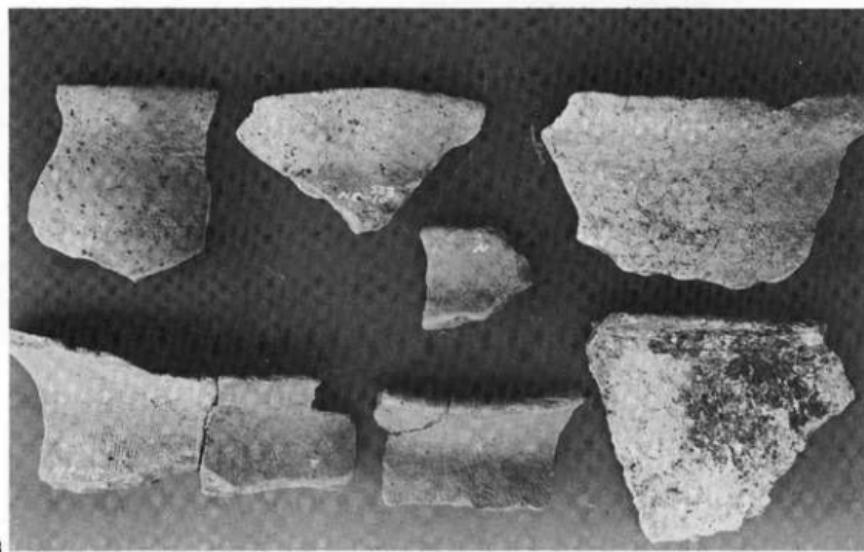
2. 第19号井戸



1



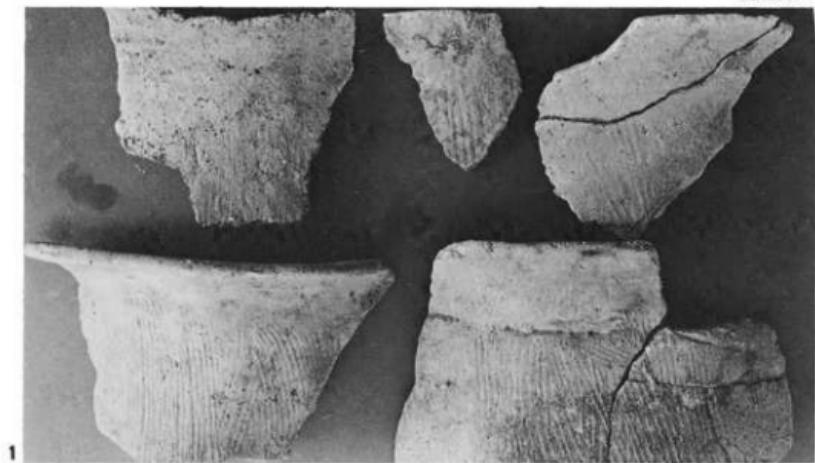
2



3

1. 2. 土師式土器 1 類

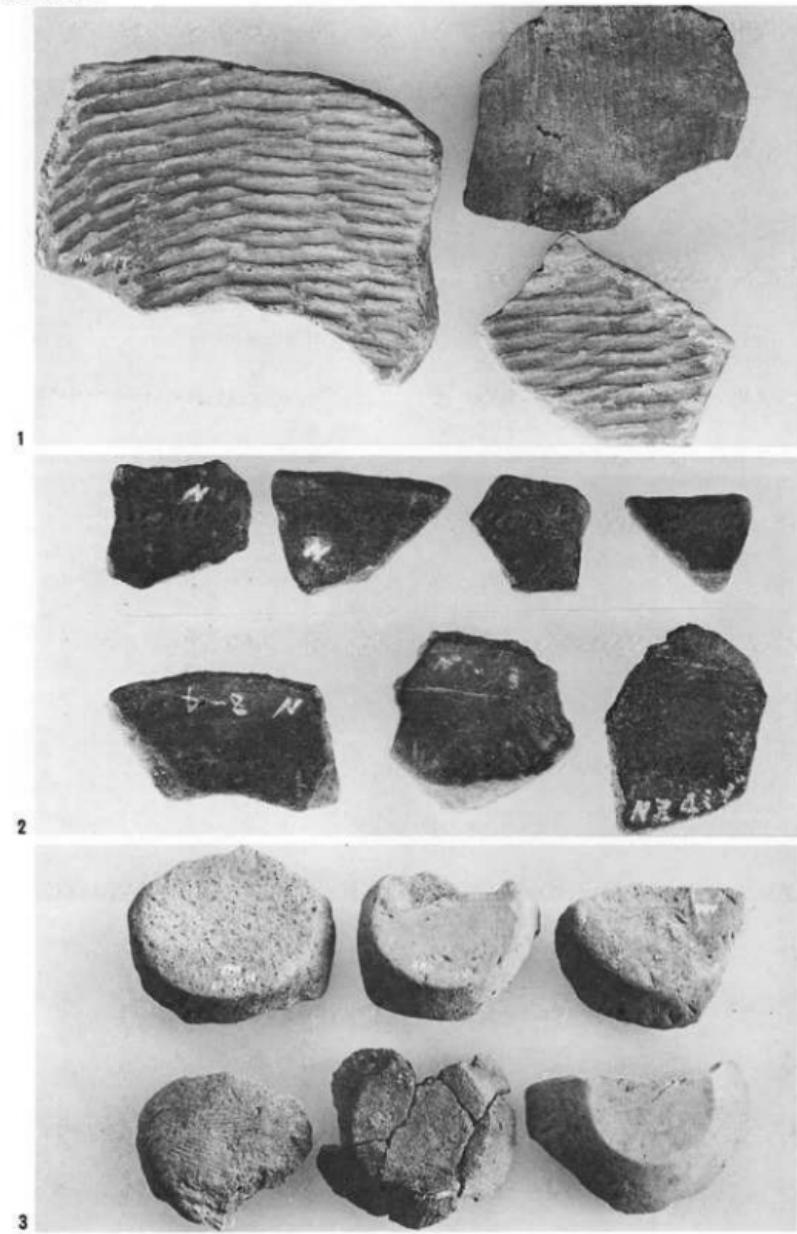
3. 土師式土器 1、2 類



1. 土師式土器

2. 土師式土器 2 類

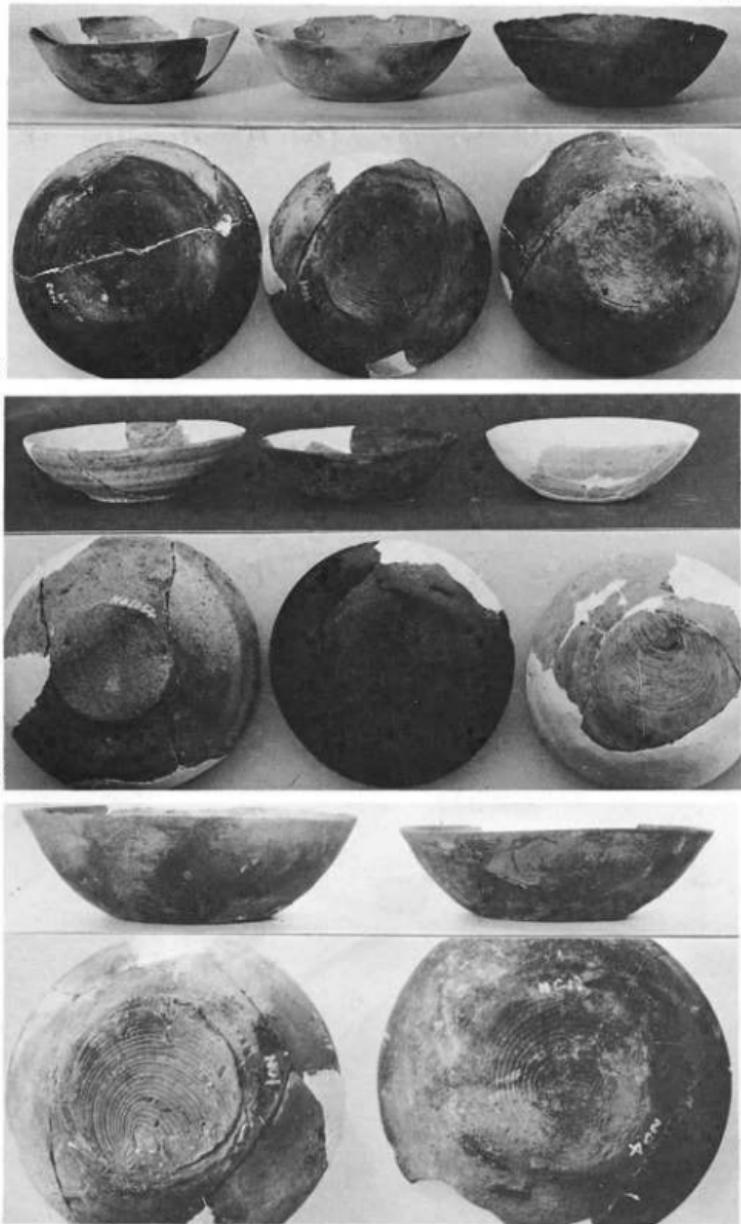
3. 土師式土器底部



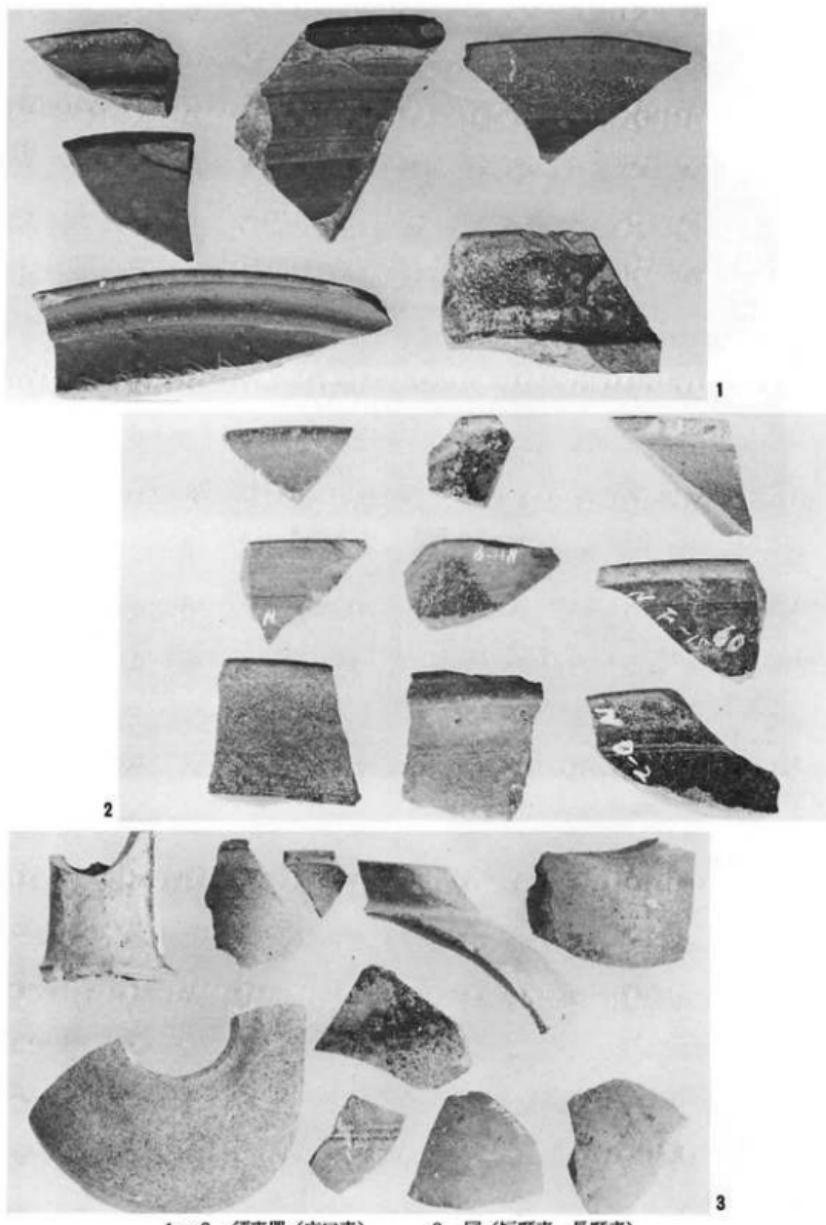
1. 土師式土器丹繪

2. 黒色土器

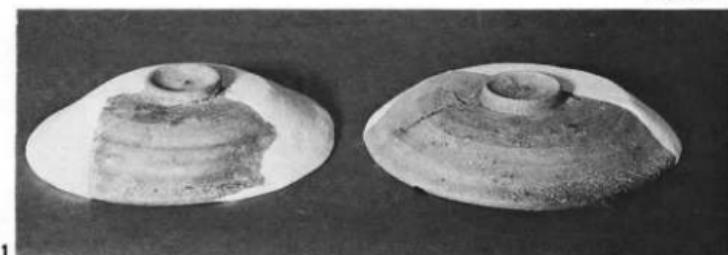
3. 土師式土器底部 1、2類



1～3 土師式土器3類（土師質土器）



1～2. 須恵器（広口壺） 3. 同（短頸壺、長頸壺）



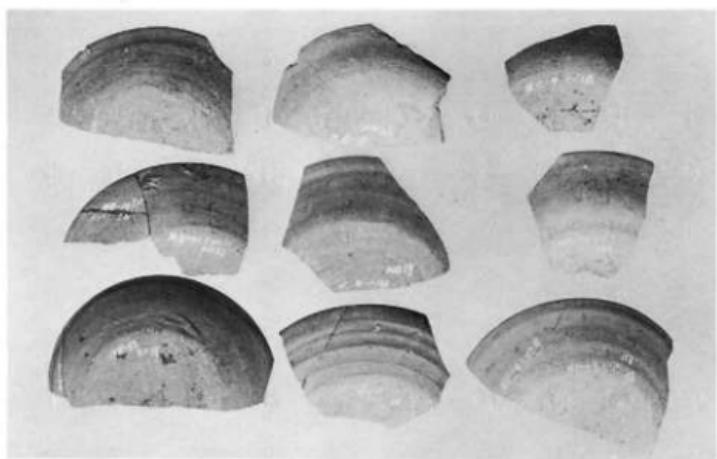
1



2



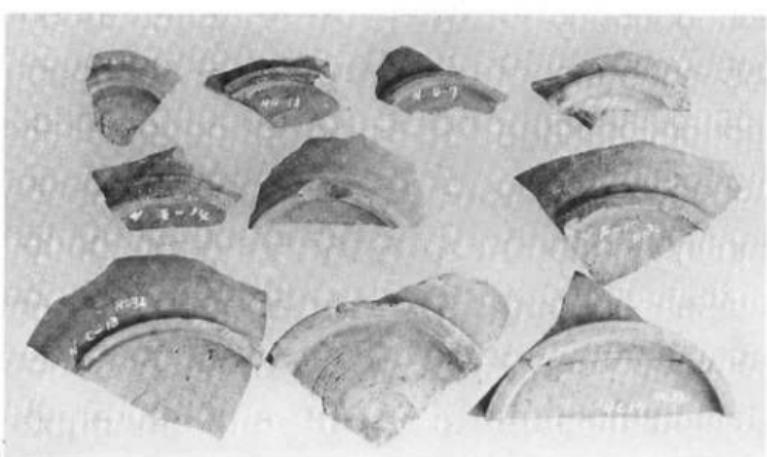
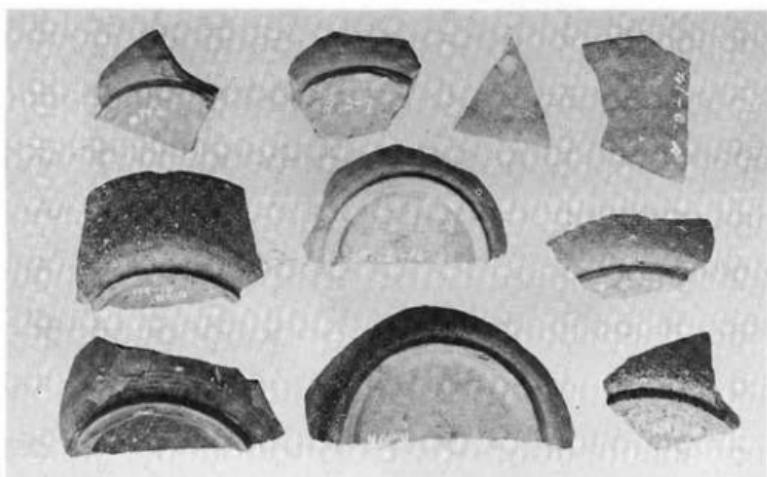
3



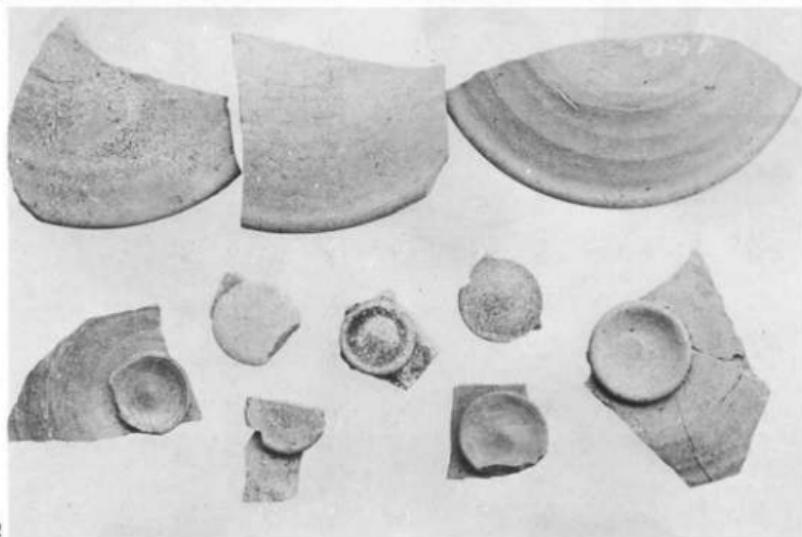
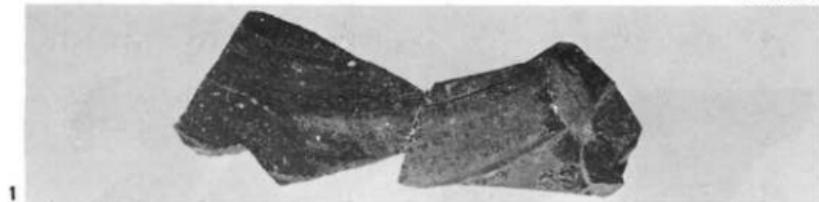
4

1. 須惠器環蓋

2 ~ 4. 須惠器環



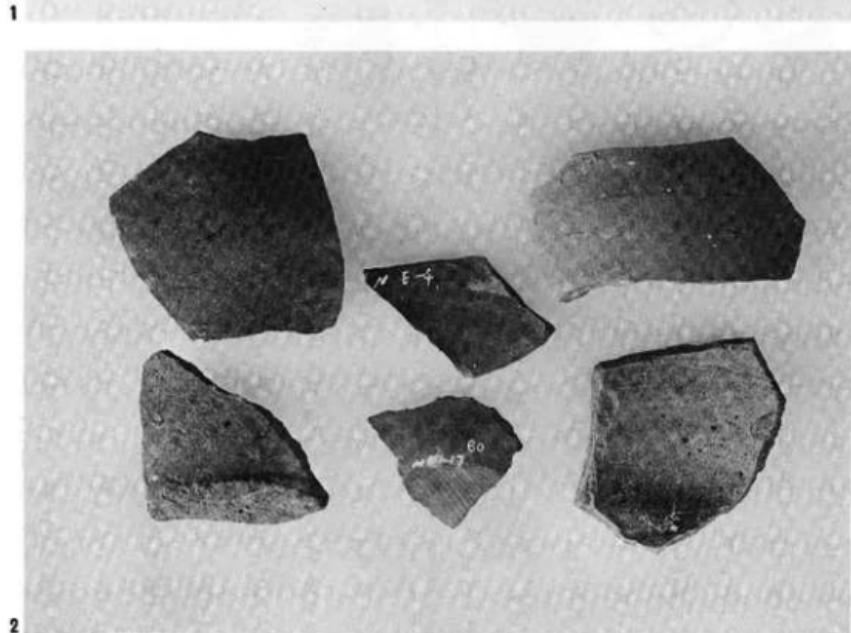
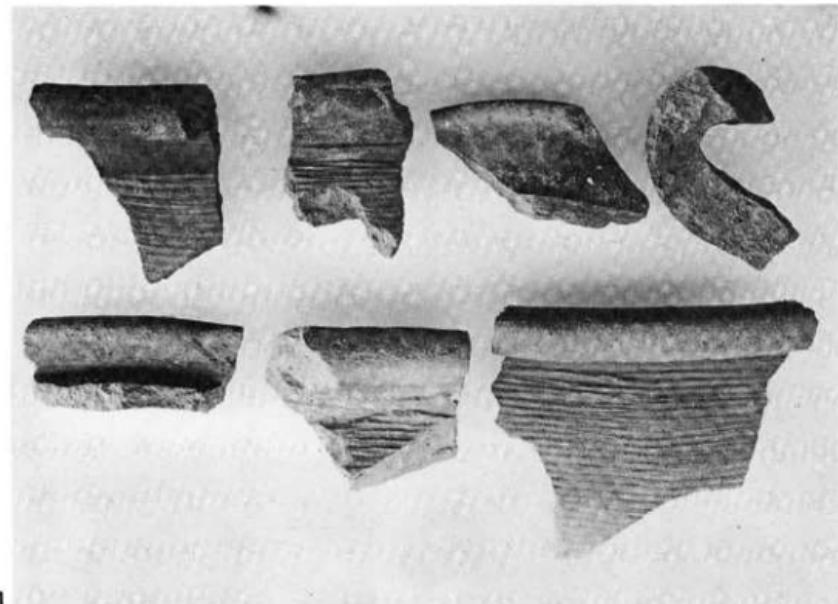
1 ~ 3　須恵器範



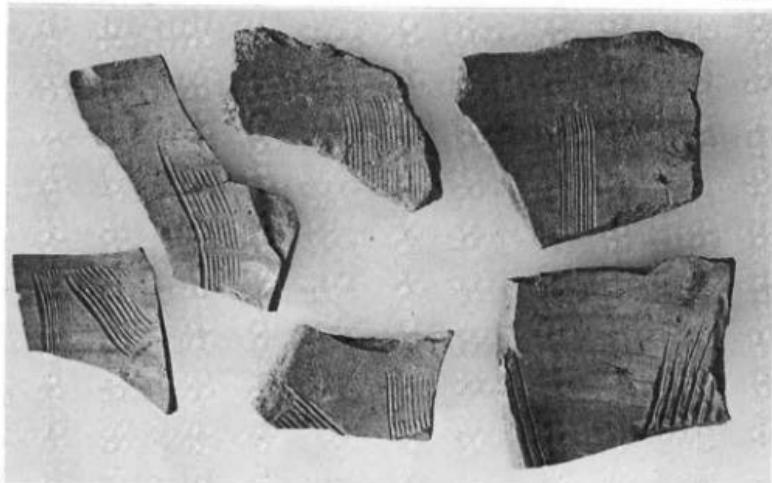
1. 須恵器有耳器

2. 須恵器環蓋

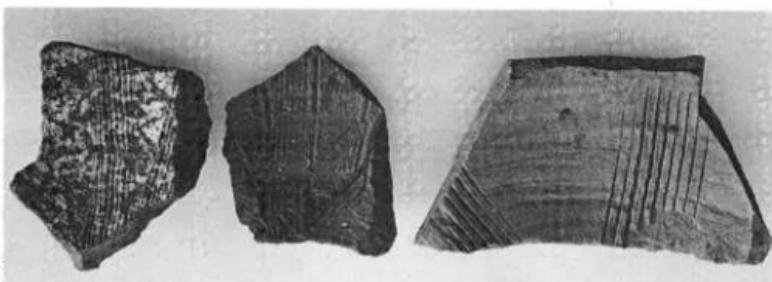
3. 須恵器刻印



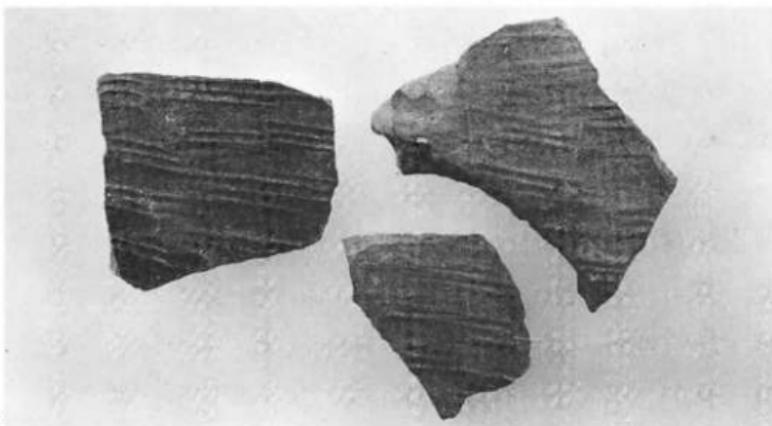
1. 須恵器系中世陶器甕 2. 臺



1



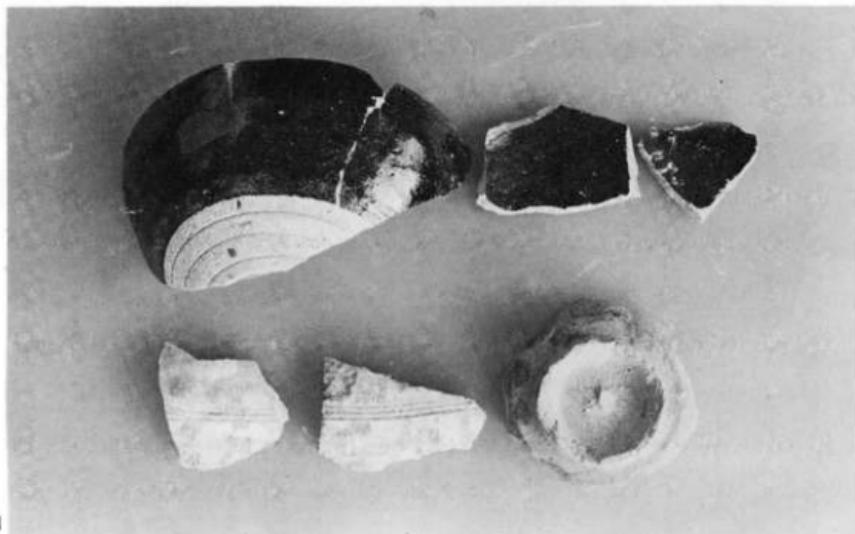
2



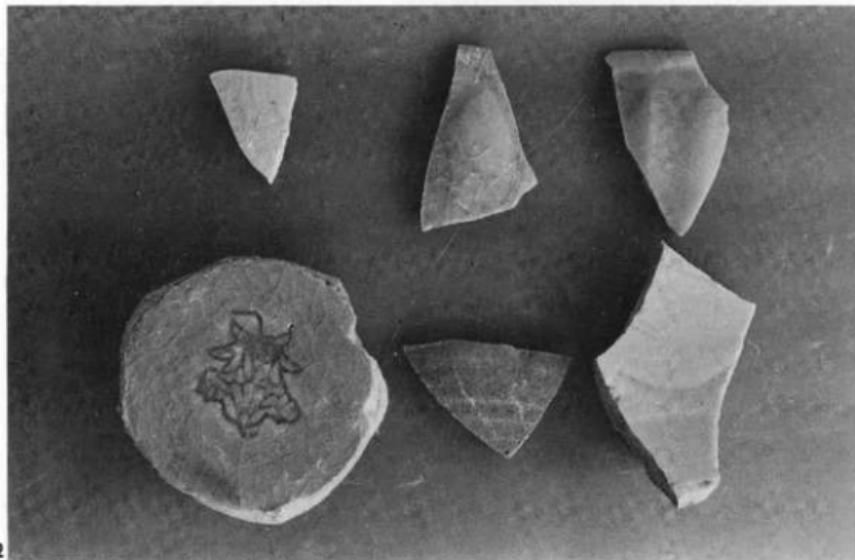
3

1.2. 須恵器系中世陶器摺鉢

3. 須恵器系中世陶器壺片の施紋



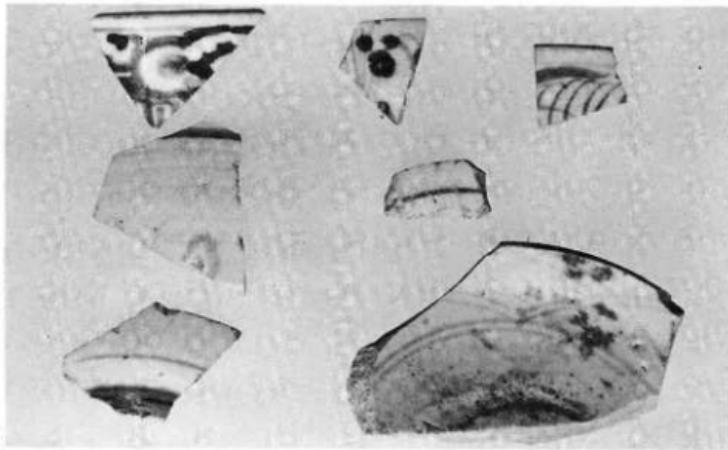
1



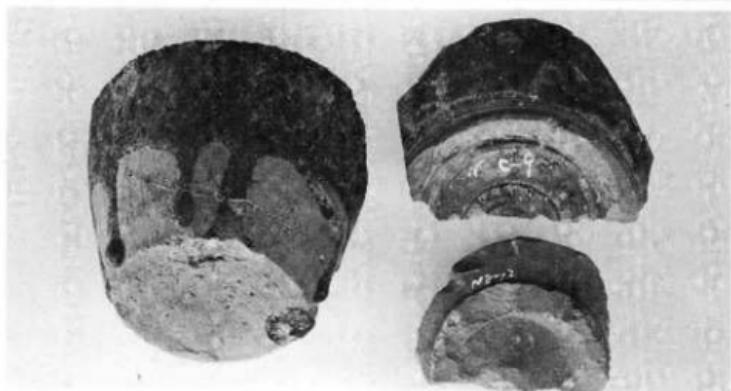
2

1. 中世瀬戸系陶器

2. 青磁碗



1

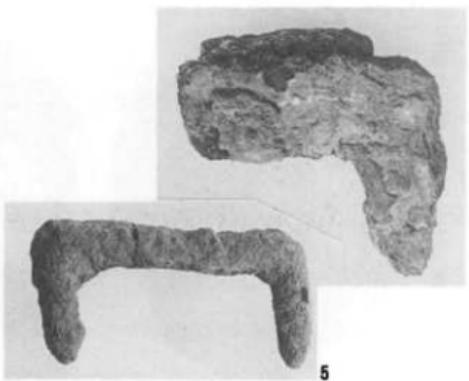


2



3

1. 染付 2. 近世陶器 3. 昭和元年



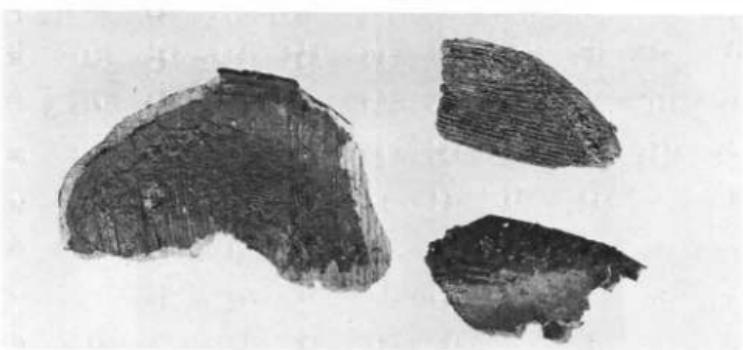
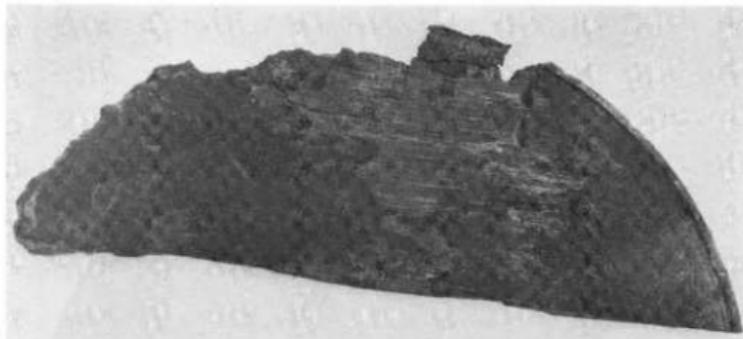
1. 土鍤

2. 石鍤

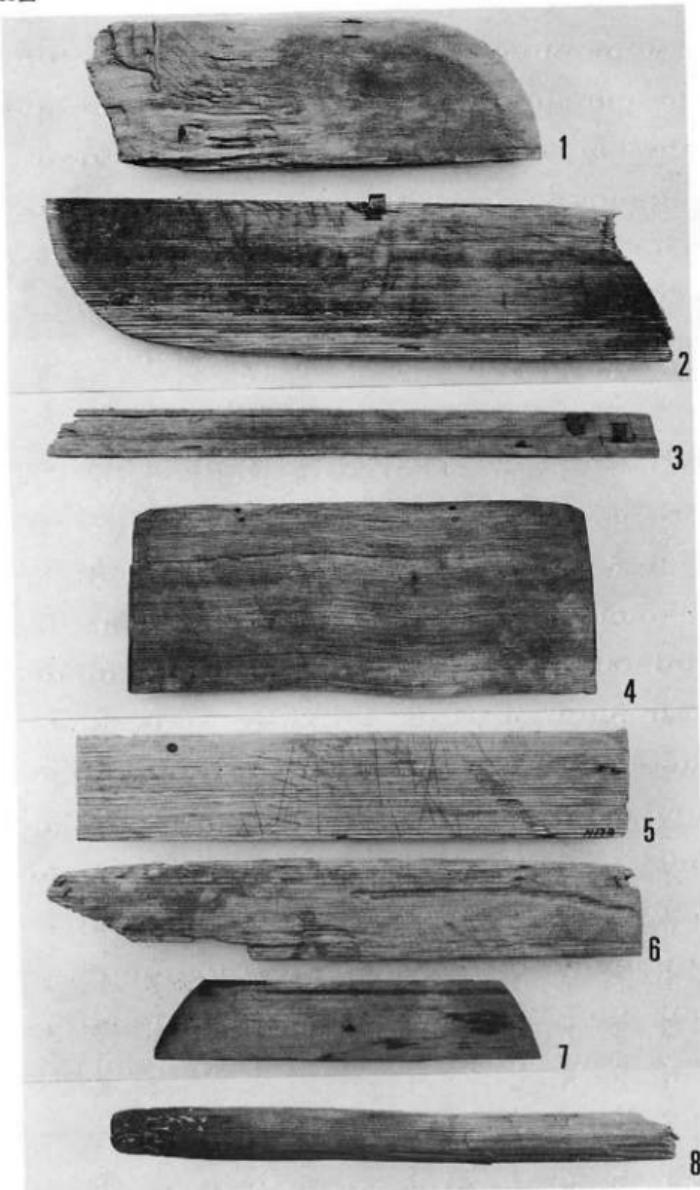
3. 羽口

4. 5. 鉄製品

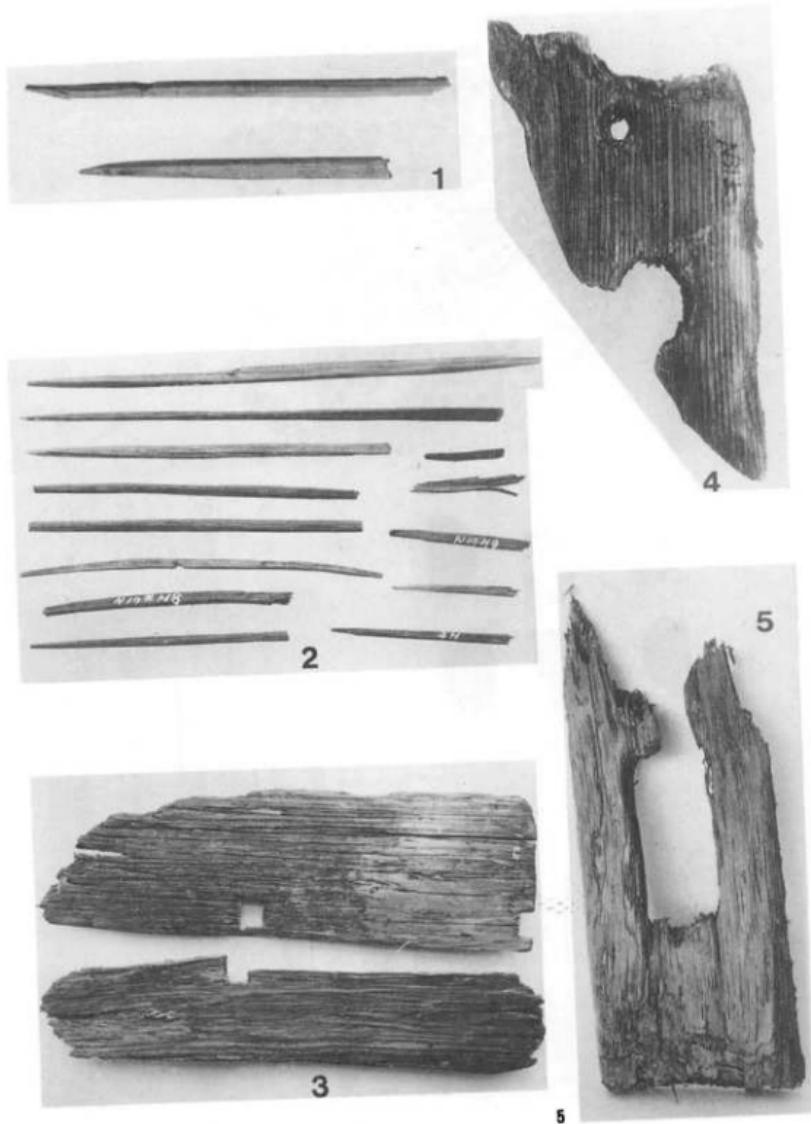
6. ドロメンコ



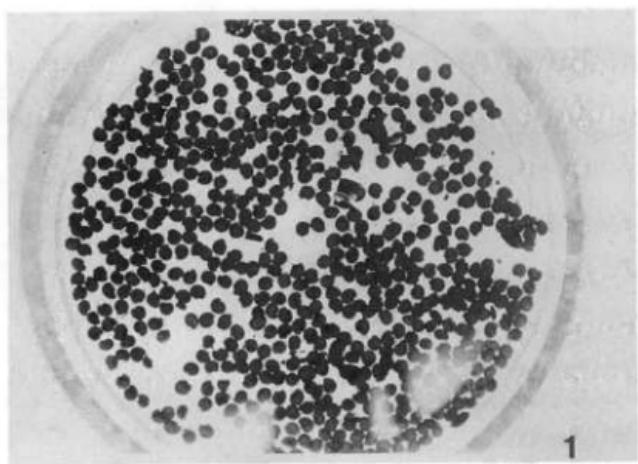
1. 盆 (17号井戸)      2. 木坏 (17号井戸)      3. 櫛      4. 漆剥離片



1~8 木器片（櫛、折敷、他）



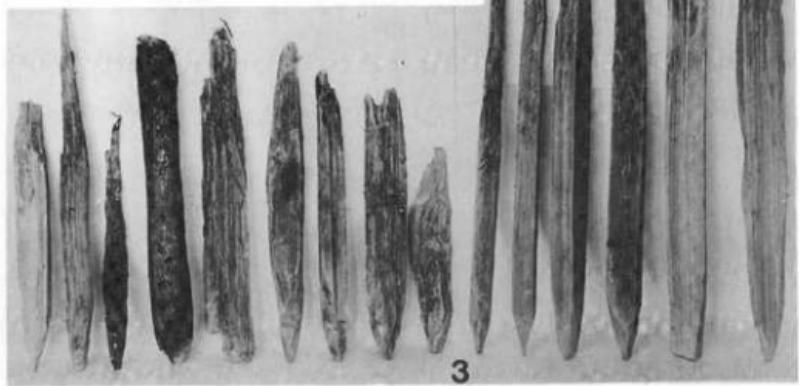
1.2. 箸 3~5 木器片



1



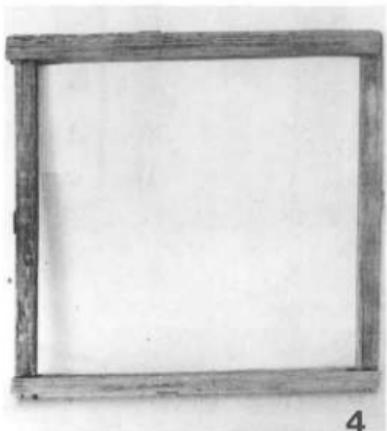
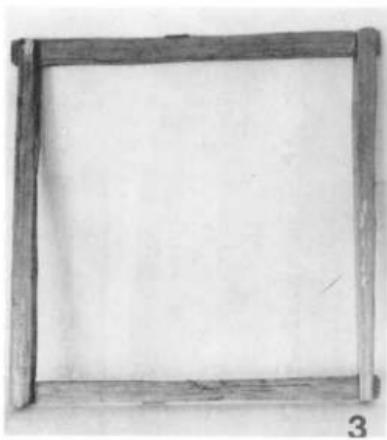
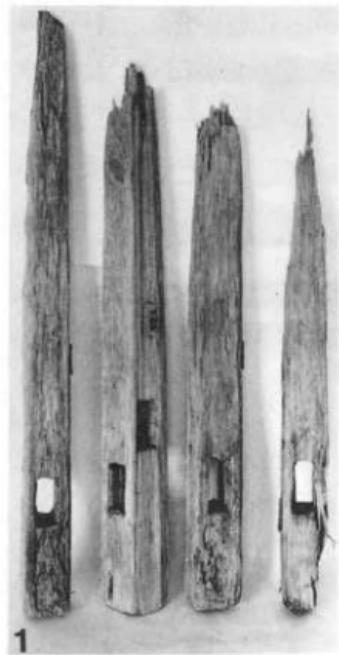
2



3

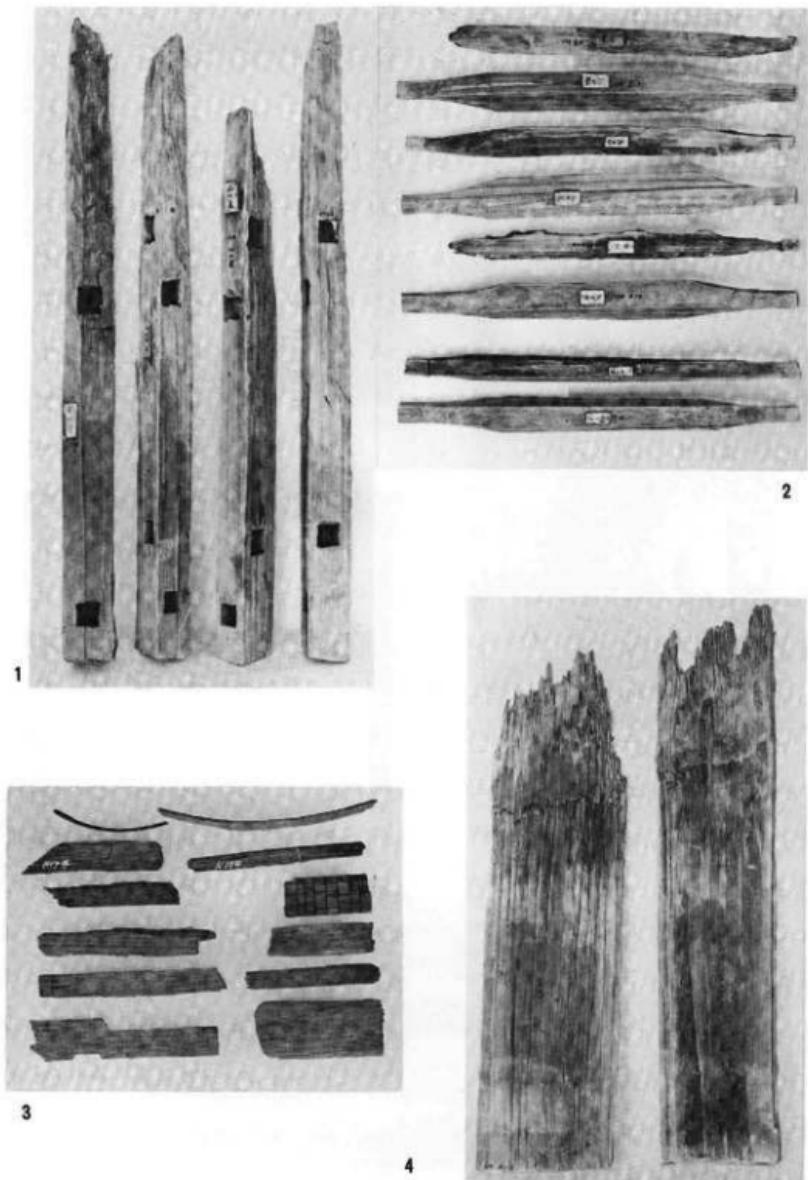
1.2. 種子類

3. 坑（1号溝）



1. 1号井戸隅柱 2. 1号井戸横桟 3. 2号井戸底部横桟 4. 3号井戸底部横桟

図版第40図



1. 17号井戸隅柱 2. 17号井戸横桟 3. 17号井戸曲物まなこ片 4. 17号井戸側板

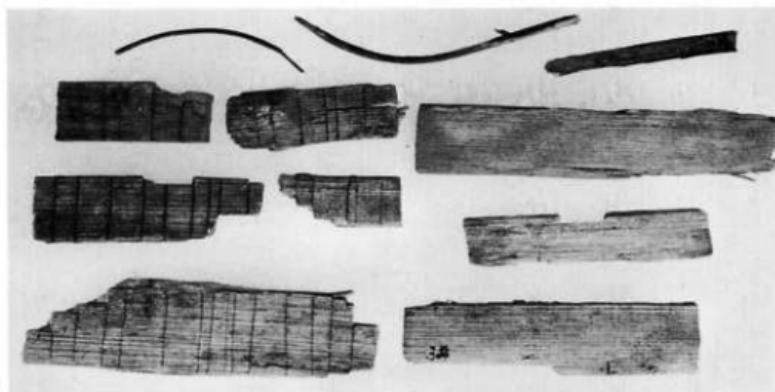
1



2



3



1.2. 25号井戸側の曲物

3. 3号井戸曲物まなこ片

亀田文化財調査報告 ②

中 の 山 遺 跡

1982

発行日 昭和 58 年 3 月 31 日

発行者 亀田町教育委員会 TEL 81-2111

印刷所 株式会社 亀田印刷所 TEL 81-3007